

# 城山遺跡 第72地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

埼玉県志木市教育委員会

# 城山遺跡 第72地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

埼玉県志木市教育委員会



## はじめに

志木市教育委員会  
教育長 白砂 正明

ここに刊行する『城山遺跡第72地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』は、平成23年度に受託事業として、教育委員会が発掘調査を実施した成果をまとめたものです。

城山遺跡については、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世、近代までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。

遺跡内には、市指定文化財の「城山貝塚」、大石信濃守の居城跡と考えられる「柏の城」をはじめ、日本最古の土器群に位置付けられる「爪形文系土器」が発見されるなど、注目を浴びています。

さて、今回報告する第72地点の調査成果ですが、縄文時代の土坑が1基、古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡が4軒、中世以降の土坑が14基、井戸跡が1基、溝跡が4条の遺構が検出されました。遺物は縄文時代の土器・石器、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器、古墳時代後期から平安時代にかけての須恵器・土師器・石製品・金属製品、中世以降の陶器・磁器・土器・金属製品など多種多様なものが出土しました。また、縄文時代中期以降に埋没した谷の様相も明らかになり、当時の地形的環境を知る上においても、貴重な発見がありました。

以上のように、私たちが生活を営んでいる足下には、古の人々が力強く生きた痕跡を示す遺構や遺物が存在し、この脈々とした歴史の上に現在の志木市や私たちの存在があるといえます。今回の調査成果を記した本書が、郷土の歴史研究のために広く役に立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた土木工事主体者及び土地所有者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます次第です。

# 例 言

1. 本書は、平成 23 年度に発掘調査を実施した、埼玉県志木市に所在する城山遺跡第 72 地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、共同住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査として、工事主体者である個人から委託を受け、志木市教育委員会が調査主体者として実施した。
3. 発掘調査の実施にあたり、大成エンジニアリング株式会社（代表取締役 古川健）に支援業務を委託した。
4. 発掘作業は平成 23 年 6 月 6 日から 7 月 15 日まで行い、整理作業・報告書作成は平成 23 年 7 月 18 日から平成 24 年 3 月 31 日まで大成エンジニアリング府中事務所で行った。
5. 本書は尾形則敏・徳留彰紀が監修し、編集は大成エンジニアリング株式会社 村上孝司の指示を受けた青池紀子が行った。執筆は第 1 章第 1 節を尾形則敏、第 2 章第 1 節を徳留彰紀、それ以外を村上が担当した。
6. 整理作業は遺構を村上、平安時代までの遺物を青池、中世以降の遺物を原みちるが担当した。平安時代までの遺物観察表は青池、中世以降の遺物観察表は原が作成した。
7. 本書の写真は遺構を村上・青木雄大が、遺物を山寄裕子が撮影した。
8. 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その結果を第 4 章に掲載した。
9. 調査の資料は志木市立埋蔵文化財保管センターが保管している。
10. 調査において、以下の項目を委託した。  
土工事（表土掘削・埋め戻し）：有限会社久松興業  
基準点測量：中央航業株式会社
11. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。  
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館  
江原 順 ・ 加藤秀之 ・ 川畑隼人 ・ 隈本健介 ・ 小出輝雄 ・ 斉藤 純 ・ 斉藤欣延 ・ 斯波 治 ・ 鈴木一郎 ・ 高崎直成 ・ 田中広明 ・ 照林敏郎 ・ 中岡貴裕 ・ 野沢 均 ・ 早坂廣人 ・ 堀 善之 ・ 前田秀則 ・ 松本富雄 ・ 柳井章宏 ・ 山本 龍 ・ 和田晋治 ・ 渡辺邦仁

12. 調査組織は以下の通りである。

【志木市教育委員会組織】

調査主体者	志木市教育委員会
教育長	白砂正明(平成20年4月～)
教育政策部次長	丸山秀幸(平成23年4月～)
生涯学習課長	土岐隆一(平成21年4月～)
生涯学習課主幹	松井俊之(平成23年1月～)
生涯学習課主査	尾形則敏(平成21年4月～)
生涯学習課主任	松永真知子(平成18年4月～)
〃	武井香代子(平成22年4月～)
生涯学習課主事	徳留彰紀(平成22年4月～)
志木市文化財保護審議会	神山健吉(会長)
	井上國夫・高橋長次・高橋 豊・内田正子(委員)

【大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部組織】

調査部門長	河野一也	調査員	青木雄大
調査課長	堀苑孝志		粕谷 隆
工務課長代理	浅見克己		青池紀子
主任調査員	村上孝司		山内淳司

発掘作業参加者

石井加代・稲川伸子・内村一洋・木村 充・佐久間正崇・清水吉光・鈴木勝弘・  
瀬戸宏征・田浦 泉・堤 亮太・永吉峰子・並木智子・野間利恵・橋本美奈子・  
松尾貴弘・宮前安彦

整理作業参加者

山寄裕子・原みちる  
東 早花・加藤宏美・上條房善・佐藤健介・末松 宏・中村君江・長谷明美・  
柳田美須穂・山下圭子・山下賢一・吉岡理香








13. 本報告に係る文化財保護法に基づく通知等については下記のとおりである。

周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知) /平成23年6月10日付け  
教生文 第4 - 235号

埋蔵文化財包蔵地の変更増補及び周知について(通知) /平成23年8月10日付け  
教生文 第9 - 52号

埋蔵物の文化財認定について(通知) /平成23年9月2日付け 教生文 第7 - 161号

# 凡 例

1. 本書で使用した地図は、下記地形図・地図を基に作成した。
  - ・「志木市全図」アジア航測株式会社調製
  - ・「明治前期・昭和前期東京都市地図 2 東京北部」貝塚爽平監修、清水靖夫編集、柏書房株式会社発行 1996 年
2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。
3. 挿図の縮尺は各挿図に示した。
4. 平面図の方位は真北を示す。
5. 標高は T.P.（東京湾中等潮位）を採用した。遺構実測図中の数値はセクション図の水糸レベルを示す。
6. 遺構平面図と遺物実測図中のトーンおよび記号は以下の通りである。
  - ・地山：
  - ・カマド・炉・焼土範囲：
  - ・カマド（粘土範囲）、赤色塗彩の土器（赤彩部分）：
  - ・硬化面範囲：
  - ・繊維土器：
  - ・石器磨痕：
  - ・攪乱範囲：上記以外は各図にその内容を示す。
7. 遺物拓影図は、縄文土器は向かって左に外面を、右に内面を示し、それ以外の遺物拓影図は向かって左に内面を、右に外面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左に外面を、内面のみの場合には、向かって右に内面を示した。底面は下に示した。
8. 遺構覆土・土器の色調は『新版標準土色帖』2008 年度版（小山正忠・竹原秀雄・著者、農林水産省農林水技術会議事務所監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行）を参考した。
9. 写真図版の縮尺は不同である。
10. 遺構の略記号は以下の通りである。
  - H = 古墳時代後期～平安時代の住居跡 D = 土坑 W = 井戸跡 M = 溝跡
  - NR = 埋没谷 P = ピット
11. 引用・参考文献は、第 4 章を除き巻末に一括掲載した。

---

# 目 次

---

はじめに

例 言

凡 例

目 次

挿 図 目 次

表 目 次

図 版 目 次

第 1 章 遺跡の立地と環境 ..... 1

第 1 節 市域の地形と遺跡 ..... 1

第 2 節 遺跡の概要 ..... 7

第 2 章 発掘調査の概要 ..... 8

第 1 節 調査に至る経緯 ..... 8

第 2 節 調査の経過 ..... 11

第 3 章 検出された遺構と遺物 ..... 12

第 1 節 旧石器時代 ..... 12

第 2 節 縄文時代 ..... 15

第 3 節 弥生時代後期から古墳時代前期 ..... 20

第 4 節 古墳時代後期から平安時代 ..... 21

第 5 節 中世以降 ..... 31

第 4 章 自然科学分析 ..... 52

第 1 節 埋没谷埋積層の層序対比 ..... 52

第 5 章 調査のまとめ ..... 58

第 1 節 旧石器時代について ..... 58

第 2 節 縄文時代の遺構・遺物について ..... 58

第 3 節 古墳時代後期から平安時代の遺構・遺物について ..... 59

第 4 節 中世以降の遺構・遺物について ..... 60

図 版

報告書抄録

奥 付



## 挿 図 目 次

第 1 図	市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000・1 / 600,000)	3
第 2 図	城山遺跡の調査地点 (1 / 3,000)	9
第 3 図	確認調査図・遺構分布図 (1 / 400・1 / 150)	10
第 4 図	試掘坑分布図 (1 / 500)	12
第 5 図	1号試掘坑 (1 / 60)	13
第 6 図	2号試掘坑 (1 / 60)	13
第 7 図	3号試掘坑 (1 / 60)	14
第 8 図	833号土坑 (1 / 60)	15
第 9 図	埋没谷 (1 / 100)	16
第 10 図	埋没谷 (1 / 100)	17
第 11 図	埋没谷出土遺物 (1 / 3・1 / 4)	18
第 12 図	遺構外出土遺物 (1 / 3)	19
第 13 図	遺構外出土石器 (1 / 3)	20
第 14 図	277号住居跡 (1 / 60)	21
第 15 図	277号住居跡出土遺物 (1 / 2)	22
第 16 図	278号住居跡 (1 / 60)	23
第 17 図	279号住居跡・カマド (1 / 60・1 / 30)	24
第 18 図	279号住居跡貯蔵穴・ピット・掘り方 (1 / 60・1 / 30)	25
第 19 図	279号住居跡出土遺物 (1 / 4)	26
第 20 図	280号住居跡・炉・貯蔵穴 (1 / 60・1 / 30)	27
第 21 図	280号住居跡ピット (1 / 30)	28
第 22 図	280号住居跡出土遺物 (1 / 4)	28
第 23 図	遺構外出土遺物 (1 / 4)	29
第 24 図	ピット分布図 (1 / 150)	30
第 25 図	土坑分布図 (1 / 150)	32
第 26 図	820号土坑出土遺物 (1 / 3)	33
第 27 図	B群2類土坑 (1 / 60)	35
第 28 図	822号土坑出土遺物 (1 / 3)	36
第 29 図	C群土坑 (1 / 60)	38
第 30 図	D群土坑 (1 / 60)	39
第 31 図	40号井戸跡 (1 / 60)	40
第 32 図	54・55号溝跡 (1 / 50・1 / 100)	42
第 33 図	56号溝跡 硬化面1 (1 / 50・1 / 100)	43
第 34 図	56号溝跡 硬化面2 (1 / 50・1 / 100)	44
第 35 図	57号溝跡 (1 / 50・1 / 100)	45

第 36 図	87 号ピット出土遺物 (1 / 3) .....	46
第 37 図	ピット分布図 (1 / 150) .....	47
第 38 図	遺構外出土遺物 (1 / 3・1 / 1) .....	51
第 39 図	3 号試掘坑の重鉍物組成および火山ガラス比 .....	54
第 40 図	火山ガラスの屈折率 .....	55

---

## 表 目 次

---

第 1 表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧 .....	1
第 2 表	埋没谷出土遺物一覧 .....	19
第 3 表	埋没谷出土石器一覧 .....	19
第 4 表	遺構外出土遺物一覧 .....	20
第 5 表	遺構外出土石器一覧 .....	20
第 6 表	277 号住居跡出土遺物一覧 .....	22
第 7 表	279 号住居跡出土遺物一覧 .....	26
第 8 表	280 号住居跡出土遺物一覧 .....	28
第 9 表	ピット一覧 .....	29
第 10 表	遺構外出土遺物一覧 .....	29
第 11 表	820 号土坑出土遺物一覧 .....	33
第 12 表	822 号土坑出土遺物一覧 .....	36
第 13 表	B 群土坑一覧 .....	39
第 14 表	C 群土坑一覧 .....	39
第 15 表	D 群土坑一覧 .....	40
第 16 表	井戸跡一覧 .....	40
第 17 表	溝跡一覧 .....	45
第 18 表	87 号ピット出土遺物一覧 .....	46
第 19 表	ピット一覧 (1) .....	46
第 20 表	ピット一覧 (2) .....	48
第 21 表	ピット一覧 (3) .....	49
第 22 表	ピット一覧 (4) .....	50
第 23 表	遺構外出土遺物一覧 .....	51
第 24 表	遺構外出土銭貨一覧 .....	51
第 25 表	遺構外出土遺物種別点数一覧 .....	51
第 26 表	重鉍物・火山ガラス比分析結果 .....	55

## 図版目次

- 図版 1 1. 調査区近景（北から） 2. 1号試掘坑南壁断面（北から）  
3. 2号試掘坑礫出土状態（北から） 4. 2号試掘坑南壁断面（北から）  
5. 3号試掘坑コラムサンプル採取地点（北から） 6. 833号土坑（東から）  
7. 277号住居跡（北東から）
- 図版 2 1. 277号住居跡遺物出土状態（北から） 2. 278号住居跡（西から）  
3. 279号住居跡（南西から） 4. 279号住居跡カマド（南西から）  
5. 279号住居跡貯蔵穴遺物出土状態（南から） 6. 280号住居跡（東から）  
7. 280号住居跡炉跡（東から） 8. 280号住居跡貯蔵穴遺物出土状態（南から）
- 図版 3 1. 819号土坑（西から） 2. 820号土坑（東から） 3. 821号土坑（西から）  
4. 822号土坑（南から） 5. 823号土坑（西から） 6. 824号土坑（西から）  
7. 825号土坑（西から） 8. 827号土坑（南から）
- 図版 4 1. 828号土坑（東から） 2. 829号土坑（西から） 3. 831号土坑（東から）  
4. 40号井戸跡（南から） 5. 54・55号溝跡（西から）  
6. 56号溝跡硬化面1検出状態（南東から） 7. 56号溝跡硬化面2検出状態（南東から）  
8. 56号溝跡硬化面2検出状態（北西から）
- 図版 5 1. 埋没谷（北から） 2. 埋没谷南壁断面（北から）
- 図版 6 1. 調査区東側全景（南西から） 2. 調査区西側全景（北から）
- 図版 7 1. 埋没谷出土遺物
- 図版 8 1. 遺構外出土遺物 2. 277号住居跡出土遺物
- 図版 9 1. 279号住居跡出土遺物 3. 280号住居跡出土遺物 3. 遺構外出土遺物
- 図版 10 1. 820号土坑出土遺物 2. 822号土坑出土遺物 3. 87号ピット出土遺物  
4. 遺構外出土遺物
- 図版 11 1. 重鉍物・火山ガラス

# 第1章 遺跡の立地と環境

## 第1節 市域の地形と遺跡

### (1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県南西部に位置し、市の北東は荒川を隔だててさいたま市に、北西は柳瀬川と隔てて富士見市・三芳町に、南西は朝霞市・新座市に接する。市の規模は東西4.73km、南北4.71km、面積9.06km<sup>2</sup>、人口約7万人で水と緑が豊かな都市である。

地理的景観を眺めてみると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,360 m <sup>2</sup>	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	50,500 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m <sup>2</sup>	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 m <sup>2</sup>	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前・後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m <sup>2</sup>	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m <sup>2</sup>	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m <sup>2</sup>	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m <sup>2</sup>	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m <sup>2</sup>	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		477,900 m <sup>2</sup>					

平成23年6月30日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

(6)、<sup>しろやま</sup>城山貝塚(9)を加えた14遺跡である(第1図)。

## (2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7(1995)年度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

### 2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

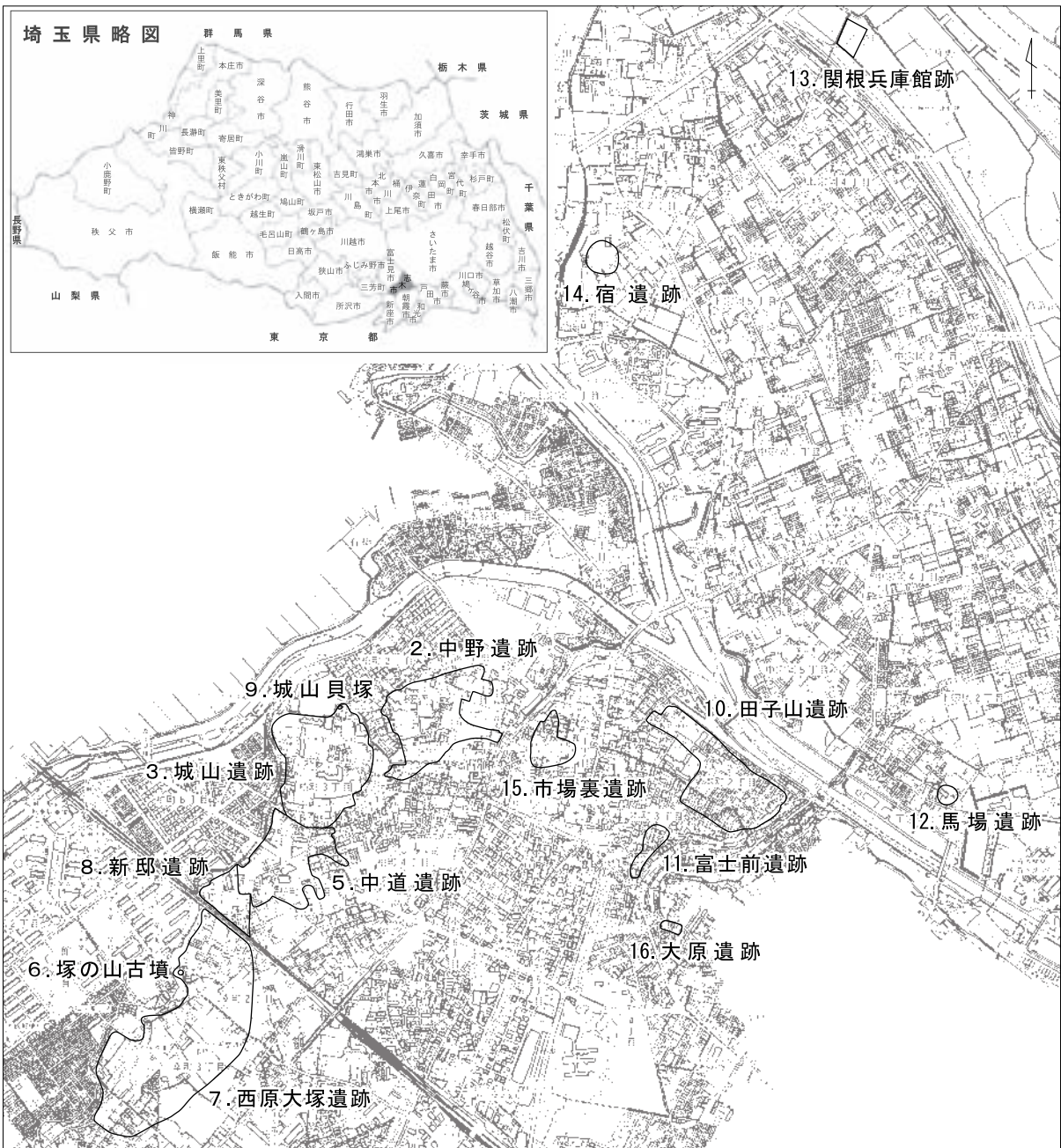
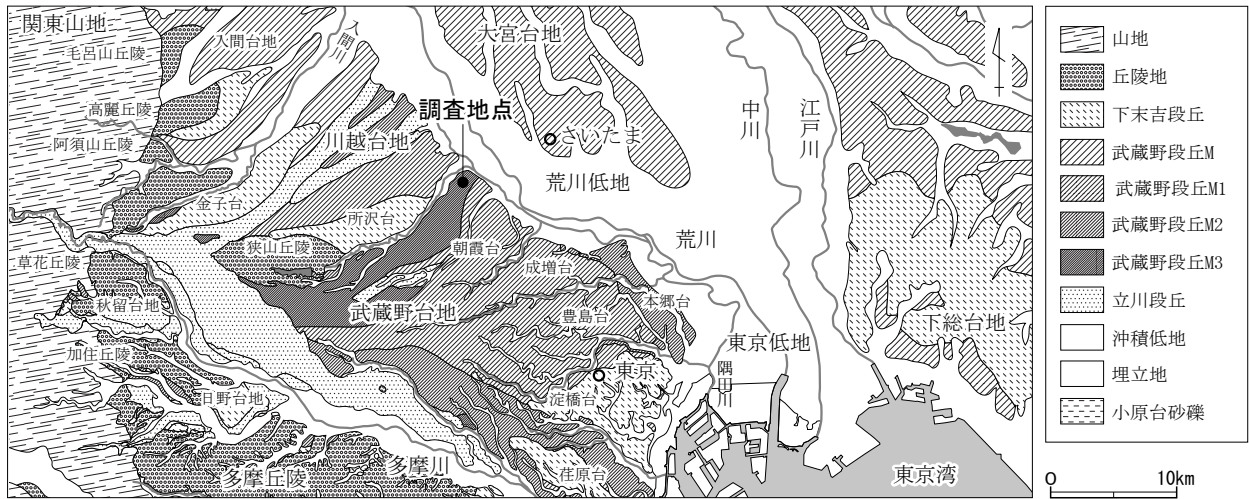
ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2006)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された前期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡(黒浜式期)、城山遺跡では住居跡3軒(諸磯式期)が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2(1990)年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で160軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。

中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるの



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000・1 / 600,000)

みである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴を持つ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

### 3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が550軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物型土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるだろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。

こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

### 4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住

居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を超えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5 mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7 mの不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33 mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

## 5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。最新では、平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査により、平安時代の住居跡から皇朝十二銭の一つである富寿神寶（ふじゅしんぼう）が2枚出土しており、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸柄が出土している。さらにカマドに右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

## 6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『たてむらきゆうき館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『かいこくざつき廻回雑記』（註2）に登場する『おおいしなののかみのやかた大石信濃守館』が「柏の城」に相当し、『おおつかじゆうぎよくぼう大塚十玉坊』についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言える。



であろう（神山 1988・2002）。また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また平成13年の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」<sup>しょうりんざんかんのんじだいじゅいん</sup>関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

## 7. 近世以降

近世以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

### [註]

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）<sup>なぬしみやほらなかえもんなかつむ</sup>の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18（1486）年6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

### [引用文献]

神山健吉 1988 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号  
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

---

## 第2節 遺跡の概要

---

ここでは今回本書で報告する城山遺跡について簡単に概観することにする。

城山遺跡は、志木市の西端部にある柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2km、柳瀬川駅の東約0.8kmの所に位置している。本遺跡は北東—南西方向に約390m、北西—南東方向に約320mの広がりを持ち、遺跡面積約79,360㎡と市内では西原大塚遺跡に次ぐ規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の野火止台と呼ばれる台地の縁辺に形成されている。標高は約12mで、北西方向に緩やかに下っているものの、概ね平坦である。台地下の柳瀬川との崖線は、5m程の比高差があり、また、遺跡の北東側には柳瀬川に直交するように浅い谷が入り込んでおり、本遺跡はそれらの谷に囲まれた舌状台地の突端に形成されている。

昭和49年に最初の調査が行われて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編纂室による度重なる調査が実施されている。その成果から、本遺跡は、旧石器時代から中・近世以降までの遺構や遺物が市内では最も濃密に確認される複合遺跡であることが判明してきている。中でも古墳時代中・後期から平安時代と中・近世以降の遺構数が他の時期に比べ圧倒的に多く、その二時期が本遺跡の中心である。

本調査地点は遺跡の中でも南東側に位置しており、東側に第24地点、西側に第27地点、南側に第40地点が隣接する。調査の結果、縄文時代の遺構と遺物、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物、古墳時代後期から平安時代の遺構と遺物、中・近世の遺構と遺物が確認された。北西から南東に向かって緩やかに傾斜しており、遺構確認面の標高は北側で10.50m前後、南側で9.80m前後、西側で10.40m前後、東側で9.80m前後を測る。また、調査区の中央から南東では埋没谷が検出され、調査区の北東から南西に延びる標高9.80mのラインから南東に向かって急激に落ち込む。調査区内における比高差は、北西部と中央の谷上端部では約0.9m、谷上端部と谷斜面地下部では約1.8mを測る。本調査地点は、城山遺跡の南東に形成された谷に向かって緩やかに下る所に立地しており、集落でも周縁部に位置することが判明した。

## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成23年2月、土木工事主体者兼土地所有者である個人より志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。土木工事の計画は、志木市柏町三丁目2655-1（629.39㎡）内に共同住宅建設を行うものである。

教育委員会は当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-09-003）に該当するため、概ね下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施した上で、その結果に基づき、当該地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 確認調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、現状保存及び盛土保存が不可能な場合については、記録保存（発掘調査）を実施する必要があること。

同3月1日、教育委員会は、土木工事主体者兼土地所有者である個人より提出された確認調査依頼書を受理し、同16～17日に確認調査を実施した。

確認調査は、第3図に示すように、調査区の長軸にあたる南北方向に幅1.5m程度のトレンチを3本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、古墳時代から平安時代の住居跡5軒、中・近世の井戸跡1基、土坑3基、溝跡3本、道路状遺構1条、ピット数本、縄文時代の遺物包含層（層厚約50cm）を確認した。なお、調査区域の一部は、周知の埋蔵文化財包蔵地外であったため、この確認調査の結果を受けて、包蔵地の変更増補を行った。

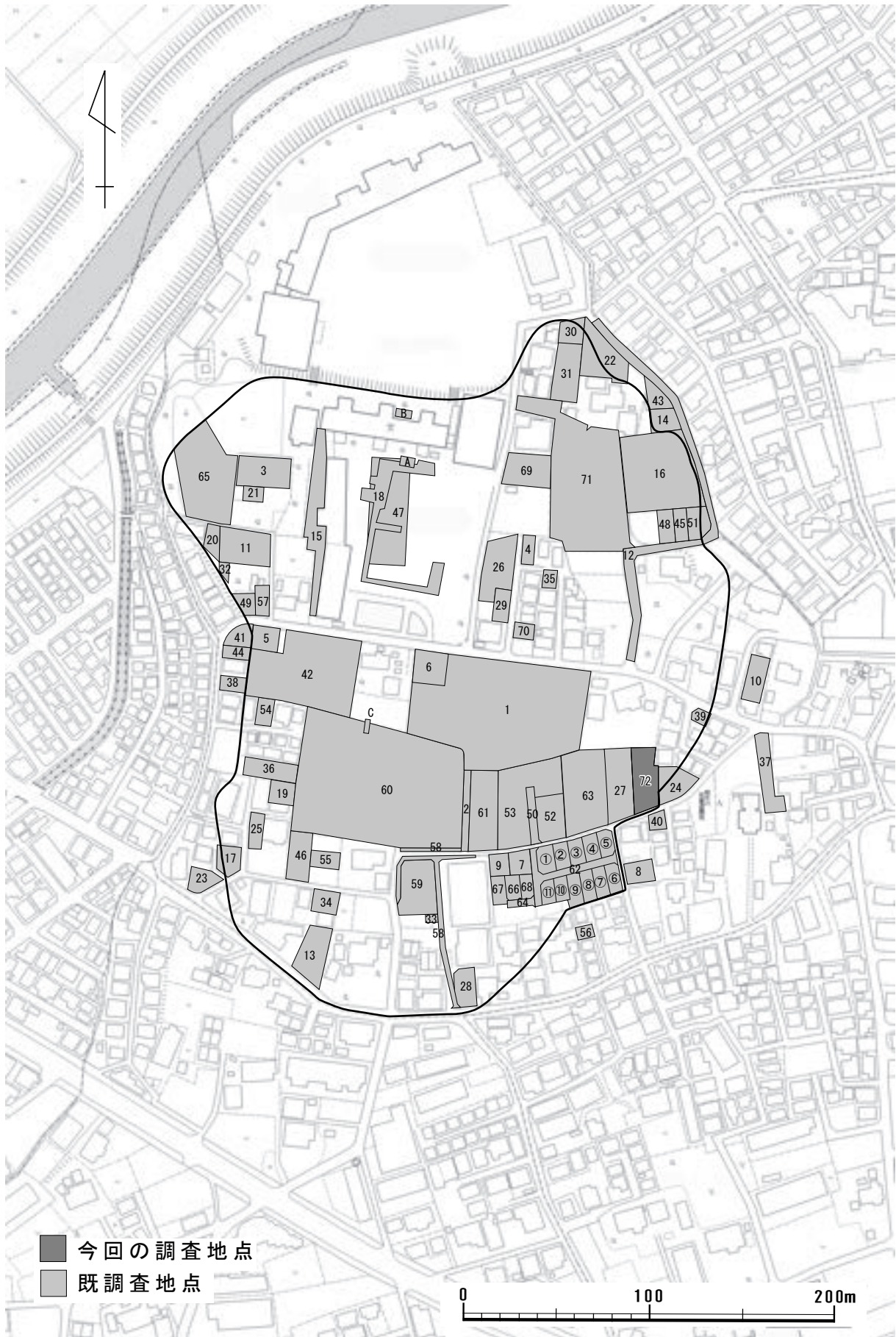
同29日、土木工事主体者兼土地所有者と教育委員会は、事前協議を実施し、確認調査の結果を報告するとともに、埋蔵文化財の保存措置を講ずるよう要請した。その結果、宅地部分（353.93㎡）については地盤改良工事（柱状改良）を実施するため記録保存（発掘調査）、駐車場部分（275.46㎡）については十分な保護層を確保できることから盛土保存として、それぞれ取り扱うこととした。発掘届については、同4月1日に受理した。

同4月13日、教育委員会は、土木工事主体者から提出された志木市埋蔵文化財保存事業委託申請書を受理し、同5月16日に土木工事主体者と事前協議を実施した。同25日、土木工事主体者と志木市（志木市長 長沼明）の間で、埋蔵文化財保存事業に係る協議書を取り交わし、委託契約を締結した。

調査主体者となる教育委員会は、発掘調査の実施にあたり、民間調査組織に支援業務を委託することとし、競争入札を行った。その結果、支援を依頼する民間調査組織が大成エンジニアリング株式会社（代表取締役 古川健）に決定し、志木市（志木市長 長沼明）との間で、委託契約を締結した。

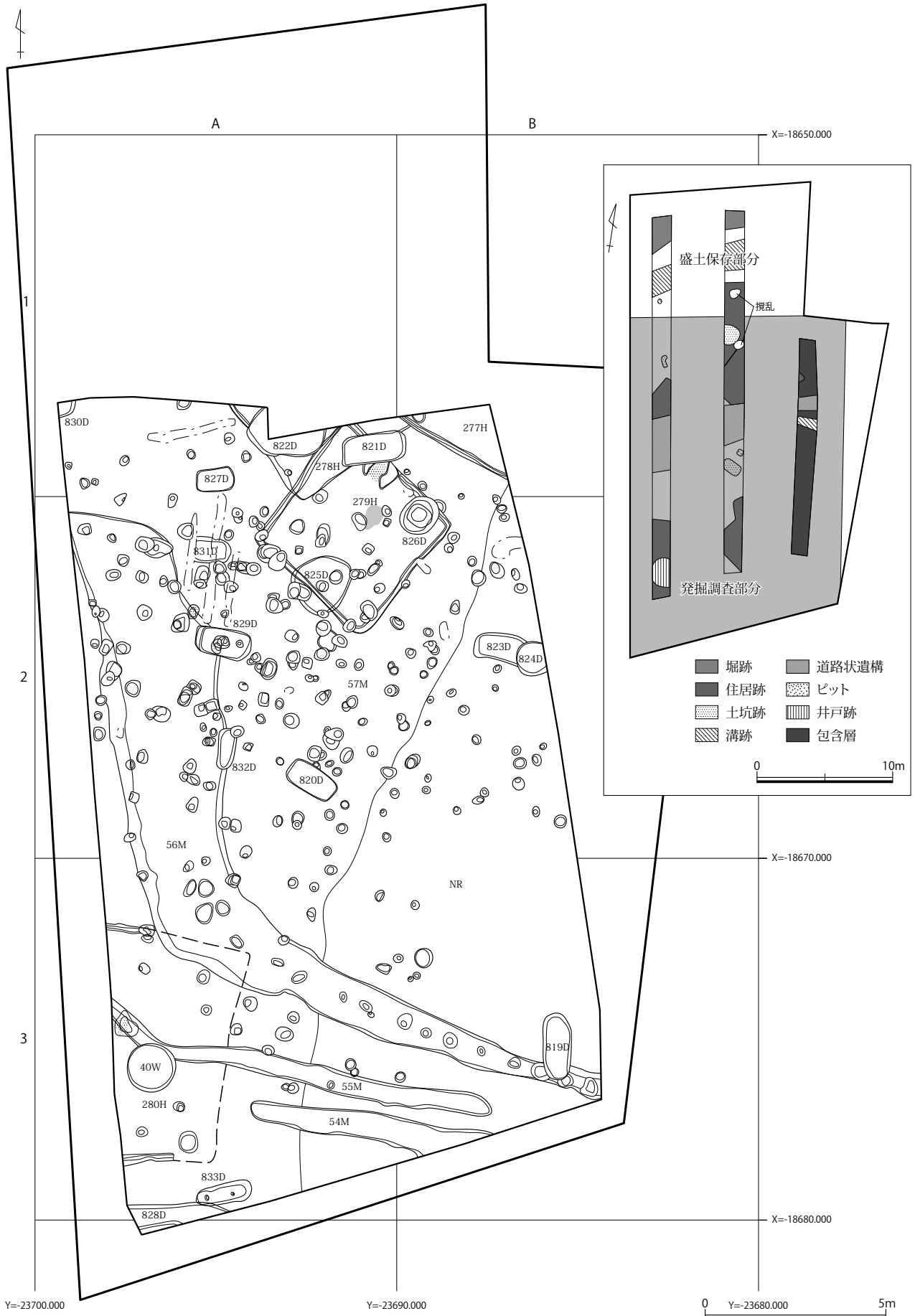
以上により、教育委員会を調査主体に大成エンジニアリング株式会社が支援する体制で、平成23年6月6日より発掘調査を実施した。

なお、駐車場部分については、同12月1日に工事立会を実施し、適切に盛土保存が実施されていたことを確認した。



第2図 城山遺跡の調査地点（1 / 3,000）

平成23年11月30日現在



第3図 確認調査図・遺構分布図 (1/400・1/150)

---

## 第2節 調査の経過

---

平成23年6月6日、発掘資材、重機、仮設ハウス等搬入後、午後から重機による表土掘削を南東側より開始し、並行して人力による遺構確認作業を行った。8日は降雨のため午前の作業を中断し、午後から基準点測量及び表土掘削を再開し、同日中に調査区の東側約1/2（1工区）を終えた。ここで重機による表土掘削は一旦中断し、重機の搬出を行った。

9日からは確認できた遺構のうち新しいものから順次調査を開始し、15日までに277・278号住居跡、819～824号土坑、54～57号溝跡の調査を終えた。16日から279号住居跡、825・826号土坑及び南東側の埋没谷の掘り下げを開始した。23日までに279号住居跡、825・826号土坑の調査を、翌24日に埋没谷の掘削が完了した。27日は1工区の全景撮影を行った。翌28日は重機を再搬入し、調査区南壁にあたる埋没谷斜面部に試掘坑の設定を行い、重機による掘削でローム層の堆積状況の確認を実施した。同日中に試掘坑の調査を終え、1工区の埋め戻しを開始した。翌29日に埋め戻しが完了し、引き続き調査区の西側約1/2（2工区）の表土掘削を実施し、同日に完了した。翌30日から人力による遺構確認作業及び1工区から延びる遺構から順次調査を再開した。7月7日までに833号土坑、280号住居跡を除くほぼ全ての遺構の調査を完了した。翌8日は調査区内に2ヶ所の試掘坑を設定し、北側の1号試掘坑から旧石器時代の調査を開始した。12日に1号試掘坑、833号土坑、280号住居跡の調査を終了し、2号試掘坑の調査に移行した。14日に2号試掘坑の調査を終え、本調査地点における全ての調査を完了した。翌15日に重機による埋め戻し作業及び発掘資材、敷地内の養生フェンス、仮設ハウス等の撤去・搬出を行い、同日中に重機を搬出し、現場から撤収が完了した。

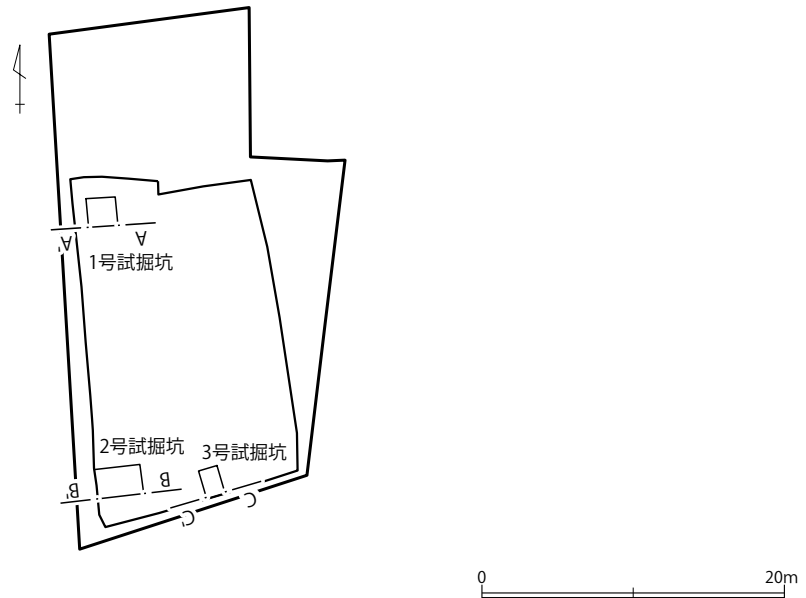
7月18日から、遺物の洗浄・注記・接合作業、遺構図面の修正など、報告書作成のための基礎作業を開始した。9月下旬には基礎作業がほぼ完了し、遺物の実測・デジタルトレース・写真撮影、遺構図のデジタルトレースを開始した。12月下旬には報告書作成のための資料がある程度整い、遺構図・遺物図・写真図版の作成、原稿の執筆、編集作業を行い、平成24年3月31日に報告書を刊行し、全ての調査が完了した。

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代

#### (1) 概要

旧石器時代の調査は、調査地点の北側と南側及び埋没谷の斜面部の3ヶ所で行った。その結果、1号試掘坑から円礫2点、2号試掘坑から少量の円礫が散在する地点を確認した。埋没谷斜面部にあたる3号試掘坑では、ローム堆積状況が従来の立川ローム標準層位と相違があった。そこでⅡ層から断面最下部までの計19点でサンプリングを実施し、そのうち10点について分析を行った。詳細な分析結果については第4章に記載する。



第4図 試掘坑分布図 (1 / 500)

#### (2) 各試掘坑の概要

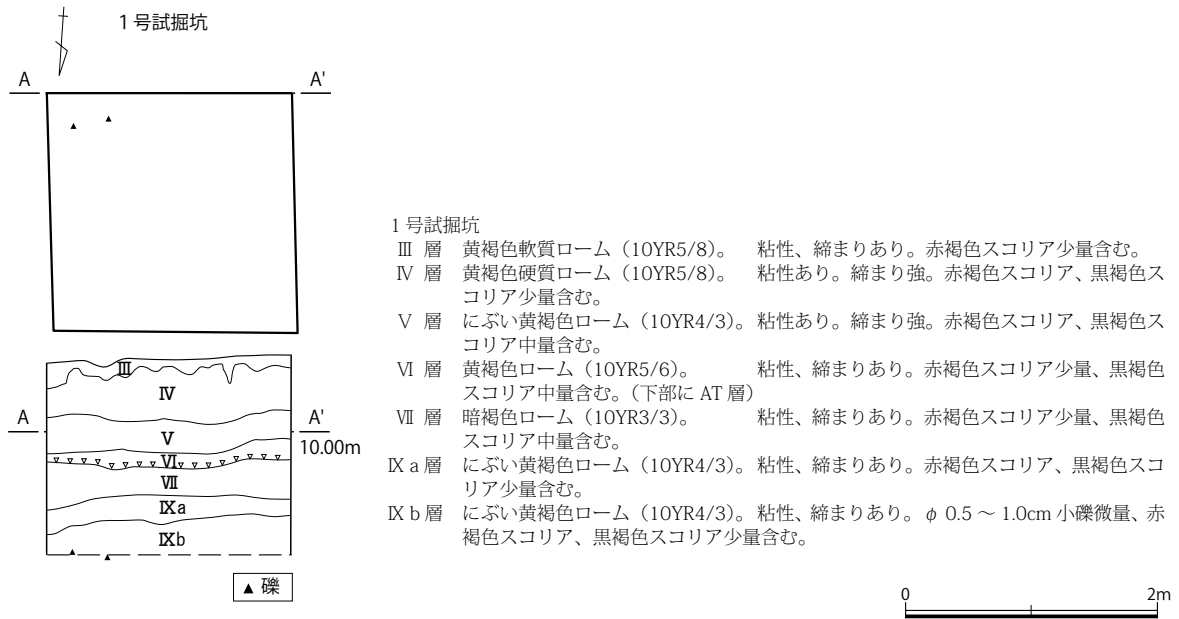
##### 1号試掘坑

**遺 構** (第5図)

[位 置] (A-1・2) グリッド。

[構 造] 調査区北西の東西 2.0m × 南北 2.0m × 深さ 150cm で設定した。

[所 見] 断面観察でⅢ～Ⅸ b 層、最下面で砂礫層が検出された。Ⅸ b 層で検出した礫2点については、自然の円礫である。



第5図 1号試掘坑 (1 / 60)

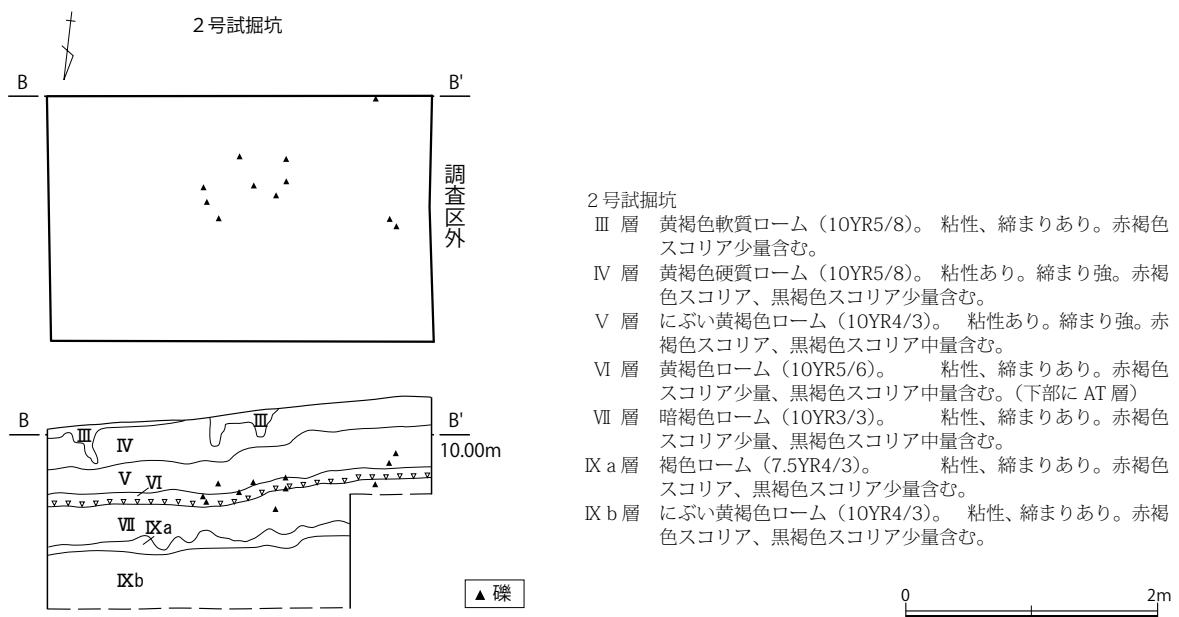
## 2号試掘坑

### 遺構 (第6図)

[位置] (A-3) グリッド。

[構造] 調査区南西壁際に東西 3.0m × 南北 2.0m × 深さ 150cmで設定した。

[所見] 断面観察でⅢ～Ⅸb層を確認した。1.6m × 1.0mの範囲内に11点の礫が散在する地点が検出された。垂直分布はⅤ層下部からⅦ層上部に分布し、高低差で約40cmの拡散が認められた。礫の直径は3～7cmで、肉眼観察では、人為的な痕跡がないことから自然礫であると判断した。また平面分布の状況でも礫群と言えるような集中した密度で検出されていないこともあり、当時の生活活動した痕跡と判断はできない。



第6図 2号試掘坑 (1 / 60)



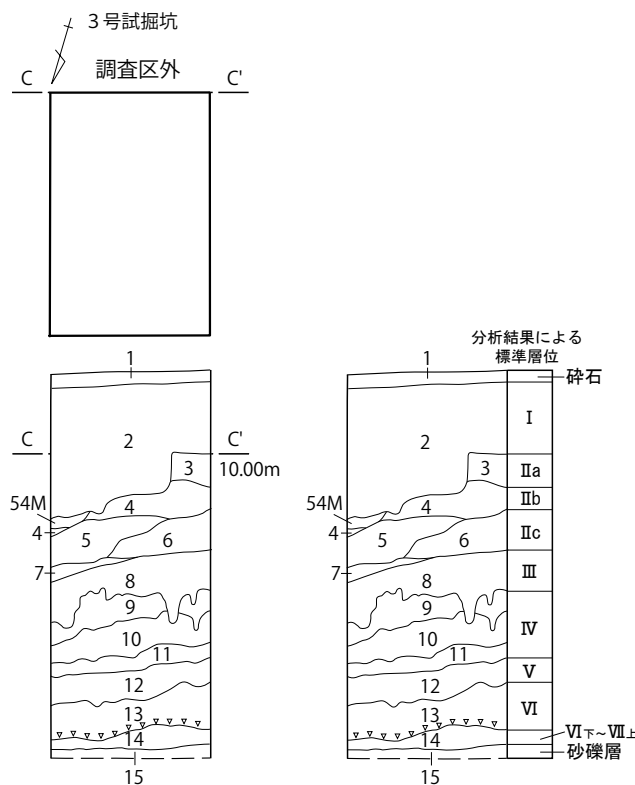
### 3号試掘坑

#### 遺 構 (第7図)

[位 置] (A・B-3) グリッド。

[構 造] 調査区南壁際に東西 2.0m × 南北 2.0m × 深さ 300cm で設定した。

[所 見] 断面観察において立川ローム層の標準層位とは異なる様相を示すことから、堆積土の分析を行った。標準層序はその結果を踏まえたものである。



#### 3号試掘坑

- |                          |   |
|--------------------------|---|
| 1層 碎石                    |   |
| 2層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。    | 粘性やや弱。締まりやや強。φ 0.5 ~ 1.0cm 小礫少量含む。(I層)                          |
| 3層 黒色土 (10YR2/1)。        | 粘性あり。締まり弱。(II a層)   |
| 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。       | 粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量含む。(II b層)                                   |
| 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。       | 粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量、赤褐色スコリア少量含む。(II c層)                         |
| 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。       | 粘性、締まりやや弱。ローム粒子微量、ロームブロック少量含む。(II c層)                           |
| 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。       | 粘性、締まり強。ロームブロック多量含む。(漸移層)                                       |
| 8層 黄褐色軟質ローム (10YR5/8)。   | 粘性、締まりあり。赤褐色スコリア少量含む。(III層)                                     |
| 9層 黄褐色硬質ローム (10YR5/8)。   | 粘性あり。締まり強。赤褐色スコリア、黒褐色スコリア少量含む。(IV層)                             |
| 10層 黄褐色硬質ローム (10YR5/6)。  | 粘性あり。締まり強。赤褐色スコリア、黒褐色スコリア中量含む。(IV層)                             |
| 11層 黄褐色硬質ローム (10YR5/8)。  | 粘性、締まりあり。赤褐色スコリア少量、黒褐色スコリア中量含む。(IV層)                            |
| 12層 にぶい黄褐色ローム (10YR4/3)。 | 粘性、締まりあり。赤褐色スコリア少量、黒褐色スコリア中量含む。(V層)                             |
| 13層 褐色ローム (10YR4/4)。     | 粘性あり。締まり強。赤褐色スコリア少量、黒褐色スコリア中量含む。下部に AT 層 (VI層)                  |
| 14層 暗褐色ローム (10YR3/3)。    | 粘性やや弱。締まり強。赤褐色スコリア少量、黒褐色スコリア中量、φ 0.5 ~ 1.0cm 礫少量含む。(VI層下~VII層上) |
| 15層 暗褐色砂礫土 (10YR3/3)。    | 粘性弱、締まりあり。φ 0.5 ~ 1.0cm 礫多量含む。(砂礫層)                             |

0 2m

第7図 3号試掘坑 (1 / 60)

## 第2節 縄文時代

### (1) 概要

縄文時代の遺構は、土坑1基(833 D)が検出された。覆土の観察から縄文時代の遺構と判断したが、時期を比定する出土遺物はなかった。また遺構外においては、調査区東側から南東にかけて埋没谷(N R)を検出した。

### (2) 土坑

#### 833号土坑

**遺構** (第8図)

**[位置]** (A-3) グリッド。

**[検出状況]** 828 Dに一部切られる。

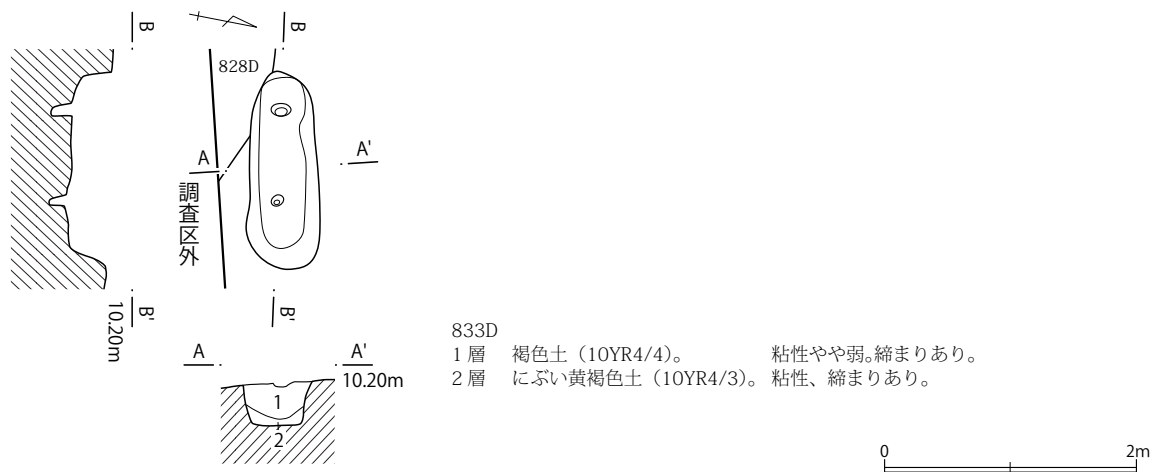
**[構造]** 平面形：細長な楕円形。規模：長軸 1.58m / 短軸 0.58m / 深さ 40cm。主軸方位：N-76°-E。ピット：2本確認され、径8~15cm、深さは坑底面から14~16cmを測る。

**[覆土]** 2層に分層でき、褐色土を主体とし、自然堆積によるものである。

**[遺物]** 出土しなかった。

**[時期]** 縄文時代。

**[所見]** 坑底面から2本の杭跡と考えられる小ピットが確認され、陥穴の様相を示す。出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。



第8図 833号土坑 (1 / 60)

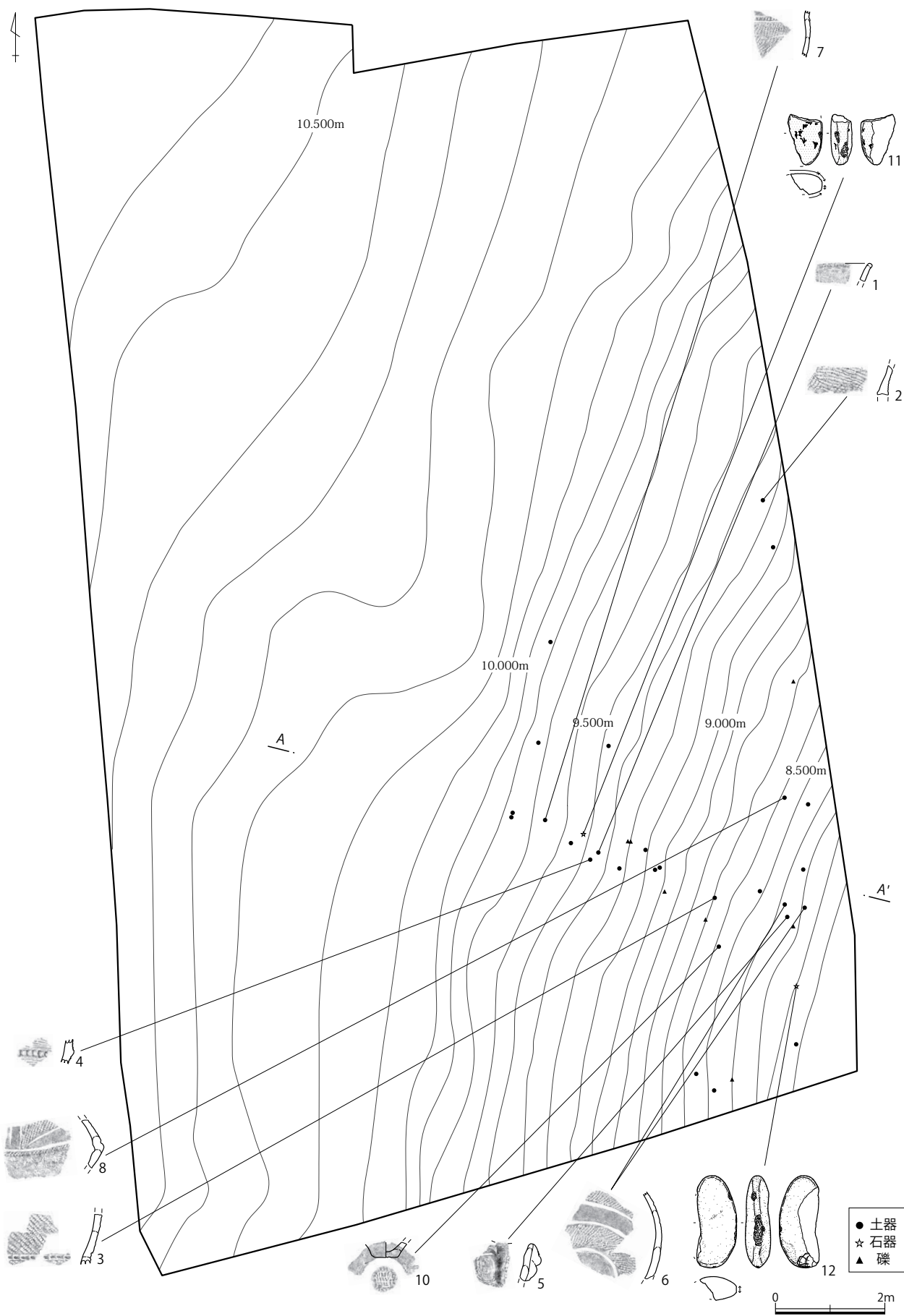
### (3) 埋没谷 (第9・10図、第2・3表)

N R

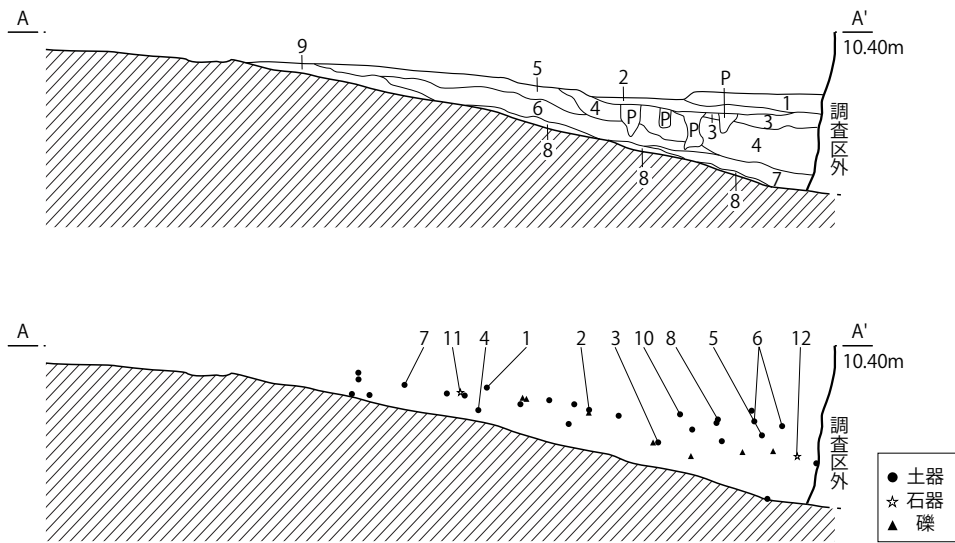
**[位置]** (A・B-1・2・3) グリッド。

**[検出状況]** 調査区北東から南東にかけて検出された。

**[構造]** 規模：検出された長さは 19.60m で、上端幅は最大 8.26m で、下端は検出されていない。



第9図 埋没谷 (1 / 100)



- |    |                 |                                    |
|----|-----------------|------------------------------------|
| 1層 | 黒色土 (10YR2/1)。  | 粘性あり。締まり弱。                         |
| 2層 | 黒褐色土 (10YR3/2)。 | 粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量含む。             |
| 3層 | 黒褐色土 (10YR3/2)。 | 粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子中量含む。             |
| 4層 | 黒褐色土 (10YR3/2)。 | 粘性、締まりあり。ローム粒子少量含む。                |
| 5層 | 黒褐色土 (10YR3/2)。 | 粘性あり。締まりやや弱。ロームブロック微量含む。           |
| 6層 | 暗褐色土 (10YR3/3)。 | 粘性、締まりやや強。ロームブロック中量含む。             |
| 7層 | 黒褐色土 (10YR3/1)。 | 粘性、締まり強。ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。       |
| 8層 | 黄褐色土 (10YR5/8)。 | 粘性やや強。締まり強。黒褐色土ブロック中量、ロームブロック多量含む。 |
| 9層 | 暗褐色土 (10YR3/3)。 | 粘性、締まりあり。ロームブロック多量含む。              |



第10図 埋没谷 (1 / 100)

遺構確認面からの深さは最大 195cmを測る。断面の傾斜角は平均 14°で、直線的に立ち上がる。走行方位：N - 17° - E。

[覆 土] 9層に分層でき、黒褐色土を主体とし、自然堆積によるものである。

[遺 物] 出土遺物は縄文土器の深鉢 71点、敲石 1点・磨石 1点である。図示した遺物は土器 10点、石器 2点である。

[時 期] 縄文時代。

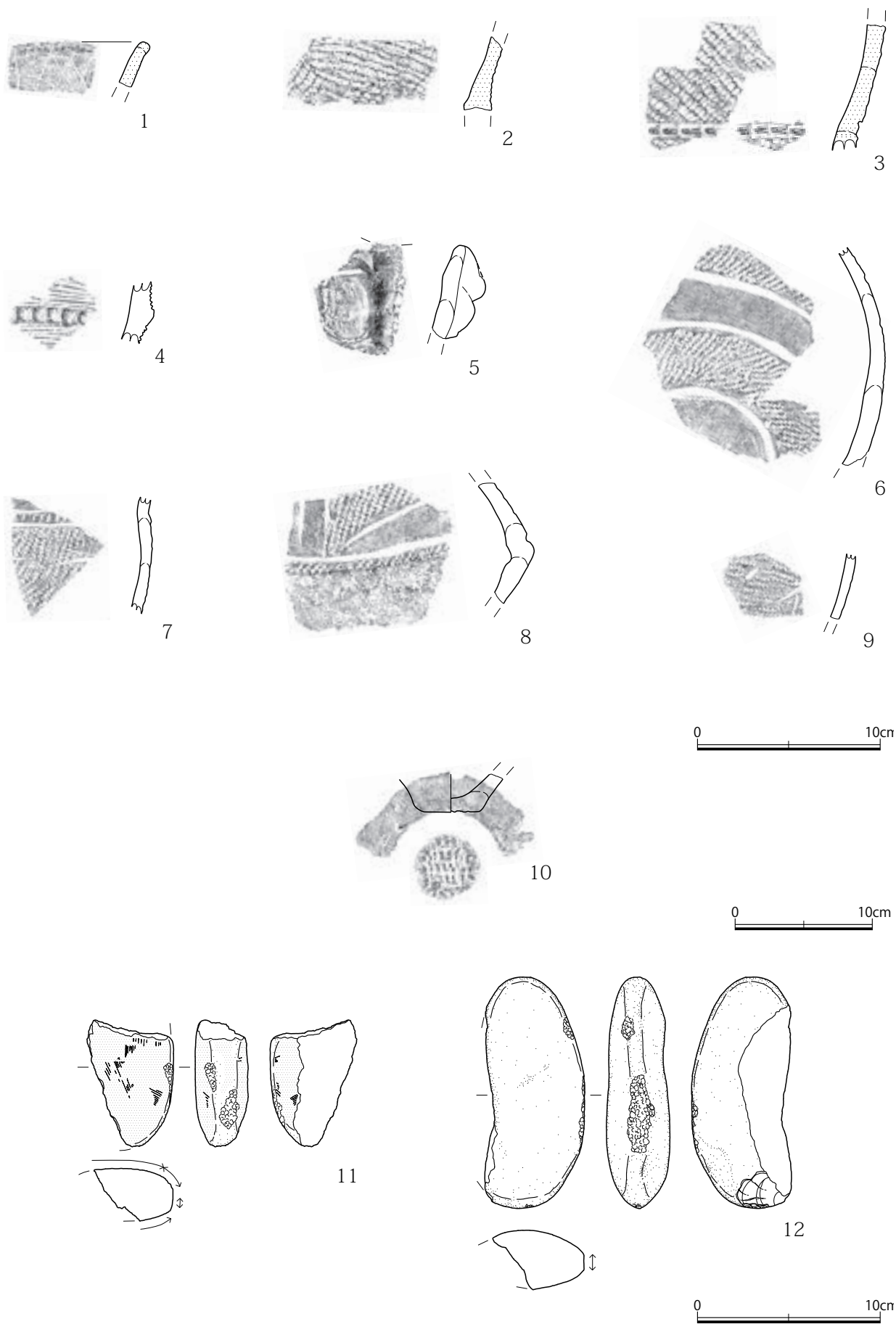
[遺 物] (第11図、第2・3表)

[土 器] (第11図、第2表)

1は早期中葉の沈線文の施された深鉢と考えられる。2・3は黒浜式の深鉢である。4は興津式の櫛歯文の施された深鉢である。5は隆帯を施された阿玉台式の深鉢である。6は加曾利E式の深鉢である。7・8・9は加曾利B式の深鉢である。10は後期と思われる深鉢である。

[石 器] (第11図、第3表)

11は閃緑岩製の磨石である。12は硬質砂岩製の敲石である。



第11図 埋没谷出土遺物 (1/3・1/4)

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調		時期・型式	焼成	胎土混入物					出土位置	備考	
			外面	内面			雲母	小石	石英	粒子	砂粒			その他
第11図1	口縁 ~胴	斜格子文	橙色	にぶい黄褐色 ・明褐色	早期中葉	良		△				繊維△	中層	沈線文系 土器か
第11図2	胴	前々段条L・R・RL縄文を羽状に施文	褐灰色・に ぶい黄褐色	明褐色	黒浜式	良						繊維△	中層	
第11図3	胴	地文RL縄文/半載竹管状工具による「C」字形の爪形文を施文	褐色	にぶい褐色	黒浜式	良				橙○		繊維△	中層/ 包含層	
第11図4	胴	櫛歯状工具による櫛歯文/微隆起帯上は棒状工具により押捺される	にぶい黄褐色	にぶい褐色	興津式	良	黒△			白○			下層	
第11図5	口縁	隆帯脇を2列の角押文により加飾される	にぶい黄褐色 ・褐灰色	にぶい黄褐色	阿玉台式 I b新~II式	良	金○	△	○			角閃 石△	中層	
第11図6	胴	地文RL縄文/弧状の沈線区画内は磨消される	にぶい褐色 ・黒褐色	褐灰色・ 灰黄色	加曾利EIV式	良			△	黒△ 白○			中層	
第11図7	胴	地文RL縄文/2本の平行する沈線文間に刻み目が施される	褐灰色	にぶい黄褐色	加曾利B2式	良					○		中層	
第11図8	胴	最大径<12.7>/そろばん玉形/地文LR縄文/肩部と胴部は横位沈線文により区画される/肩部縦位、弧状の沈線文により区画内磨消される/胴部無文	明黄褐色・に ぶい黄褐色	にぶい黄褐色	加曾利B2式	良	黒△	△	△	黒◎		角閃 石△	中層	
第11図9	胴	地文RL縄文	黄褐色・暗 灰黄色	黒褐色	加曾利B2 ~3式	良	黒△		△				覆土中	
第11図10	底	底径4.0/無文/底部に網代痕あり	暗灰黄色・ 黄灰色	にぶい黄褐色 ・褐灰色	後期か	良		△	△	橙○			中層	

(単位: cm)

第2表 埋没谷出土遺物一覧

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	出土位置	遺存度	備考
第11図11	磨石	6.99	4.67	2.87	101.4	閃緑岩	中層	欠損	円礫を素材とする/表裏面の全面および右側縁の一部に磨面を有する/右側縁は部分的に敲打痕が認められる
第11図12	敲石	12.70	5.54	3.42	289.9	硬質砂岩	中層	欠損	長楕円形の円礫を素材とする/右側縁から下端部にかけて部分的に敲打痕を有する/また、左側縁の欠損部縁辺には黒色付着物が認められる

(単位: mm, g)

第3表 埋没谷出土石器一覧

(4) 遺構外出土遺物 (第12・13図、第4・5表)

表土、攪乱、その他の時期の遺構から出土した土器は破片数を含め86点が出土した。大半は中期であり、他は前期・後期の土器が出土している。土器以外では、打製石斧2点、石皿1点が出土した。出土した遺物のほとんどは小破片のため図示できなかったが、図示した遺物は5点である。

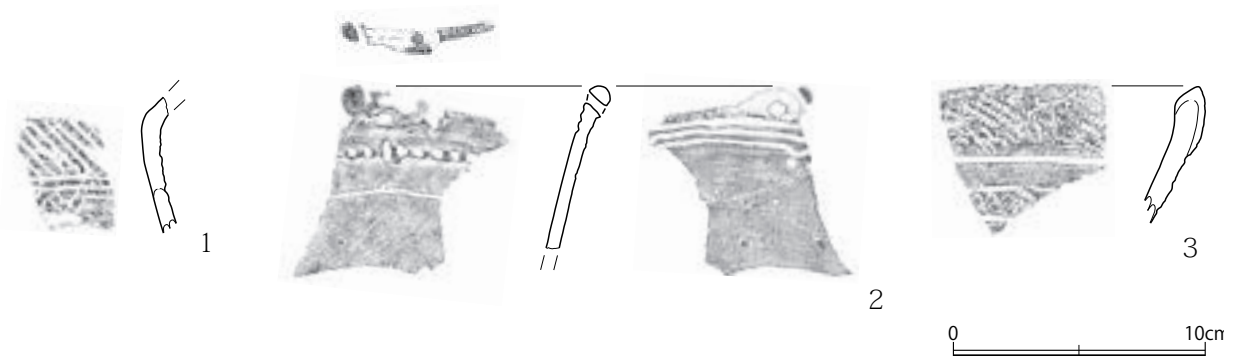
遺物

[土器] (第12図、第4表)

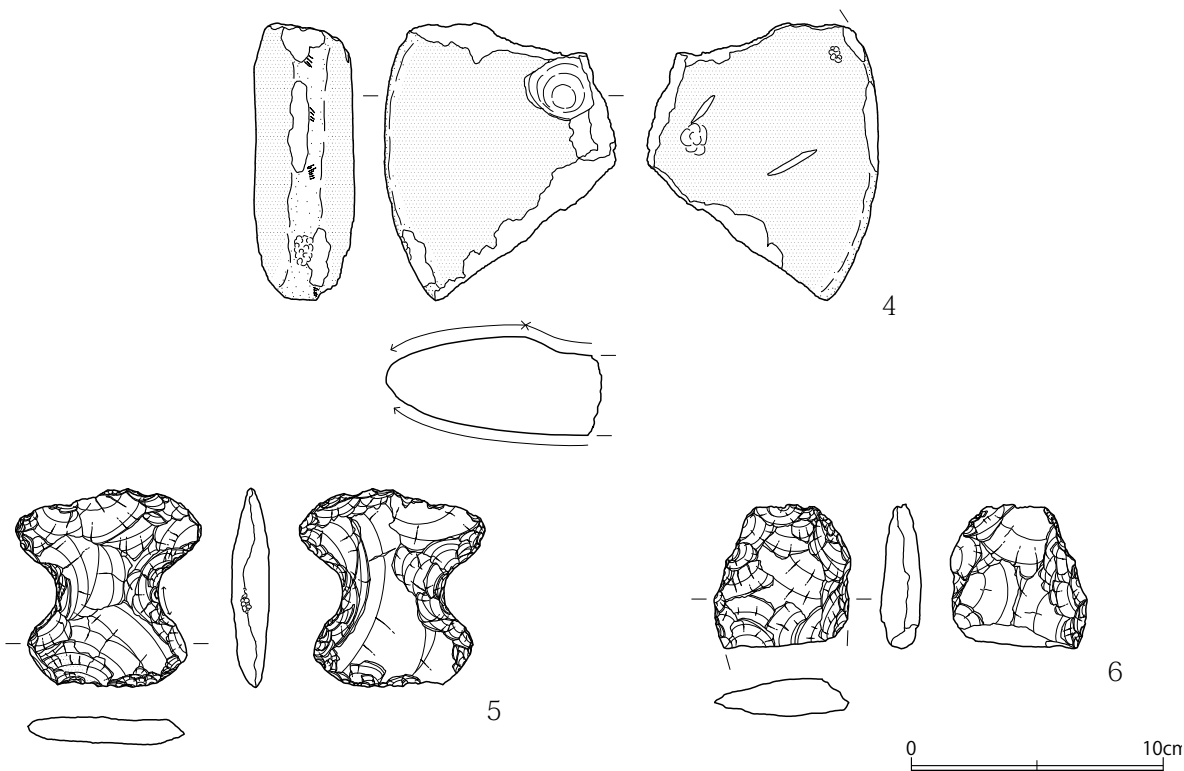
1は五領ヶ台式の深鉢である。2は堀之内式~加曾利B式の深鉢である。3は安行式の深鉢である。

[石器] (第13図、第5表)

4は閃緑岩製の台石である。5・6はホルンフェルス製の打製石斧である。



第12図 遺構外出土遺物 (1/3)



第13図 遺構外出土石器(1/3)

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調		時期・型式	焼成	胎土混入物					出土位置	備考	
			外面	内面			雲母	小石	石英	粒子	砂粒			その他
第12図1	胴	横位沈線文、山形状の沈線文、集合沈線文が施される	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	五領ヶ台式	良	金○		○				包含層	
第12図2	口縁～胴	波状口縁部に突起貼付、焼成前穿孔1カ所あり／口縁部に細い紐線文を貼付／胴部に沈線区画文／内面口縁部直下に3本の沈線文が横位にめぐる	褐灰色	灰黄色・暗灰黄色	堀之内2式～加曾利B1式	良	黒△			橙○			表土	
第12図3	口縁～胴	地文RL縄文、口縁部直下に2本の帯縄文が施される	明黄褐色・暗灰黄色	明黄褐色・暗灰黄色	安行1式	良	黒△		△				56M	

(単位：cm)

第4表 遺構外出土遺物一覧

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	出土位置	遺存度	備考
第13図4	台石	10.91	9.05	3.90	511.0	閃緑岩	P36	欠損	扁平な円礫を素材とする／表裏面ともに磨面を有する／また、表面中央には凹みが認められる
第13図5	打製石斧	7.83	7.26	1.42	84.4	ホルンフェルス	表土	完形	分銅形／表裏面ともに粗い成形剥離後、周縁調整が施される／刃部の左側縁には一部使用による擦痕が認められる
第13図6	打製石斧	5.73	5.38	1.59	55.2	ホルンフェルス	56M	基部残存	撥形または短冊形／表裏面ともに粗い成形剥離後、周縁調整が施される

(単位：mm, g)

第5表 遺構外出土石器一覧

### 第3節 弥生時代後期から古墳時代前期

#### (1) 概要

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は検出されなかったが、遺物は僅かに出土した。

#### (2) 遺構外出土遺物

表土から壺形土器と考えられる小破片が1点出土したが、図示はできなかった。

## 第4節 古墳時代後期から平安時代

### (1) 概要

古墳時代後期から平安時代の遺構については、住居跡4軒(277～280H)が検出された。

いずれも古墳時代後期の住居跡で、重複関係は277Hは278Hを切り、278Hは279Hを切る。280Hは上部の大半を近世以降に削平され、検出は壁溝と炉跡及び掘り方のみである。

出土遺物から279Hは6世紀前葉、280Hは5世紀中葉～後葉に比定されると考えられ、277・278Hは詳細な時期を判断する遺物がなかったが、周辺遺構との重複関係から6世紀前葉～中葉と考えられる。

### (2) 住居跡

#### 277号住居跡

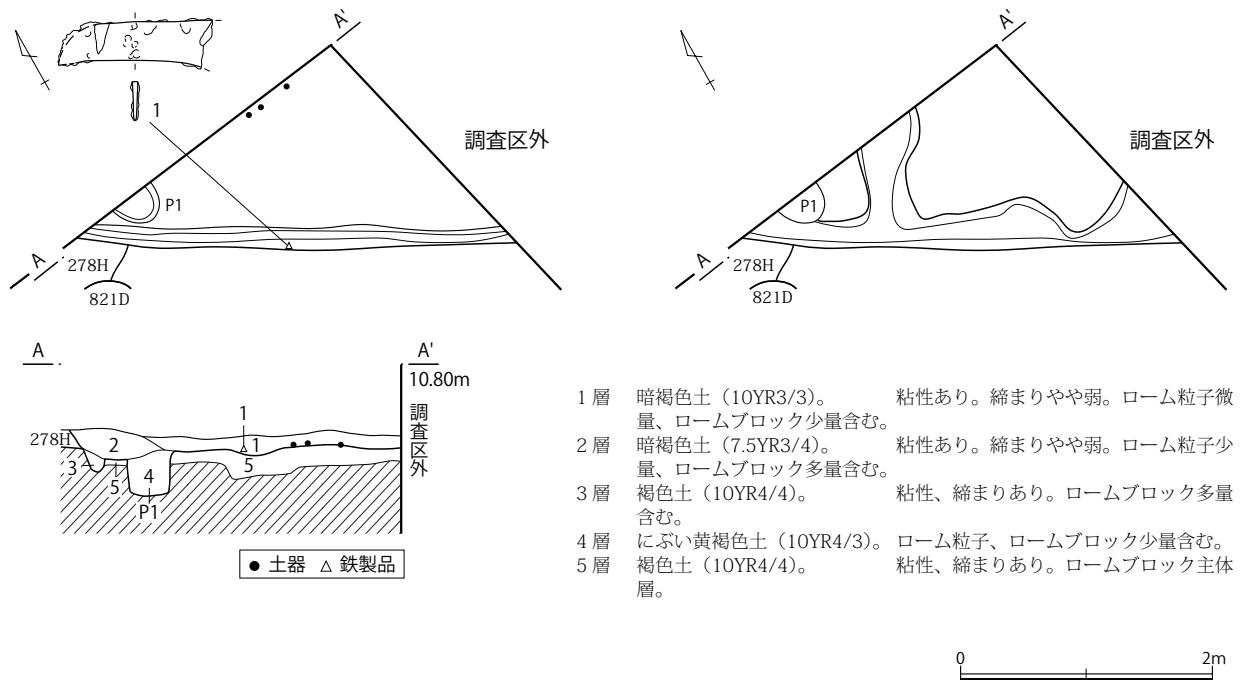
##### 遺構 (第14図)

[位置] (B-1) グリッド。

[検出状況] 南壁の周辺部のみを検出で、大半は調査区外に延びる。西側の278Hを切る。

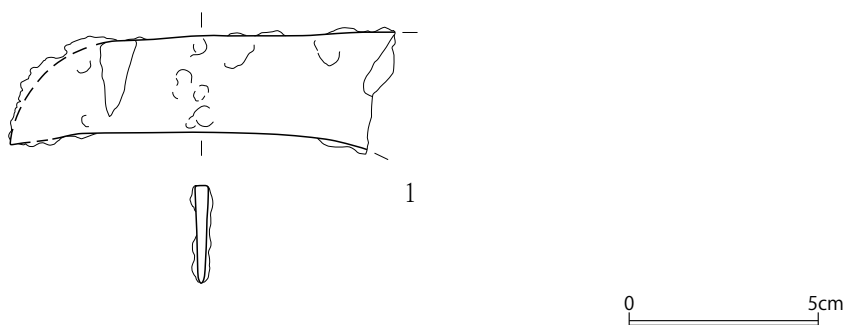
[構造] 平面形：方形もしくは長方形と推測される。規模：長軸不明/短軸不明/深さ19～34cm。壁：16～20cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。主軸方位：N-33°-E。壁溝：検出できた部分では巡らされていた。上幅14～20cm/下幅4～8cm/深さ8～12cm。床面：厚さ4～20cmで施され、硬化した面は検出されなかった。

[覆土] 5層に分層され、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を主体とする。



第14図 277号住居跡 (1/60)





第15図 277号住居跡出土遺物（1／2）

( )内は現存値

挿図番号	種類	材質	長さ	最大幅	最大厚	重量	備考
第15図1	鉄鎌	鉄	(10.2)	(3.1)	(0.35)	(23.6)	刃部は僅かに内湾する／刃部70%残存

(単位：cm, g)

第6表 277号住居跡出土遺物一覧

[遺物] 出土遺物は破片を含め、土師器の壺3点・甕8点・高坏4点・坏1点、鉄製品鉄鎌1点である。鉄鎌以外は小破片であるため、図示できなかった。

[時期] 時期を決定づける遺物がないため、詳細な時期は不明だが、周辺の状況と278Hとの重複関係から古墳時代後期（6世紀中葉）と推定される。

**遺物**（第15図、第6表）

[鉄製品]（第15図、第6表）

1は鉄鎌である。

## 278号住居跡

**遺構**（第16図）

[位置]（A-1）グリッド。

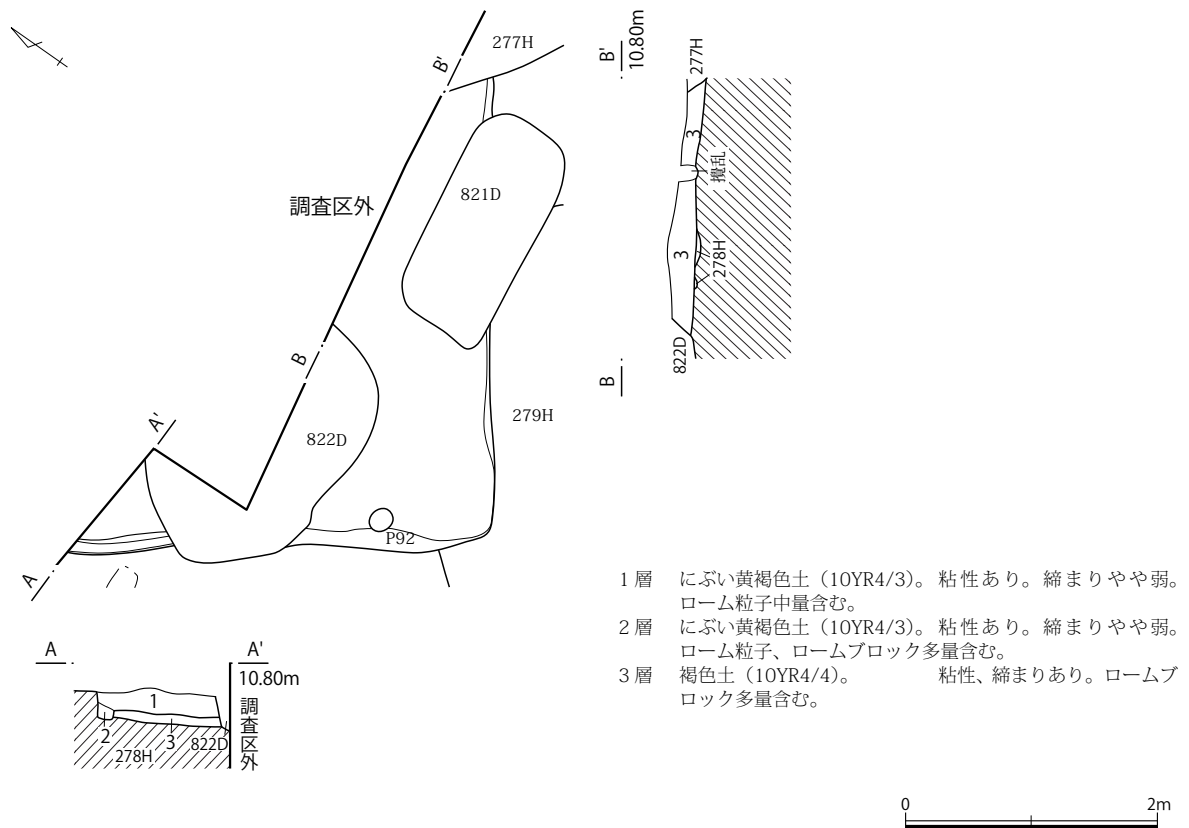
[検出状況] 北側は調査区外で、821・822Dと277Hに切られ、279Hを切る。上部は近世以降に削平され、ほぼ掘り方のみの検出である。

[構造] 平面形：方形と推測される。規模：長軸不明／短軸不明／深さ2～18cm前後。壁：10～20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-55°-E。壁溝：北西部に僅かに検出されるのみである。上幅10～14cm／下幅6～8cm／深さ2～4cm。床面：厚さ3～22cmで施され、硬化した面は検出されなかった。

[覆土] 3層に分層され、ローム粒子を含む、にぶい黄褐色土を主体とする。

[遺物] 出土遺物は破片を含め、土師器の壺7点・甕12点・坏1点、須恵器の坏蓋1点である。いずれの遺物も小破片であるため、図示できなかった。

[時期] 時期を比定する遺物がないため、詳細は不明だが、周辺から出土した遺物の状況と277Hとの重複関係から古墳時代後期（6世紀前葉～中葉）と推定される。



第16図 278号住居跡 (1/60)

### 279号住居跡

#### 遺 構 (第17・18図)

[位 置] (A・B-1・2) グリッド。

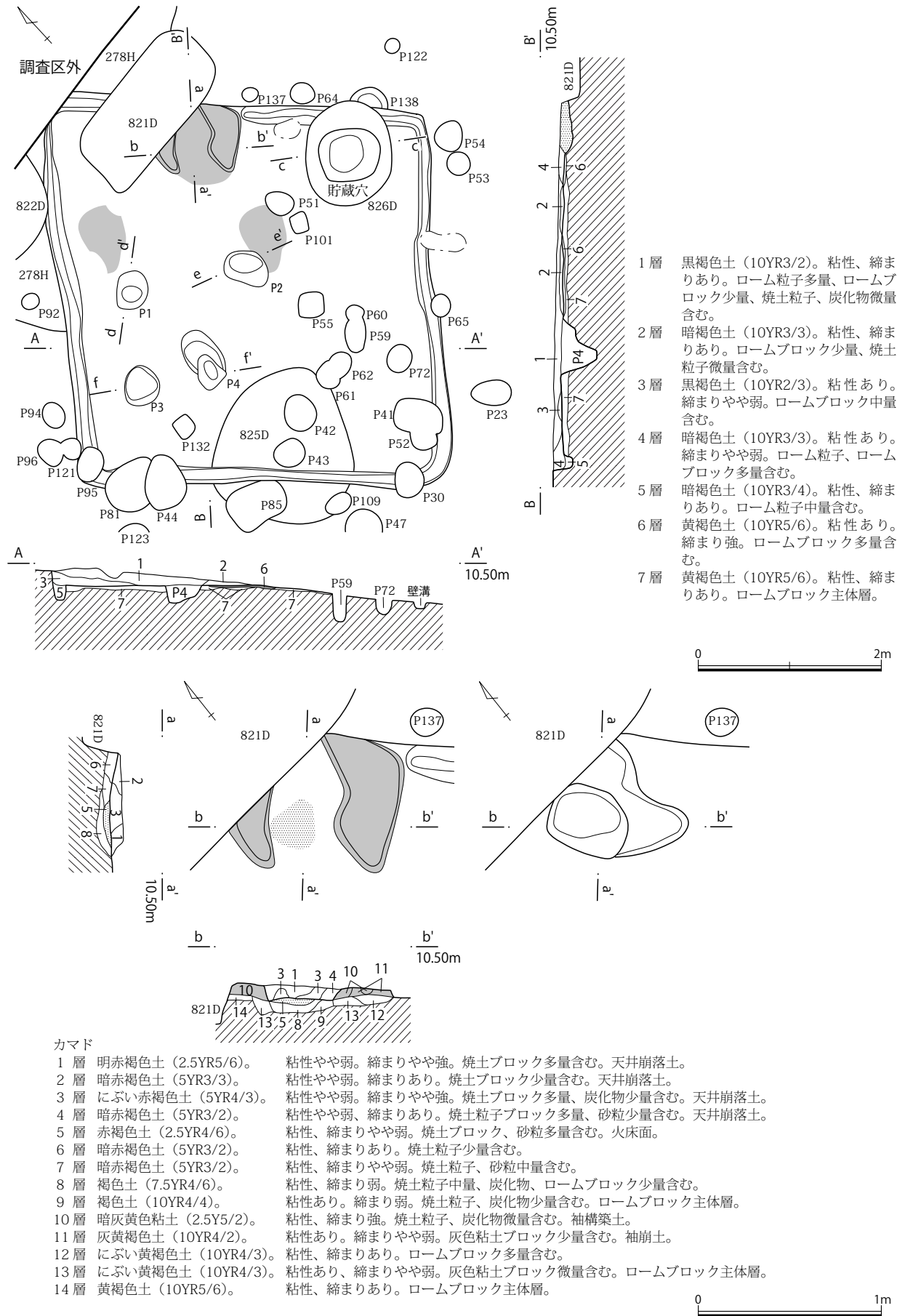
[検出状況] 北西コーナーは僅かに調査区外で、821・826・825 Dと278 H及び中世以降のピットに切られる。東側上部は近世以降に削平され、壁溝を残すのみであった。北西においては278 Hの掘り方から壁溝が僅かに確認された。

[構 造] 平面形：方形。規模：長軸4.12m／短軸4.03m／深さ8～12cm。壁：2～16cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-40°-E。壁溝：上幅8～22cm／下幅3～15cm／深さ4～16cm。床面：厚さ1～8cmで施され、硬化した面は検出されなかった。カマド：北壁のやや西寄りに構築される。北西の袖部と奥壁部分を821 Dに切られる。規模は長さ75cm×幅91cmを測り、検出された面においては北壁面への掘り込みはなかった。袖部は白色砂質粘土で構築されている。貯蔵穴：カマド右脇に構築される。平面形は円形で、上部を826 Dに切られる。残存径57～67cmで、深さは床面から48cm前後を測る。柱穴：床面に4本のピットが検出されたが、規模が小さいため、支柱穴とは考えにくい。

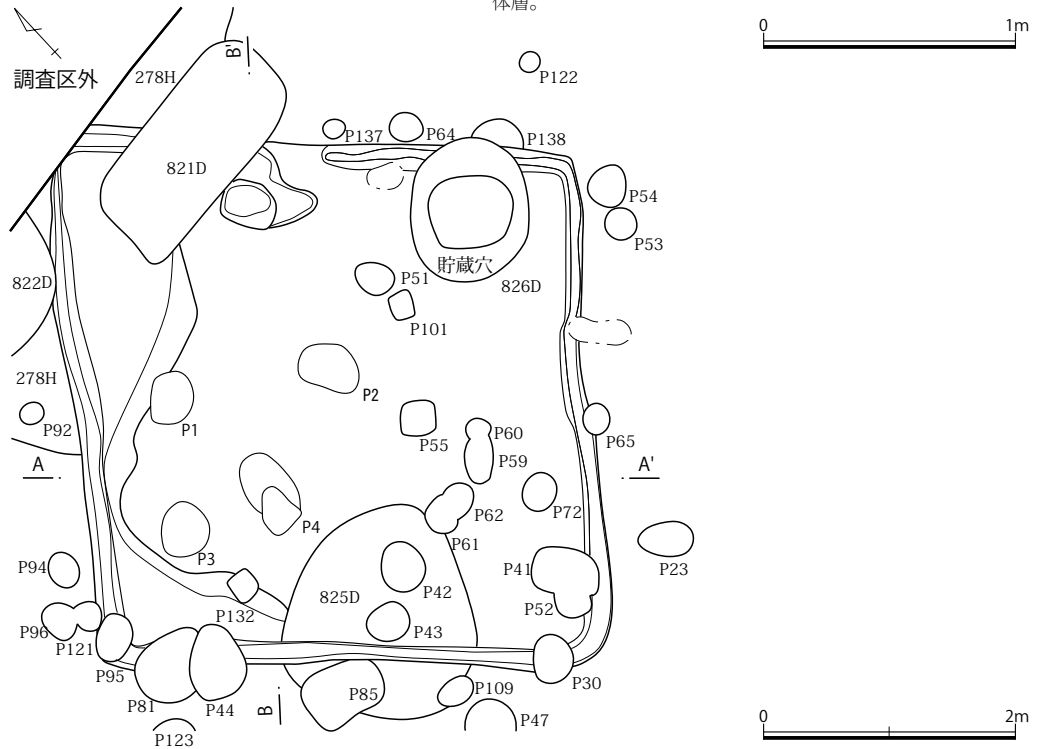
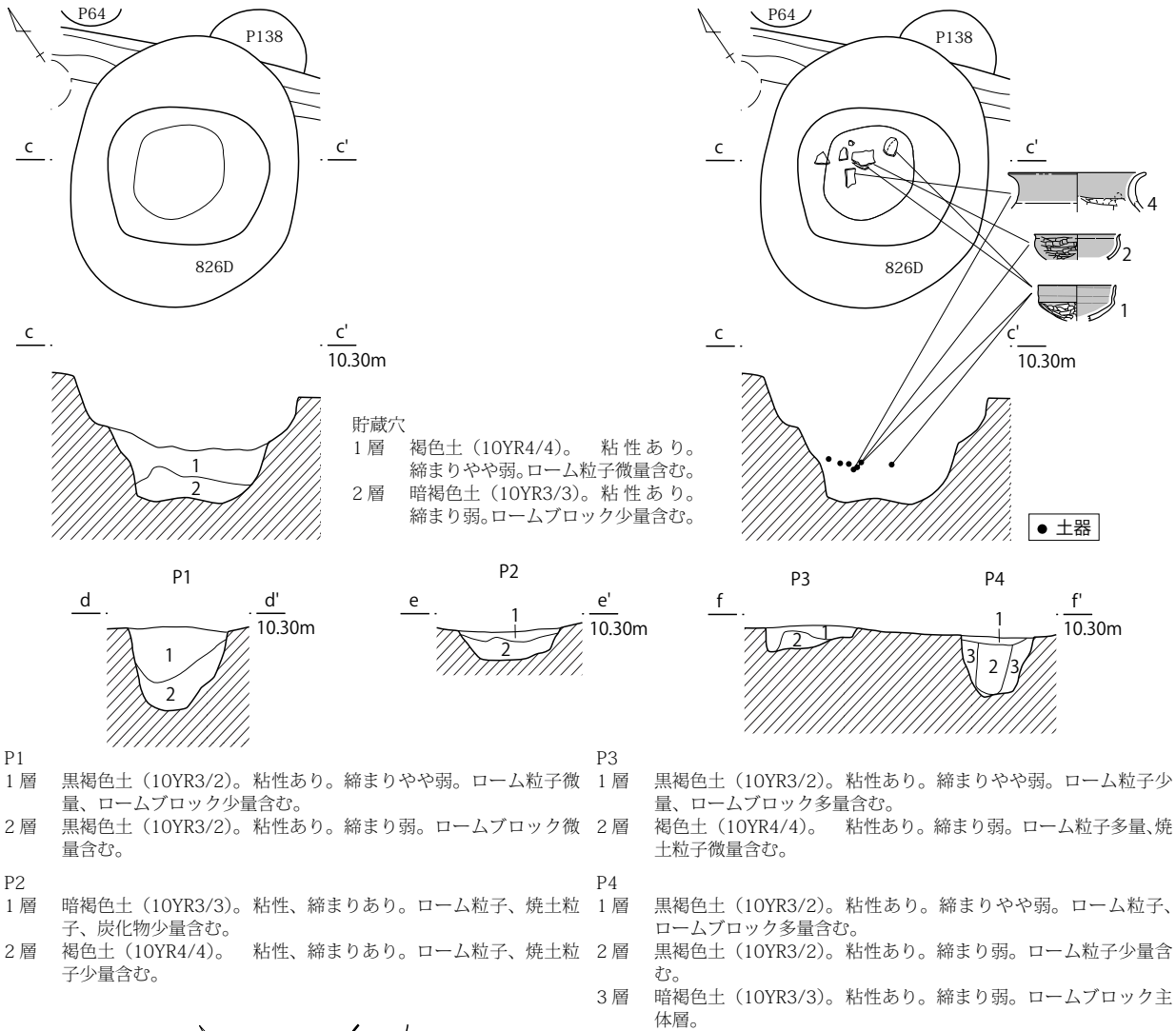
[覆 土] 7層に分層され、暗褐色土・褐色土を主体とする。

[遺 物] 出土遺物は破片を含め、土師器の壺15点・甕19点・高坏2点・鉢1点・坏7点、鉄滓1点で、覆土中から散在的に出土した。時期を比定した資料は貯蔵穴から出土した土師器の坏である。

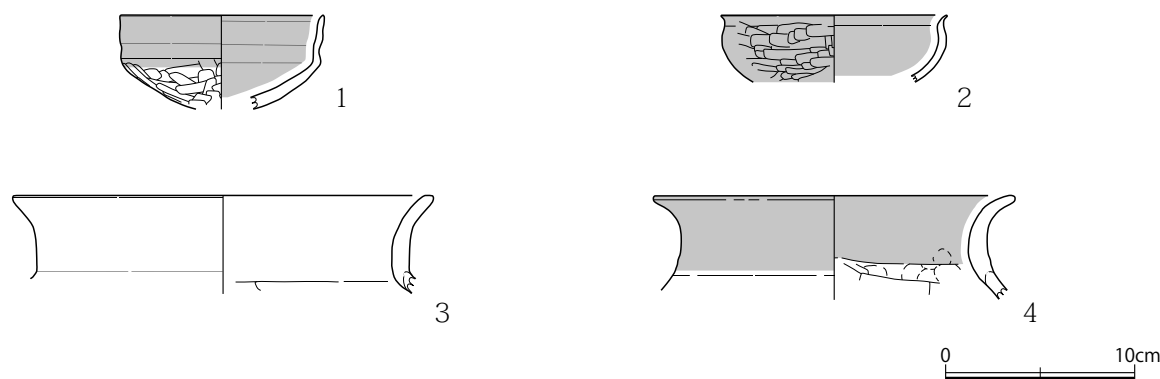
[時 期] 古墳時代後期 (6世紀前葉)。



第17図 279号住居跡・カマド (1/60・1/30)



第18図 279号住居跡貯蔵穴・ピット・掘り方 (1/60・1/30)



第19図 279号住居跡出土遺物（1／4）

< >内は現存値・( )推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	焼成	胎土	調整	出土位置	遺存度	時期
第19図1	土師器 環	<5.0>	10.8	-	口縁部と体部との境に弱い段をもち、外上方にやや開く／口縁部は2本の陵がめぐる／赤色有段環	内外面：明赤褐色・にぶい赤褐色	良	密／白色粒・小石	内面：ヨコナデ、ナデ／外面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ後丁寧なヘラナデ／内面および外面口縁部に赤彩	貯蔵穴	口縁部～胴部40%	6c初頭
第19図2	土師器 環	<5.6>	(12.0)	-	体部は丸みを帯び、口縁部は短く外反する／比企型環	内外面：赤褐色・橙色	良	密／赤色粒・小石・砂粒	内面：ヨコナデ、ナデ／外面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ後丁寧なヘラナデ／内外面に赤彩	貯蔵穴	口縁部～胴部10%	6c初頭
第19図3	土師器 甕	<5.5>	(22.2)	-	「コ」の字口縁	外面：浅黄橙色、橙色 内面：橙色・褐灰色	良	密／砂粒	内面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ／外面：ヨコナデ	貯蔵穴	口縁部～頸部10%	6c初頭
第19図4	土師器 壺	<5.4>	(19.0)	-	口縁部はゆるやかに外反する	外面：橙色 内面：灰黄色	良	密／黒雲母・石英・赤色粒・砂粒	内面：ヨコナデ／外面：口縁部ヨコナデ／頸部指頭押圧後以下ヘラナデ／内外面口縁部に赤彩	貯蔵穴	口縁部～頸部5%	6c初頭

第7表 279号住居跡出土遺物一覧

(単位：cm)

**遺物** (第19図、第7表)

**[土器]** (第19図、第7表)

1～2は土師器の環、3は土師器の甕、4は土師器の壺である。

280号住居跡

**遺構** (第20・21図)

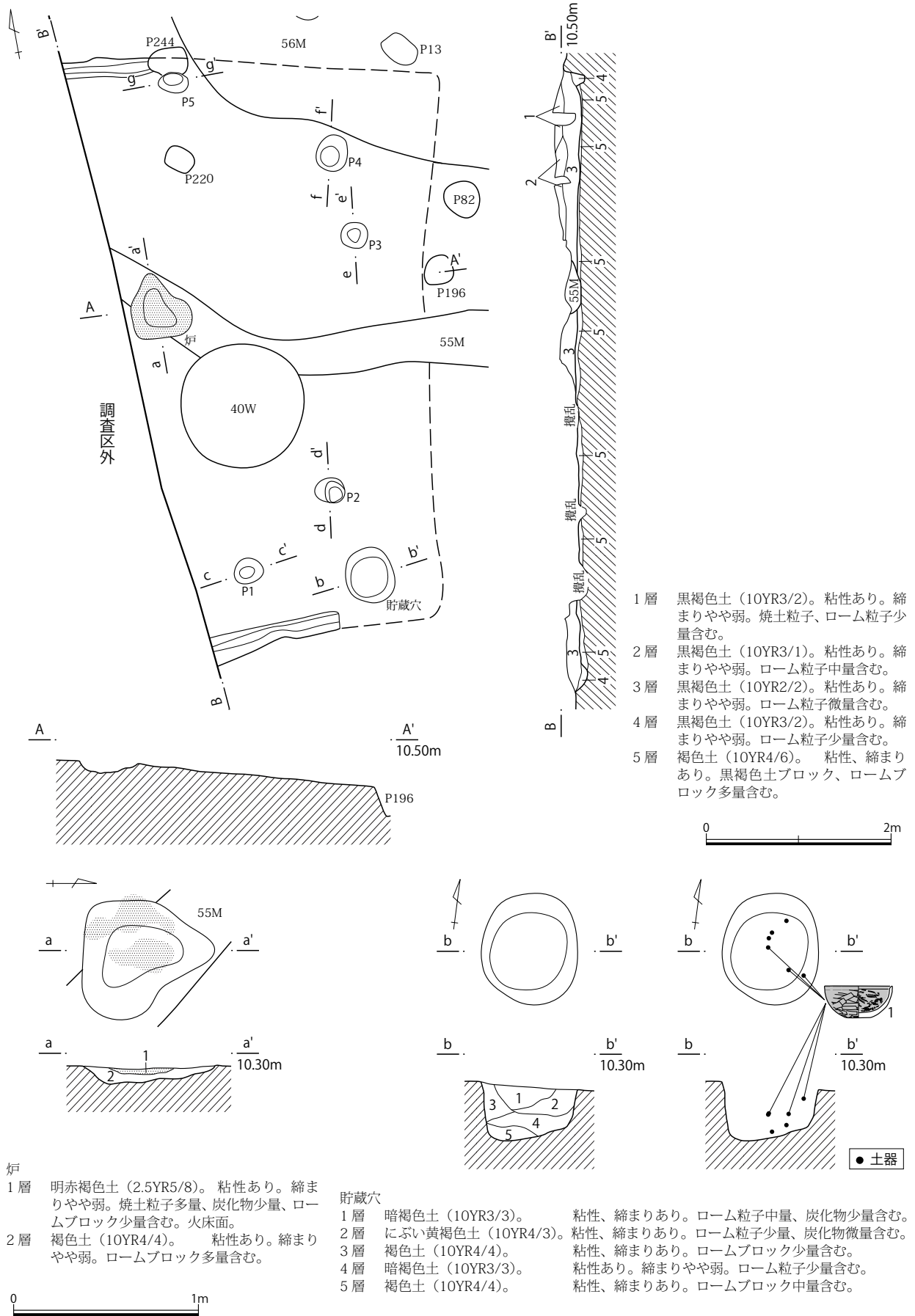
**[位置]** (A-3) グリッド。

**[検出状況]** 西側は調査区外に延び、中世以降の遺構に切られる。上部の大半は近世以降に削平され、ほぼ掘り方のみの検出であった。

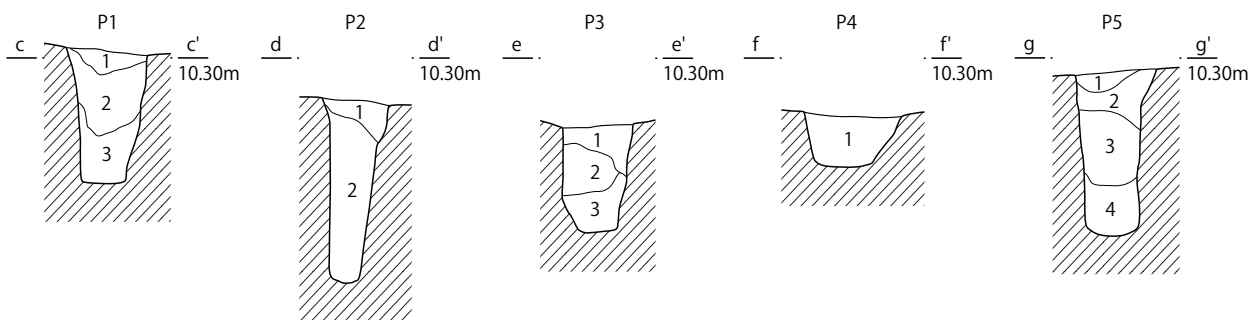
**[構造]** 平面形：方形もしくは長方形と考えられる。規模：長軸 6.34m / 短軸不明 / 深さ 1～28 cm。壁：1～8 cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-9°-E。壁溝：上幅 12～22 cm / 下幅 4～10 cm / 深さ 1～4 cm。床面：西側壁際では厚さ 1～5 cmで施される。中央から東側は上部を削平され検出されなかった。カマド：カマドは検出されなかったが、中央部に地床炉1基を検出した。平面形は歪な円形で、残存径 64～70 cmで、深さは 5 cm前後を測る。貯蔵穴：南東コーナーと推定される位置に構築される。平面形は円形で、規模は径 53～60 cmで、深さは 31 cm前後を測る。柱穴：床面に5本のピットが検出されたが、規模と位置関係から支柱穴と判断できなかった。

**[覆土]** 5層に分層され、黒褐色土を主体とする。

**[遺物]** 出土遺物は破片を含め、土師器の甕 12点・高環 4点・環 4点で、大半が貯蔵穴から出土し



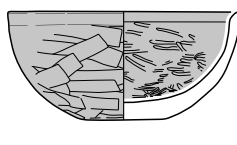
第20図 280号住居跡・炉・貯蔵穴 (1/60・1/30)



- P1**  
 1層 褐色土 (10YR4/4)。粘性、締まりあり。ローム粒子少量含む。  
 2層 褐色土 (10YR4/6)。粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量含む。  
 3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量含む。
- P2**  
 1層 褐色土 (10YR4/4)。粘性、締まりあり。黒褐色土ブロック少量、炭化物少量含む。  
 2層 褐色土 (10YR4/6)。粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量含む。
- P3**  
 1層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性あり。締まりやや弱。ロームブロック少量、小礫微量含む。  
 2層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性あり。締まり弱。小礫、砂粒少量含む。  
 3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量含む。
- P4**  
 1層 黒褐色土 (10YR3/2)。粘性あり。締まりやや弱。ロームブロック中量含む。
- P5**  
 1層 黒褐色土 (10YR3/2)。粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子中量、ロームブロック微量含む。  
 2層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性あり。締まり弱。ロームブロック少量含む。  
 3層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性あり。締まり弱。ロームブロック微量含む。  
 4層 褐色土 (10YR4/4)。粘性あり。締まり弱。ロームブロック中量含む。



第21図 280号住居跡ピット (1/30)



第22図 280号住居跡出土遺物 (1/4)

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	焼成	胎土	調整	出土位置	遺存度	時期
第22図1	土師器 坏	<5.8>	(12.2)	(4.7)	椀状タイプ/口縁部は短く僅かに外傾、内面に稜をもつ	内外面赤彩：にぶい赤褐色・暗赤灰色	良	密 / 橙色粒・白色粒・小石	内面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ後粗いミガキ / 外面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ後ヘラナデ / 内外面に赤彩	貯蔵穴	口縁部～底部 40%	5c 中葉

(単位：cm)

第8表 280号住居跡出土遺物一覧

た遺物である。時期を比定した遺物は貯蔵穴から出土した土師器の坏である。

[時期] 古墳時代後期 (5世紀中葉～後葉)。

[遺物] (第22図、第8表)

[土器] (第22図、第8表)

1は土師器の坏である。

### (3) ピット (第24図、第9表)

本調査地点で古墳時代後期から平安時代のピットと判断したものは全部で12本である。規格的に並ぶものは検出されず、単独のピットと考えられる。出土遺物に乏しいため詳細な時期は不明であるが、

( )は現存値・推定値 単位はm

遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ	遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ	遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ
P9	(B-2)G	0.48	0.34	0.48	P138	(B-2)G	(0.42)	(0.21)	0.24	P145	(B-3)G	0.20	0.19	0.25
P68	(A-2)G	(0.58)	(0.54)	0.17	P142	(A-3)G	0.24	0.23	0.18	P146	(A・B-3)G	0.27	0.23	0.44
P113	(B-2)G	0.44	0.41	0.19	P143	(A-3)G	0.39	0.28	0.29	P147	(B-3)G	0.53	0.51	0.24
P120	(B-2)G	0.18	0.13	0.14	P144	(B-3)G	0.16	0.14	0.20	P211	(A-2)G	0.43	0.34	0.29

第9表 ピット一覧

覆土の観察及び重複関係より、古墳時代後期から平安時代とした。

遺物はP 113から土師器の甕1点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

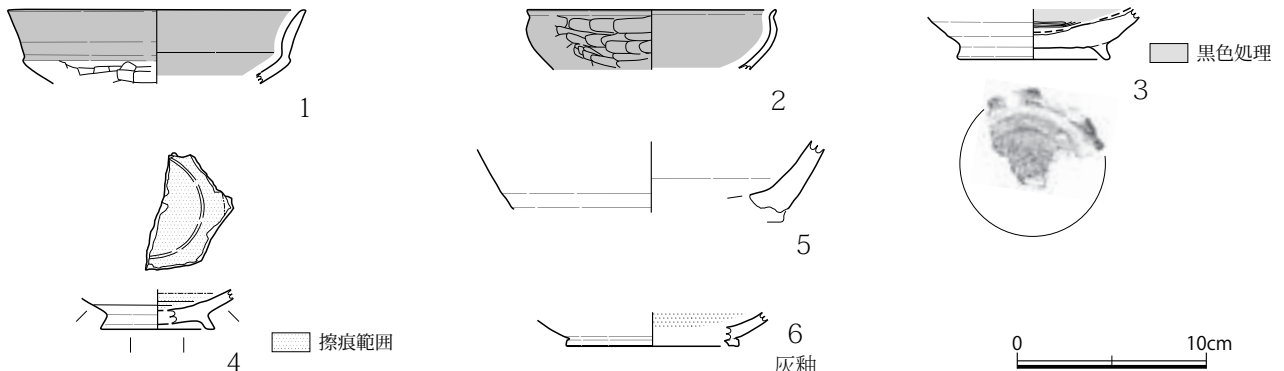
(4) 遺構外出土遺物 (第23図、第10表)

表土、攪乱及び各遺構の時期に伴わない遺物は破片を含め、須恵器の甕が4点、坏が2点、土師器の壺が17点、甕が153点、高坏が9点、鉢が1点、坏が7点出土した。出土した遺物のほとんどは小破片であったが、その中の遺物6点を図示した。

遺物

[土器] (第23図、第10表)

1・2は土師器の坏である。3は須恵器の坏である。4は須恵器の壺である。5は須恵器の甕か甕である。6は灰釉陶器の碗である。



第23図 遺構外出土遺物 (1/4)

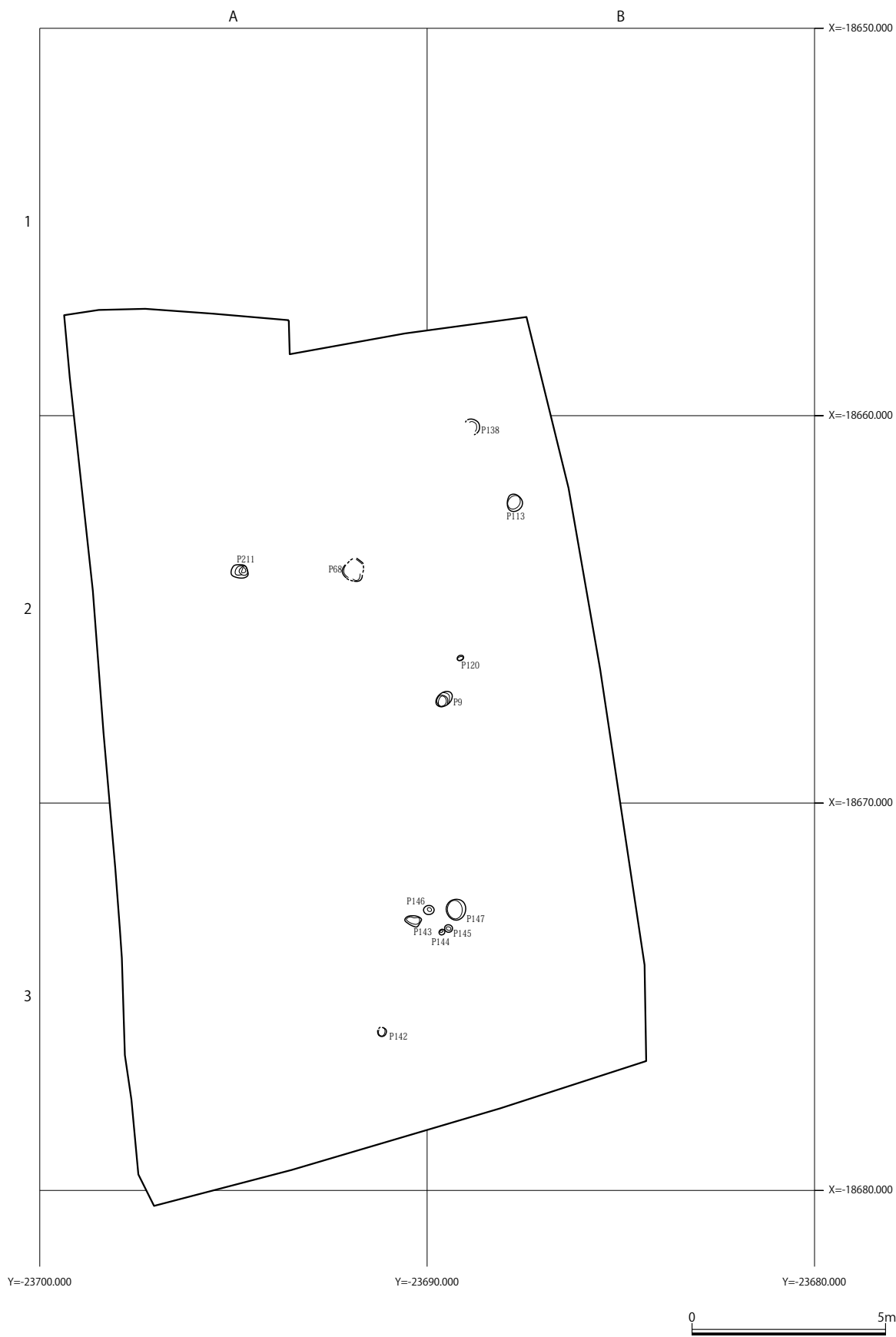
< >内は現存値・( )推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	焼成	胎土	調整	出土位置	遺存度	時期
第23図1	土師器 坏	<3.9>	(15.8)	-	口縁部と体部との境に段をもち、外傾する口縁部に1本の弱い稜がめぐる/赤色有段坏	外面：にぶい黄橙色 内外面赤彩：赤褐色	良	密/石英	内面：ヨコナデ、ナデ/外面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ後丁寧なヘラナデ/内面および外面口縁部に赤彩	822 D	口縁部 ~胴部 10%	6c 前葉
第23図2	土師器 坏	<3.2>	(13.2)	-	口縁部と体部の境に弱い稜をもち、口縁部は短く外反する/比企型坏	内面：にぶい黄橙色・黒褐色 内外面赤彩：赤褐色	良	密/白色粒・砂粒	内面：ヨコナデ、ナデ/外面：口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ後丁寧なヘラナデ/内外面に赤彩	表土	口縁部 ~胴部 10%	6c 前葉
第23図3	須恵器 坏	<2.7>	-	(7.8)	酸化炎焼成の土器/ロクロ成形/高台はハの字に開く	外面：橙色 内面：黒褐色	やや不良	密/砂粒	内面：ミガキ、黒色処理/外面：回転ナデ後高台貼付/底面ヘラ書き	表土	体部下 半 ~底部 25%	10~11c
第23図4	須恵器 壺	<2.1>	-	(3.0)	高台は体部の立ち上がり部分に貼付されハの字に開く/東金子産	外面：灰オリープ色・灰色 内面：暗灰黄色	良	密/小石	ロクロ成形/底面糸切後、高台貼付/内面は擦痕、重ね焼の痕跡がみられる	包含層	口縁部 ~底部 45%	9c 後葉
第23図5	須恵器 甕 or 甕	<3.8>	-	-	ロクロ成形/東金子産か	内外面：灰色	良	やや粗/砂粒	内外面：回転ナデ/	56M	胴部下 半	9c 後葉か
第23図6	灰釉陶器 碗	<1.8>	-	(9.0)	ロクロ成形/猿投産	外面：灰白色 内面：灰オリープ色	良	密/砂粒	内面：灰釉(自然釉)/外面：回転ナデ後高台貼付	上層	底部	10c (0-53 窯式)

第10表 遺構外出土遺物一覧

(単位：cm)





第24図 ピット分布図 (1 / 150)

---

## 第5節 中世以降

---

### (1) 概要

検出された遺構は、土坑 14 基、井戸跡 1 基、溝跡 4 条、ピット 214 本である。土坑は『城山遺跡第 42 地点』の報告書の分類基準をそのまま本報告にも採用した。井戸跡は遺構確認面より 1.4 m 前後調査し、下部は安全を考慮して未調査である。溝跡の 54・55 M は埋没谷の傾斜面に対して直交する軸で東西方向に延びる。56・57 M は硬化面を有することから、道路状遺構であると判断した。

遺物は、中世以降の陶器や磁器、石製品、金属製品などが出土しているが、小破片のものが大半を占め、出土量も僅かであった。そのためここでの時期設定については、基本的には中世以降としたが、遺物が出土した場合は、遺物の最新時期をそのまま遺構の時期とした。

### (2) 土坑

『城山遺跡第 42 地点』の報告で示した土坑の平面形及び細部の形態的な特徴の違いで分類した基準をそのまま本報告に採用する。ここで、再度その分類基準について記述する。

#### A 群 方形の土坑

- 1 類 断面が袋状の構造を呈するもの。(本調査地点では検出されず。)
- 2 類 単純構造を呈するもの。(本調査地点では検出されず。)

#### B 群 長方形の土坑

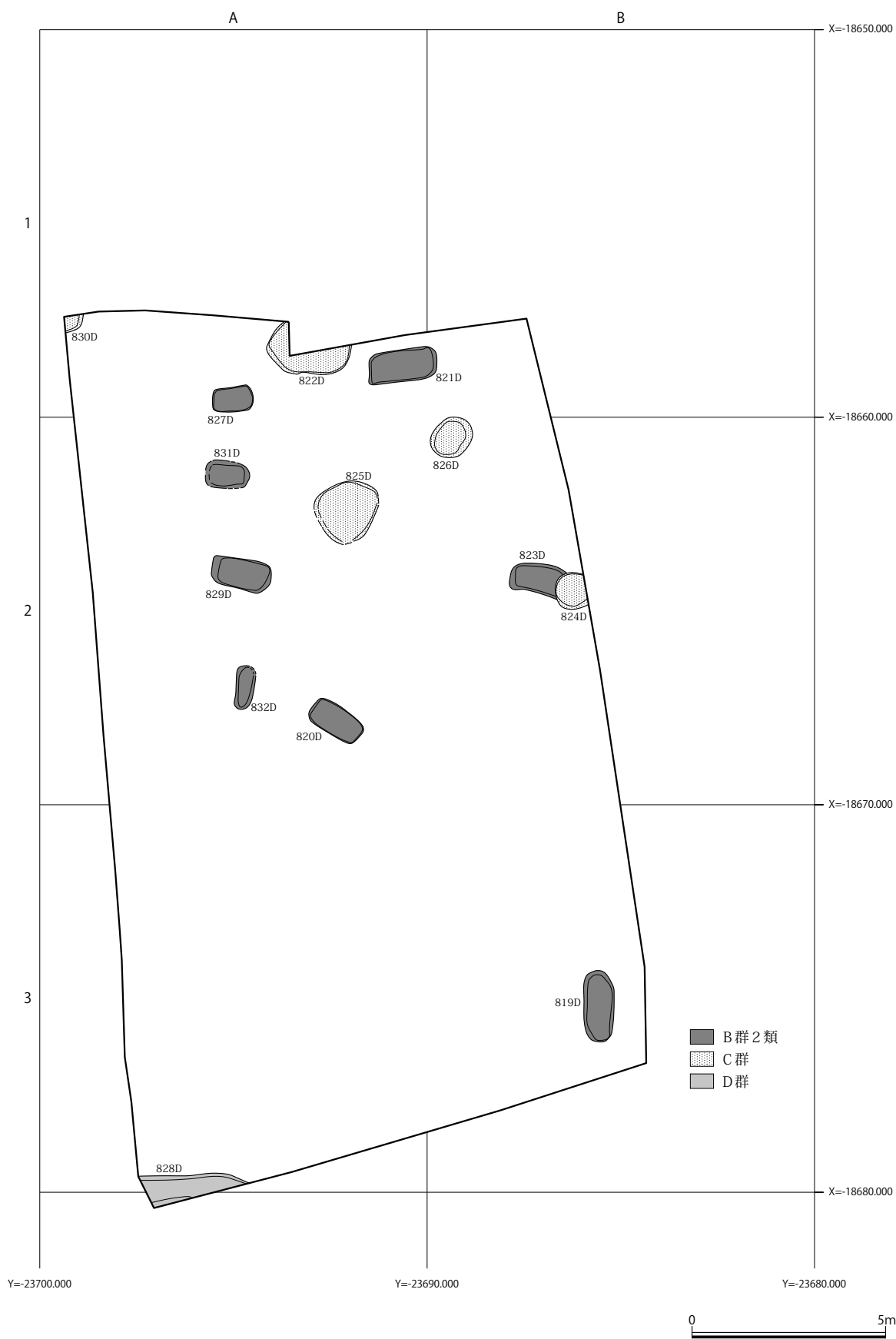
- 1 類 溝状土坑であり、長軸の長さが 3 m を超えるまたは超えるであろうと想定されるもの。(本調査地点では検出されず。)
- 2 類 幅狭の長方形土坑であり、長軸の長さが 3 m 未満で、短軸の長さが 1 m 未満のもの。8 基 (819・821・823・827・829・831・832 D)。
- 3 類 幅広の長方形土坑であり、長軸の長さが 3 m 未満で、短軸の長さが 1 m 以上のもの。(本調査地点では検出されず。)
- 4 類 火床部を有する土坑であり、1 m 前後の深い掘り込みをもつもの。(本調査地点では検出されず。)

#### C 群 円・楕円形の土坑 5 基 (822・824～826・830 D)。

#### D 群 不整形の土坑 1 基 (828 D)。

#### E 群 地下室・地下坑

- 1 類 1 豎坑 1 主体部のもの。(本調査地点では検出されず。)
- 2 類 主体部が「八手」・「王」字状を呈する特殊なもの。(本調査地点では検出されず。)



第25図 土坑分布図 (1 / 150)

## B群2類 幅狭の長方形土坑

## 819号土坑

**遺構** (第27図、第13表)

[位置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 56 Mを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸 1.84m / 短軸 0.79m / 深さ 24cm。壁：坑底はやや凹凸が見られ、壁は比較的傾斜して立ち上がる。長軸方位：N-2°-W。

[覆土] 褐色土を主体とし、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

## 820号土坑

**遺構** (第27図、第13表)

[位置] (A-2) グリッド。

[検出状況] P 38 を切る。上部は近世以降に削平される。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸 1.44m / 短軸 0.74m / 深さ 14cm。壁：坑底はやや凹凸が見られ、壁は比較的緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-56°-W。

[覆土] 2層に分層でき、暗褐色土を主体とする。自然堆積か人為的な埋め戻しかの判断はつかなかった。

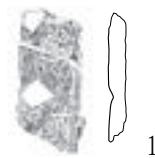
[遺物] 本遺構の時期に伴う出土遺物として、中世の板碑1点が出土した。

[時期] 中世以降。

**遺物** (第26図、第11表)

[石製品] (第26図、第11表)

1は緑泥片岩製の板碑である。



第26図 820号土坑出土遺物(1/3)

挿図番号	種別	長さ	幅	厚さ	特徴	備考
第26図1	板碑	5.1	3.2	0.7	月輪内に種子「キリーク」が刻まれている／薬研彫り	小破片

(単位：cm)

第11表 820号土坑出土遺物一覧

## 821号土坑

**遺構** (第27図、第13表)

[位置] (A・B-1) グリッド。

[検出状況] 278・279 Hを切る。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸 1.76m / 短軸 0.82m / 深さ 26cm。壁：坑底はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N - 82° - E。

[覆土] 3層に分層でき、暗褐色土を主体とし、ロームブロックを多量含む。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

### 823号土坑

遺構 (第27図、第13表)

[位置] (B-2) グリッド。

[検出状況] 824 Dに切られる。

[構造] 平面形：やや歪な長方形。規模：残存長軸 1.20m / 短軸 0.78m / 深さ 24cm。壁：坑底は凹凸が見られ、壁は比較的緩やかに立ち上がる。長軸方位：N - 79° - W。

[覆土] 3層に分層でき、暗褐色土を主体とし、ロームブロックを含む。人為的に埋められたものと考えられる。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

### 827号土坑

遺構 (第27図、第13表)

[位置] (A-1) グリッド。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸 1.10m / 短軸 0.63m / 深さ 12cm。壁：坑底は凹凸が見られ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N - 85° - E。

[覆土] 2層に分層でき、暗褐色土を主体とする。人為的に埋められたものと考えられる。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

### 829号土坑

遺構 (第27図、第13表)

[位置] (A-1) グリッド。

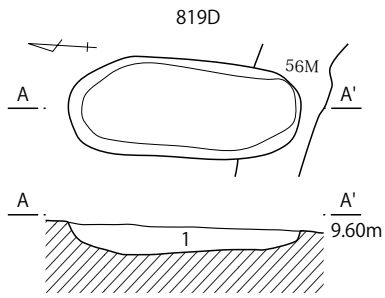
[検出状況] ピットに上部を切られる。

[構造] 平面形：長方形。規模：長軸 1.56m / 短軸 0.78m / 深さ 21cm。壁：坑底はやや凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位：N - 75° - W。

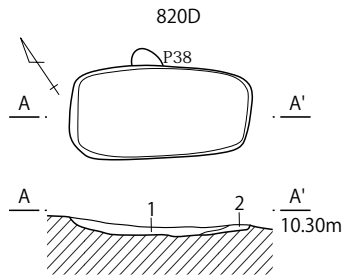
[覆土] 2層に分層でき、暗褐色土を主体とする。人為的に埋められたものと考えられる。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

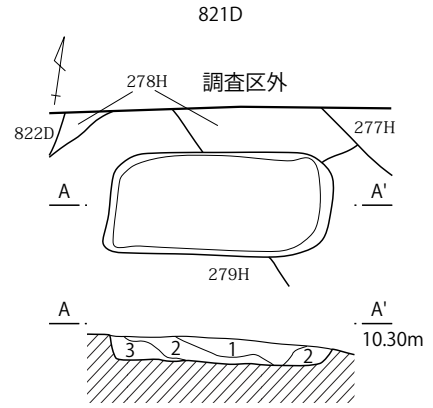
[時期] 中世以降。



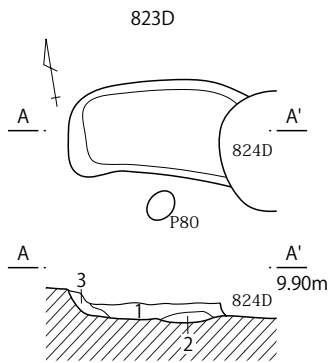
819D  
1層 褐色土 (7.5YR4/4)。粘性、締まり弱。ローム粒子微量含む。



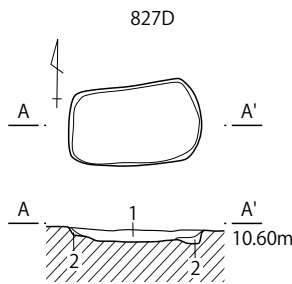
820D  
1層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。粘性、締まり弱。ローム粒子少量含む。  
2層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。粘性、締まり弱。ローム粒子、ロームブロック少量含む。



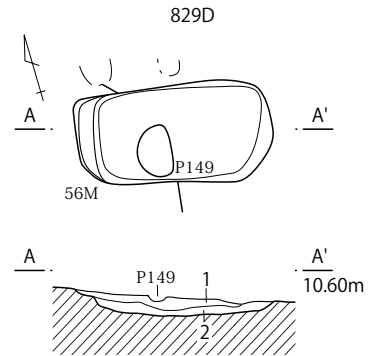
821D  
1層 暗褐色土 (10YR3/4)。粘性、締まりあり。ローム粒子、ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。  
2層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性、締まりあり。  
3層 褐色土 (10YR4/4)。粘性あり。締まり弱。ローム粒子多量含む。



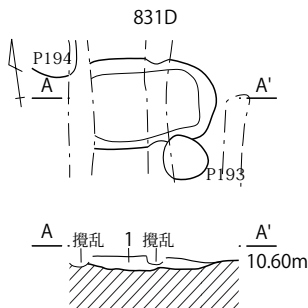
823D  
1層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性、締まりあり。ロームブロック少量、炭化物微量含む。  
2層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性、締まりあり。炭化物微量含む。  
3層 褐色土 (7.5YR4/4)。粘性あり。締まり弱。ロームブロック主体層。



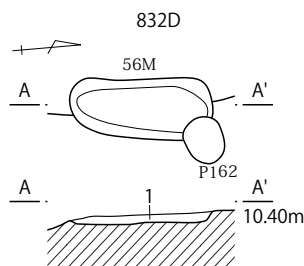
827D  
1層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性あり。締まりやや弱。ロームブロック少量含む。  
2層 褐色土 (7.5YR4/4)。粘性あり。締まりやや弱。ロームブロック少量含む。



829D  
1層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。粘性、締まりあり。ロームブロック少量、焼土粒子微量含む。  
2層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。粘性、締まりあり。ロームブロック少量含む。



831D  
1層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性、締まりあり。ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。



832D  
1層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性、締まりあり。ロームブロック少量含む。



第27図 B群2類土坑 (1 / 60)

### 831号土坑

**遺 構** (第27図、第13表)

[位 置] (A-2) グリッド。

[検出状況] 攪乱とピットに切られる。

[構 造] 平面形：長方形。規模：残存長軸 0.99m / 短軸 0.72m / 深さ 9 cm。壁：坑底はやや凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位：N-84°-W。

[覆 土] 暗褐色土を主体とする。人為的に埋められたものと考えられる。

[遺 物] 遺物は出土しなかった。

[時 期] 中世以降。

### 832号土坑

**遺 構** (第27図、第13表)

[位 置] (A-2) グリッド。

[検出状況] 上部の大半を近世以降に削平され、一部はピットに切られる。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸 1.16m / 短 0.49 軸 m / 深さ 9 cm。壁：坑底はやや凹凸が見られ、壁の立ち上がりはやや緩やかである。長軸方位：N-9°-E。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、自然堆積か人為的な埋め戻しかの判断はつかなかった。

[遺 物] 遺物は出土しなかった。

[時 期] 中世以降。

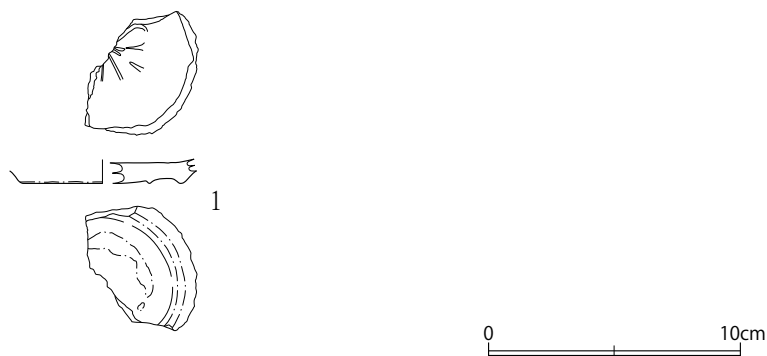
### C群 円・楕円形の土坑

#### 822号土坑

**遺 構** (第29図、第14表)

[位 置] (A-1) グリッド。

[検出状況] 北側は調査区外に延び、278 Hと 279 Hの一部を切る。



第28図 822号土坑出土遺物(1/3)

( )内は現存値・推定値

挿図番号	種別	器種	法量			胎土		製作の特徴		釉薬	生産地・系譜	出土位置	時期
			器高	口径	底径								
第28図1	陶器	皿	(1.0)	-	(6.3)	灰色	やや粗	削り出し高台	高台内に輪トチン痕／見込み印花	灰釉	瀬戸	覆土中	15c末～16c初 (大窯第1段階)

第12表 822号土坑出土遺物一覧

(単位：cm)

[構造] 平面形：不整円形。規模：残存長軸 2.03m / 残存短軸 1.37m / 深さ 27cm。壁：坑底はやや凹凸が見られ、壁は比較的急斜して立ち上がる。長軸方位：N - 79° - E。

[覆土] 3層に分層でき、黒褐色土を主体とし、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

[遺物] 本遺構の時期に伴う出土遺物として、中世の陶器1点が出土した。

[時期] 中世（15世紀末葉以降）。

**遺物**（第28図、第12表）

[陶器]（第28図、第12表）

1は瀬戸美濃系の陶器の皿である

## 824号土坑

**遺構**（第29図、第14表）

[位置]（B-2）グリッド。

[検出状況] 823 Dを切る。

[構造] 平面形：円形。規模：長軸 0.97m / 残存短軸 0.79m / 深さ 14cm。壁：坑底はやや凹凸が見られ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N - 2° - W。

[覆土] 暗褐色土を主体とする。自然堆積か人為的な埋め戻しかの判断はつかなかった。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

## 825号土坑

**遺構**（第29図、第14表）

[位置]（A-2）グリッド。

[検出状況] 279 Hと中世以降のピットに切られる。

[構造] 平面形：不整円形。規模：長軸 1.71m / 短軸 1.55m / 深さ 16cm。壁：坑底は凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位：N - 48° - E。

[覆土] 3層に分層でき、暗褐色土を主体とする。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

## 826号土坑

**遺構**（第29図、第14表）

[位置]（B-2）グリッド。

[検出状況] 279 H貯蔵穴を切る。

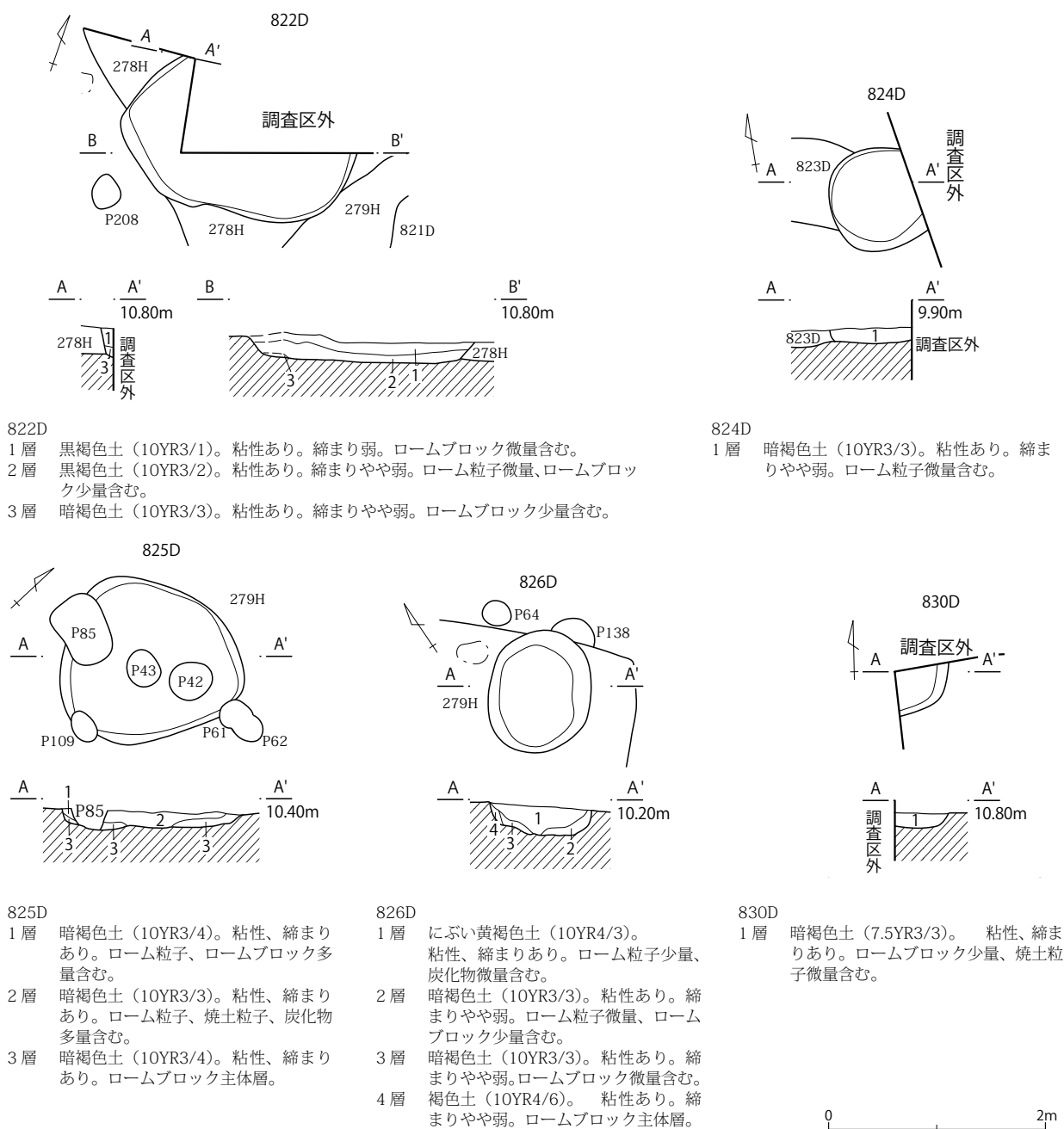
[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 1.06m / 短軸 1.00m / 深さ 27cm。壁：坑底はやや丸みを帯び、壁はやや急斜して立ち上がる。長軸方位：N - 34° - E。

[覆土] 4層に分層でき、にぶい黄褐色土を主体とする。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。





第29図 C群土坑 (1/60)

### 830号土坑

**遺構** (第29図、第14表)

**[位置]** (A-1) グリッド。

**[検出状況]** 北西は調査区外に延びる。

**[構造]** 平面形：楕円形と推測される。規模：長軸不明/短軸不明/深さ 12cm。壁：坑底はほぼ平坦で、壁は比較的急斜して立ち上がる。長軸方位：不明。

**[覆土]** 暗褐色土を主体とする。人為的に埋められたものと考えられる。

**[遺物]** 遺物は出土しなかった。

**[時期]** 中世以降。

D群 不整形の土坑

828号土坑

**遺構** (第30図、第15表)

**[位置]** (A-3・4) グリッド。

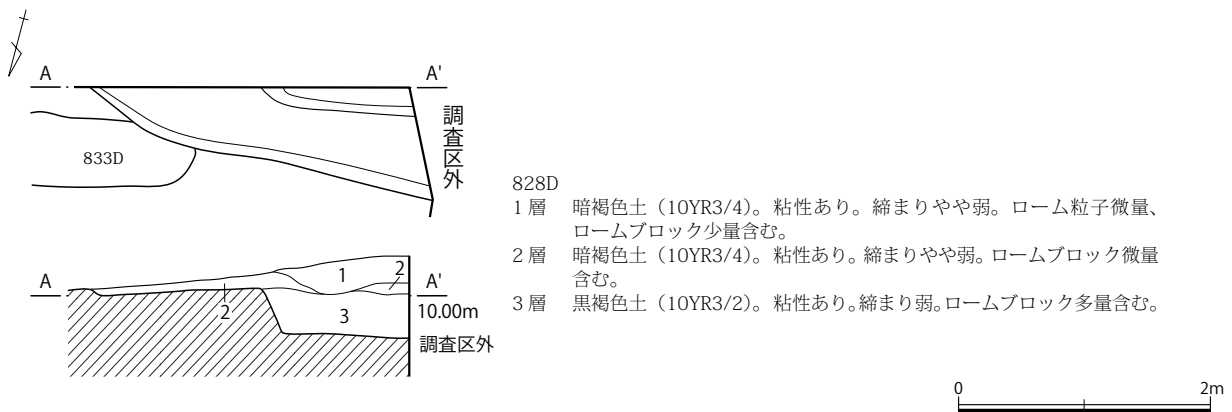
**[検出状況]** 西側と南側は調査区外に延び、833 Dを切る。

**[構造]** 平面形：不整形と推測される。**規模**：残存長軸 2.46m / 短軸不明 / 深さ 66cm。**壁**：坑底は段を有し、上段面は凹凸が見られ、下段面は底面がわずかに確認されたのみで詳細は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：不明。

**[覆土]** 3層に分層でき、下層は締まりがない。暗褐色土を主体とする。人為的に埋められたと考えられる。

**[遺物]** 遺物は出土しなかった。

**[時期]** 出土遺物がないため詳細は不明であるが、覆土の堆積状況から中世以降と考えられる。



第30図 D群土坑 (1 / 60)

( ) は現存値・推定値

遺構名	位置	分類	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物 (点数)														遺構年代	備考							
							中世						近世						中・近世										
							磁器	陶器	石器	土器	銭貨	板碑	磁器	陶器	石器	土器	鉄製品	銅製品	瓦	石器			土器	石製品	鉄製品				
819D	(B-3)G	B2	1.84	0.79	0.24	N-2° -W																					中・近世		
820D	(A-2)G	B2	1.44	0.74	0.14	N-56° -W																					中・近世		
821D	(A・B-1)G	B2	1.76	0.82	0.26	N-82° -E																					中・近世		
823D	(B-2)G	B2	(1.20)	0.78	0.24	N-79° -W																					中・近世		
827D	(A-1)G	B2	1.10	0.63	0.12	N-85° -E			1																		中・近世		
829D	(A-2)G	B2	1.56	0.78	0.21	N-75° -W																					中・近世		
831D	(A-2)G	B2	(0.99)	0.72	0.09	N-84° -W																					中・近世		
832D	(A-2)G	B2	1.16	0.49	0.09	N-9° -E																					中・近世		
合 計							0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

(単位：m)

第13表 B群土坑一覧

( ) は現存値・推定値 単位はm

遺構名	位置	分類	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物 (点数)														遺構年代	備考							
							中世						近世						中・近世										
							磁器	陶器	石器	土器	銭貨	板碑	磁器	陶器	石器	土器	鉄製品	銅製品	瓦	石器			土器	石製品	鉄製品				
822D	(A-1)G	C	(2.03)	(1.37)	0.27	N-79° -E		1																			中世		
824D	(B-2)G	C	0.97	(0.79)	0.14	N-2° -W																					中・近世		
825D	(A-2)G	C	1.71	1.55	0.16	N-48° -E																					中・近世		
826D	(B-2)G	C	1.06	1.00	0.27	N-34° -E																					中・近世		
830D	(A-1)G	C	(0.50)	(0.44)	0.12	-																					中・近世		
合 計							0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

(単位：m)

第14表 C群土坑一覧

( ) は現存値・推定値 単位はm

遺構名	位置	分類	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物 (点数)																遺構年代	備考		
							中世						近世						中・近世							
							磁器	陶器	炆器	土器	銭貨	板碑	磁器	陶器	炆器	土器	鉄製品	銅製品	瓦	炆器	土器	石製品			鉄製品	
828D	(A-3・4)G	D	(2.46)	(0.92)	0.66	-																		中・近世		
合計							0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

第15表 D群土坑一覧

(単位:m)

### (3) 井戸跡

#### 40号井戸跡

**遺構** (第31図、第16表)

[位置] (A-3) グリッド。

[検出状況] 280 Hと 55 Mを切る。

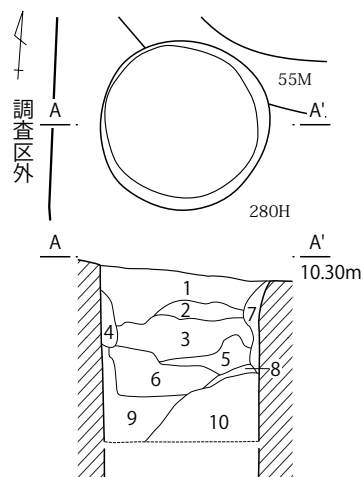
[構造] 平面形：円形。規模：径 1.37 ~ 1.36m / 深さ不明。壁：垂直に垂下している。

[覆土] 10層に分層でき、ロームブロックを多量含む暗褐色土・黒褐色土を主体とする。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中・近世。

[所見] 危険防止のため、深さ約 1.50m 掘り下げたところで調査を中止した。



40W

- 1層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。粘性あり。締まり弱。黒褐色土ブロック、ロームブロック多量含む。
- 2層 褐色土 (7.5YR4/4)。粘性あり。締まりやや弱。ロームブロック多量含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。粘性あり。締まり弱。ロームブロック中量含む。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性あり。締まり非常に弱。ロームブロック多量含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。粘性あり。締まり弱。ロームブロック非常に多量含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。粘性あり。締まり弱。ロームブロック微量含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。粘性あり。締まり非常に弱。ローム粒子少量含む。
- 8層 黒色土 (10YR2/1)。粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子微量含む。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3)。粘性あり。締まりやや弱。ロームブロック中量含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。粘性あり。締まりやや弱。ローム粒子少量含む。



第31図 40号井戸跡 (1/60)

( ) は現存値・推定値

遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物 (点数)																遺構年代	備考			
						中世						近世						中・近世								
						磁器	陶器	炆器	土器	銭貨	板碑	磁器	陶器	炆器	土器	鉄製品	銅製品	瓦	炆器	土器	石製品			鉄製品		
40W	(A-3)G	1.37	1.36	(1.46)	N-20°-W																			中・近世		
合計						0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

(単位:m)

第16表 井戸跡一覧

#### (4) 溝跡

##### 54号溝跡

**遺構** (第32図、第17表)

[位置] (A・B-3) グリッド。

[検出状況] 溝は東西方向で直線的に伸び、東側は調査区外で、西側端部は削平を受けて検出できなくなる。

[構造] 規模：検出された長さ 6.00m / 上端幅 0.79m 前後 / 下端幅 0.65m 前後 / 遺構確認面からの深さ東側 0.16m ~ 西側 0.05m。断面形：皿状。溝底の標高：東側 9.3m ~ 西側 10.1m。西側から東側に向けて比較的急斜している。走行方位：N - 81° - W。

[覆土] 3層に分層でき、黒色土を主体とし、自然堆積によるものである。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

[所見] 本遺構は出土遺物が少ないことから、溝の具体的な時期や機能の断定はできないが、東側に形成された埋没谷の谷部方向に傾斜する。

##### 55号溝跡

**遺構** (第32図、第17表)

[位置] (A・B-3) グリッド。

[検出状況] 溝の走行はほぼ 54 M と同軸方向で、西側で北寄りに「く」の字に緩やかに屈曲する。280 H を切り、40 W に切られる。西側は調査区外に伸び、東側は南東部で収まる。

[構造] 規模：検出された長さ 11.09m / 上端幅 0.62m 前後 / 下端幅 0.40m 前後 / 遺構確認面からの深さ東側 0.15m ~ 西側 0.05m。断面形：皿状。溝底の標高：東側 9.4m ~ 西側 10.3m。西側から東側に向けて比較的急斜している。走行方位：N - 78° - W。

[覆土] 2層に分層でき、黒褐色土を主体とし、自然堆積によるものである。

[遺物] 本遺構の時期に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

[時期] 中世以降。

[所見] 54 M と同様に埋没谷の谷部方向に傾斜する。

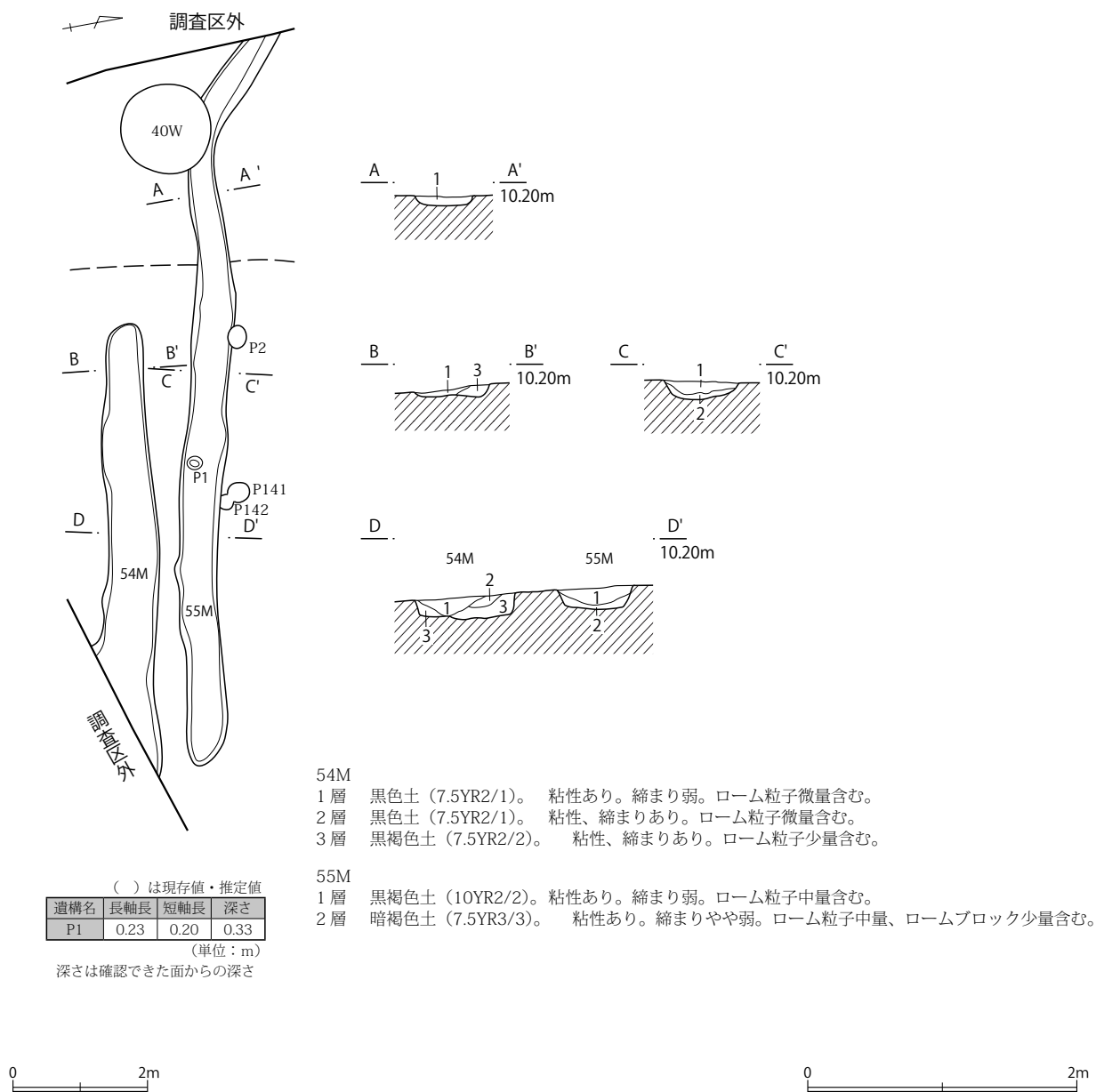
##### 56号溝跡

**遺構** (第33・34図、第17表)

[位置] (A・B-2・3) グリッド。

[検出状況] 溝の走行は南北方向から南東方向に弓なりに屈曲する溝である。819・829・832 D に切れ、280 H を切る。北西側は収まり、東側は調査区外に伸びる。

[構造] 規模：検出された長さ 23.26m / 上端幅東側 0.80m 前後 ~ 西側 3.00m 前後 / 下端幅東側 0.60m 前後 ~ 西側 2.70m 前後 / 遺構確認面からの深さ東側 0.05m ~ 西側 0.20m。断面形：皿状。溝底の標高：東側 9.3m ~ 西側 10.5m。西側から東側に向けて比較的急斜している。走行方位：東側 N - 69° - W。西側 N - 9° - W。硬化面：断面観察の結果、西側で2面、東側で1面の硬化面が確認できた。硬化面幅：西側 1.05 ~ 1.70m / 東側 0.4 ~ 0.5m / 層厚 2 ~ 10cm。ピット列：東側の傾斜面において溝



第32図 54・55号溝跡 (1/50・1/100)

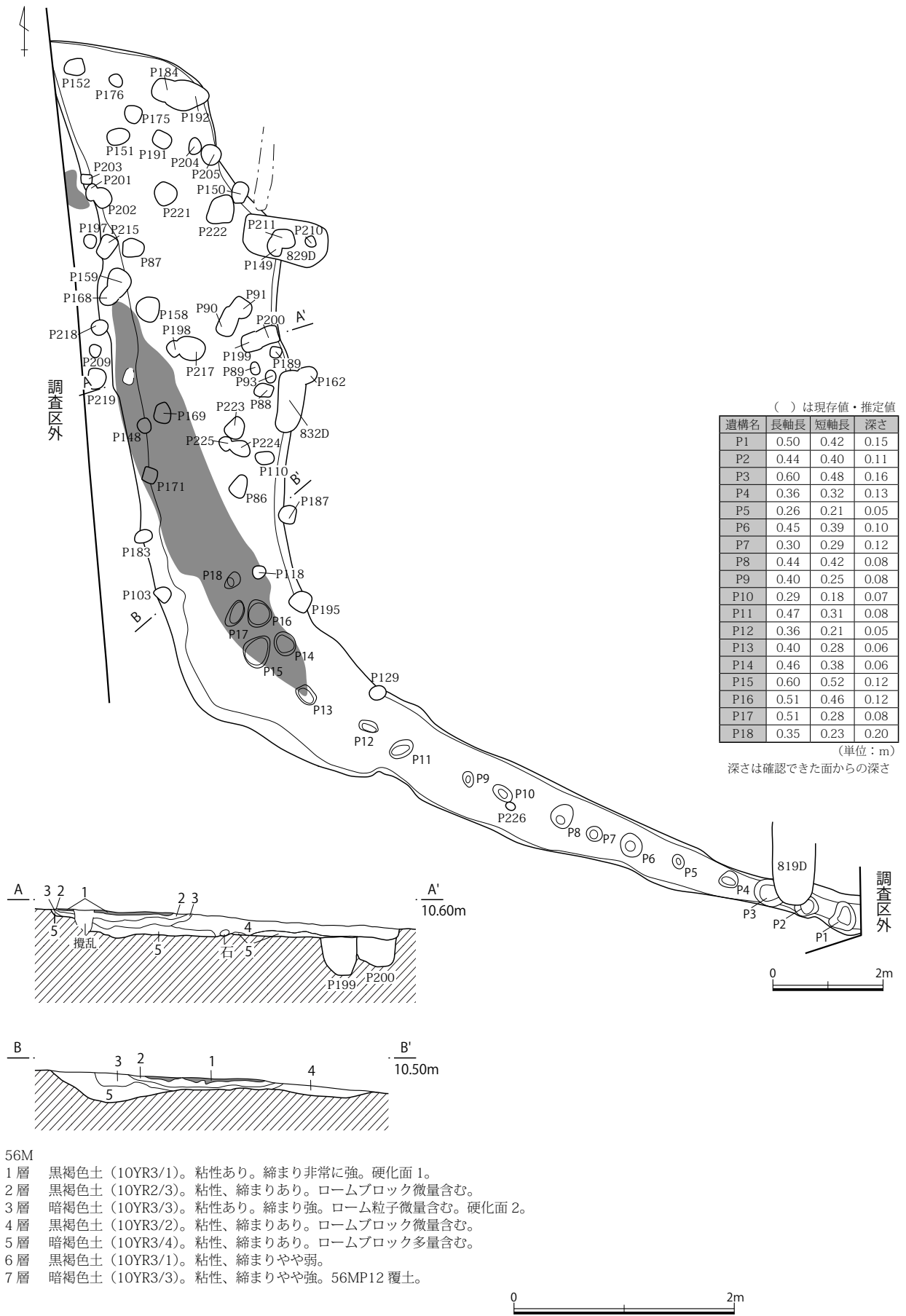
底部に一定の間隔をもつピットが検出された。底部からの深さは5～20cmほどで、ピット内壁においても硬化した面を有していた。

〔覆土〕 7層に分層でき、黒褐色土を主体とする。第1層と第3層が硬化した面である。

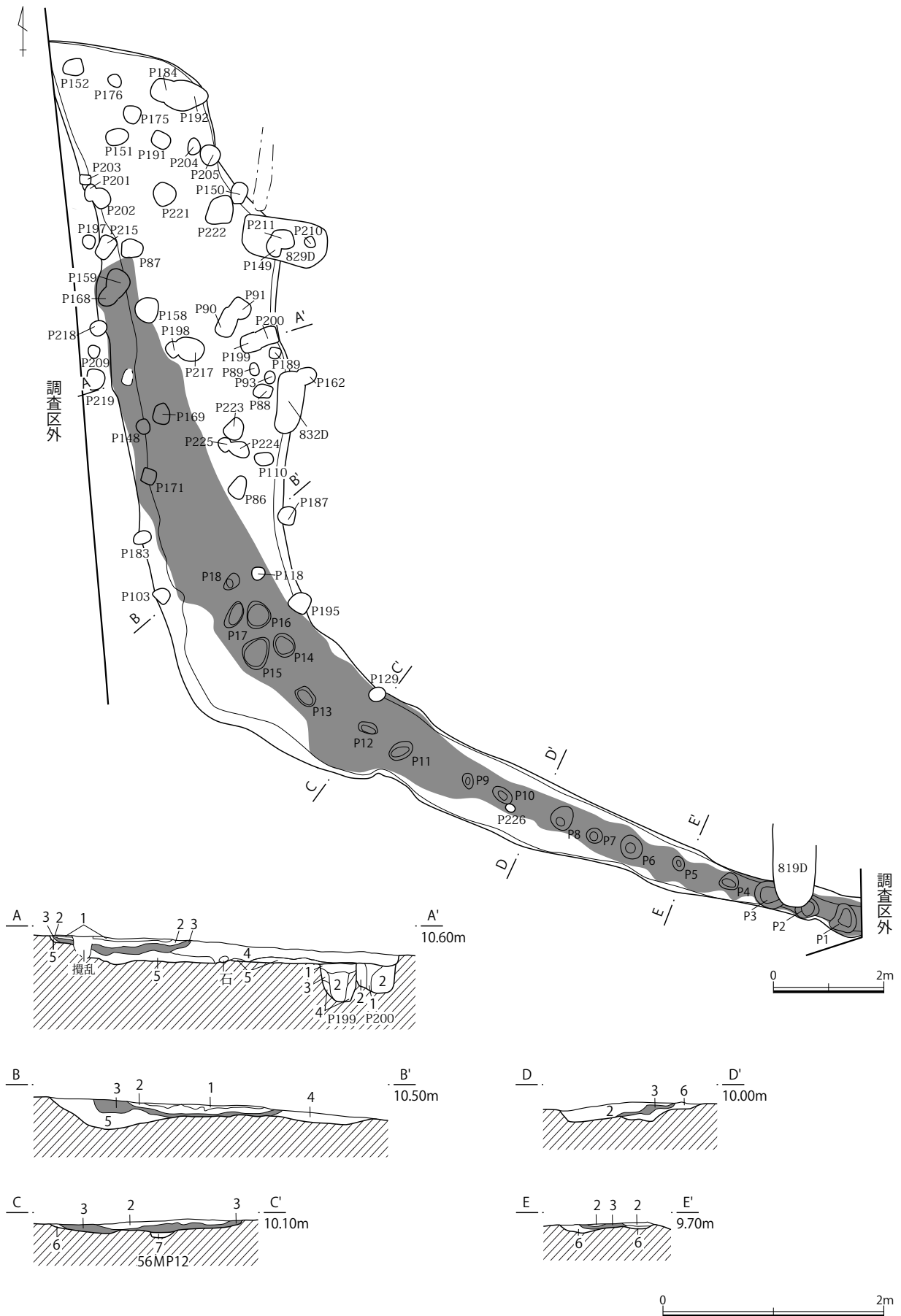
〔遺物〕 出土遺物は破片を含め、中世の陶器が9点、鉢が1点、石製品が1点、鉄製品が2点、近世の陶器が1点出土した。

〔時期〕 近世 (18世紀代)。

〔所見〕 底及び覆土中から2面分の硬化面が検出されたことから、道路として使用された可能性が高い。



第33図 56号溝跡 硬化面1 (1/50・1/100)



第34図 56号溝跡 硬化面2 (1/50・1/100)

57号溝跡

**遺構** (第35図、第17表)

**[位置]** (A・B-2) グリッド。

**[検出状況]** 上部のほぼ全てを削平され、検出されたのは僅かな硬化面のみである。南西方向から北東方向に延びるが、詳細は不明である。

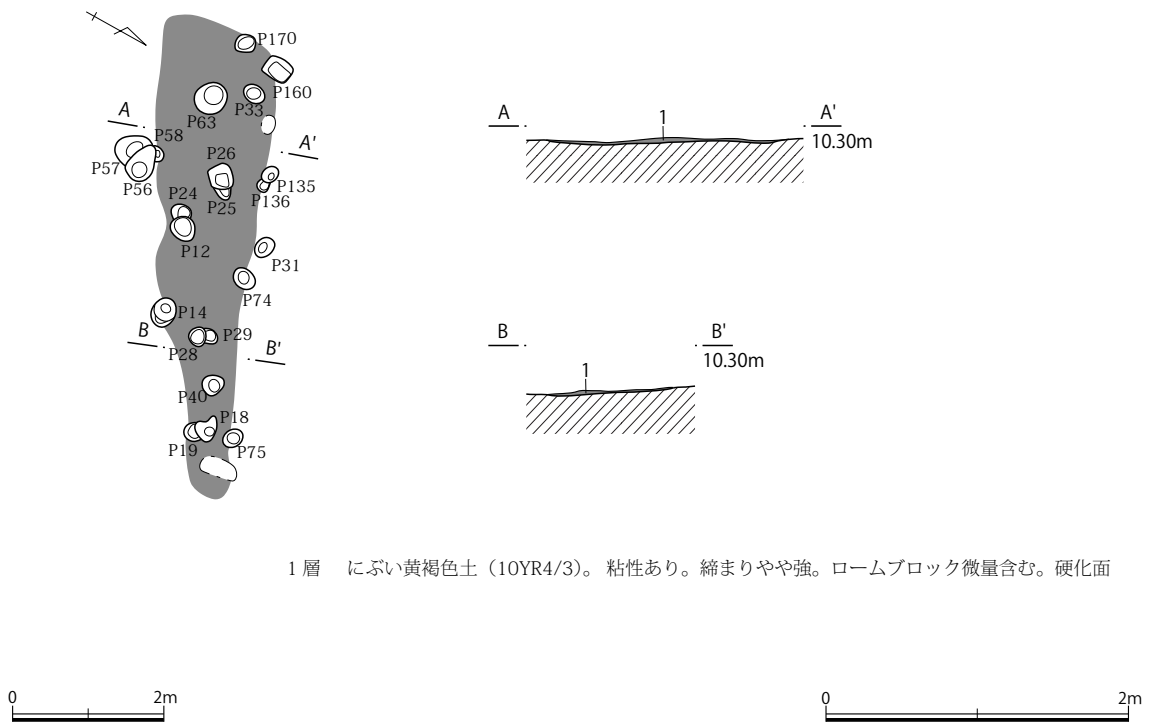
**[構造]** 規模：検出された長さ 6.24m / 上端幅 1.50m 前後 / 下端幅 1.50m 前後 / 遺構確認面からの深さ 1cm 前後。溝底の標高：東側 9.8m ~ 西側 10.2m。西側から東側に向けて緩やかに傾斜している。走行方位：N-63°-W。硬化面：1面の硬化面が確認できた。硬化面幅：西側 1.20 ~ 1.50m / 東側 0.50 ~ 0.80m / 層厚 1cm 前後。

**[覆土]** ロームブロックを少量含む、にぶい黄褐色土主体の硬化面のみである。

**[遺物]** 遺物は出土しなかった。

**[時期]** 中世以降。

**[所見]** 溝底から硬化面が検出されたことから、道路として使用された可能性が高い。



1層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。粘性あり。締まりやや強。ロームブロック微量含む。硬化面

第35図 57号溝跡 (1 / 50・1 / 100)

遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物 (点数)													遺構年代	備考							
						中世						近世					中・近世										
						磁器	陶器	炆器	土器	銭貨	板碑	磁器	陶器	炆器	土器	鉄製品	銅製品	瓦			炆器	土器	石製品	鉄製品			
54M	(A・B-3)G	(6.00)	0.79	0.16	N-81°-W																			中世以降			
55M	(A・B-3)G	(11.09)	0.62	0.15	N-78°-W																			中世以降			
56M	(A・B-2・3)G	(23.26)	3.19	0.20	N-69°-W		10						1										1	2	近世	道路	
57M	(A・B-2)G	6.24	1.50	0.01	N-63°-E																				中世以降	道路か	
合 計						0	10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2		

( ) は現存値・推定値

(単位：m)

第17表 溝跡一覧



(5) ピット (第37図、第19～22表)

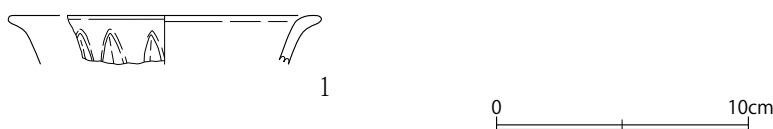
本調査地点で中世以降のピットと判断したものは全部で214本である。本ピット中には建物跡などの遺構になるものも存在している可能性があるが、本調査中では確認されなかった。また、出土遺物に乏しいため、詳細な時期は不明であるが、覆土の観察及び重複関係から、中世以降と判断したものが多い。

遺物はP 85、87、192から中・近世のかわらけ、磁器、陶器、鉄釘が出土した。そのうち図示したものは1点である。

遺物 (第36図、第18表)

[磁器] (第36図、第18表)

1は龍泉窯の青磁の皿である



第36図 87号ピット出土遺物 (1/3)

( )内は現存値・推定値

挿図番号	種別	器種	法量			胎土		製作の特徴		釉薬	生産地・系譜	出土位置	時期
			器高	口径	底径								
第36図1	磁器	折縁皿	(2.0)	(12.6)	-	灰色	密		外面片面彫り/蓮弁文	青磁釉	中国/龍泉窯	P 87	14C中葉

(単位: cm)

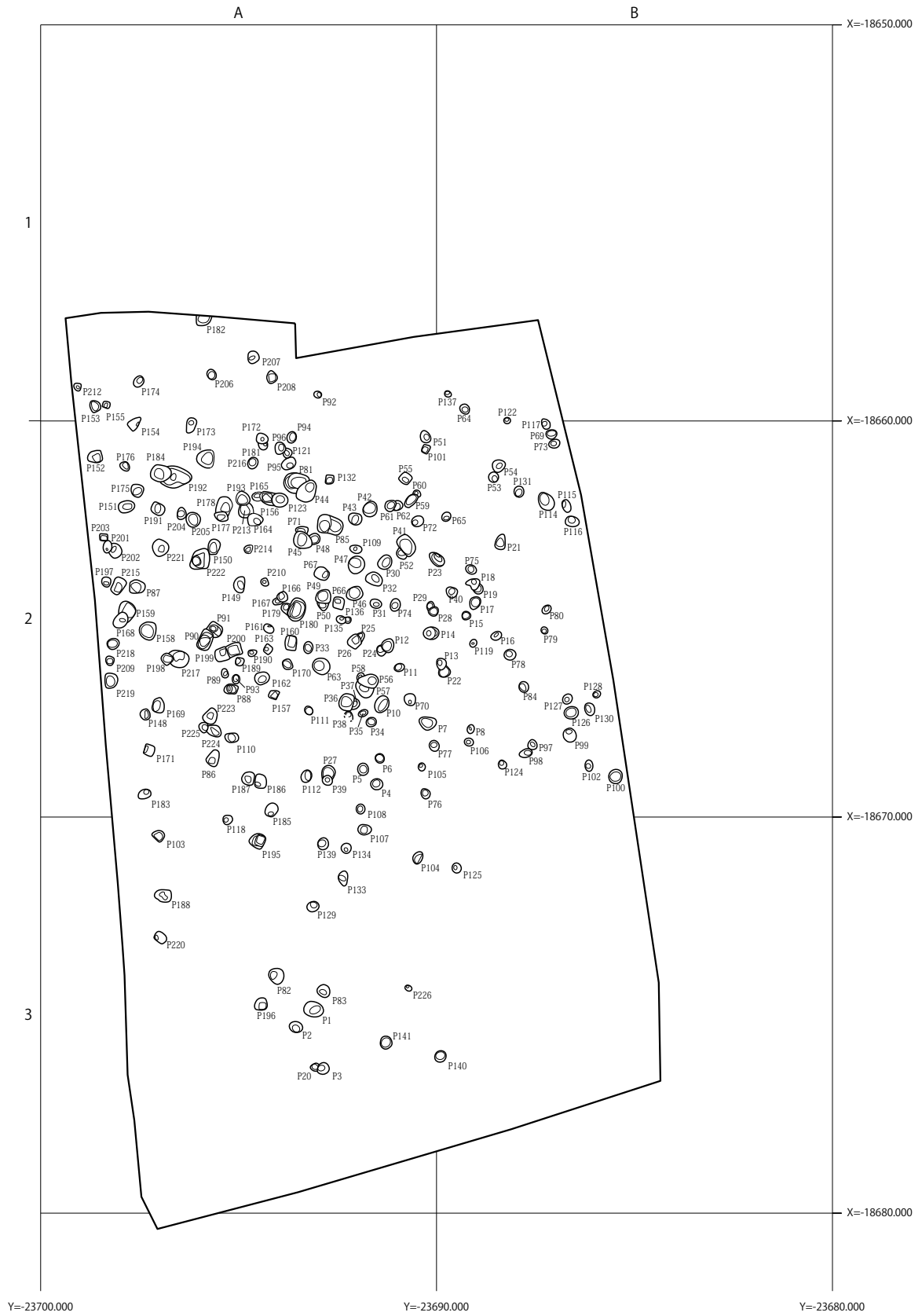
第18表 87号ピット出土遺物一覧

( )は現存値・推定値

遺構名	位置	長軸長	短軸長	深さ	長軸方位	出土遺物(点数)													遺構年代	備考								
						中世					近世					中・近世												
						磁器	陶器	石器	土器	銭貨	板碑	磁器	陶器	石器	土器	鉄製品	銅製品	瓦			石器	土器	石製品	鉄製品				
P1	(A-3)G	0.49	0.38	0.75	-																					中・近世		
P2	(A-3)G	0.34	0.28	0.61	-																						近世	
P3	(A-3)G	(0.30)	(0.30)	0.29	-																						中・近世	
P4	(A-2)G	0.31	0.28	0.32	-																						中・近世	
P5	(A-2)G	0.31	0.28	0.49	-																						近世	
P6	(A-2)G	0.25	0.22	0.16	-																						中・近世	
P7	(A-2)G	0.41	0.35	0.30	-																						中・近世	
P8	(B-2)G	0.23	0.17	0.41	-																						近世	
P10	(A-2)G	0.46	0.35	0.38	-																						中・近世	
P11	(A-2)G	0.27	0.19	0.32	-																						中・近世	
P12	(A-2)G	0.35	0.31	0.29	-																						近世	
P13	(B-2)G	0.32	0.25	0.27	-																						近世	
P14	(A・B-2)G	0.40	0.32	0.42	-																						中・近世	
P15	(B-2)G	0.22	0.22	0.22	-																						近世	
P16	(B-2)G	0.28	0.21	0.37	-																						近世	
P17	(B-2)G	0.34	0.27	0.27	-																						近世	
P18	(B-2)G	0.27	0.26	0.42	-																						中・近世	
P19	(B-2)G	(0.24)	(0.16)	0.29	-																						近世	
P20	(A-3)G	(0.20)	(0.19)	0.18	-																						中・近世	
P21	(B-2)G	0.40	0.25	0.24	-																						近世	
P22	(B-2)G	(0.29)	(0.21)	0.19	-																						近世	
P23	(A・B-2)G	0.42	0.29	0.72	-																						近世	
P24	(A-2)G	(0.27)	(0.17)	0.35	-																						近世	
P25	(A-2)G	(0.20)	(0.15)	0.41	-																						中・近世	
P26	(A-2)G	0.33	0.32	0.55	-																						中・近世	
P27	(A-2)G	(0.34)	(0.26)	0.17	-																						中・近世	
P28	(A・B-2)G	0.26	0.24	0.14	-																						中・近世	

(単位: m)

第19表 ピット一覧(1)

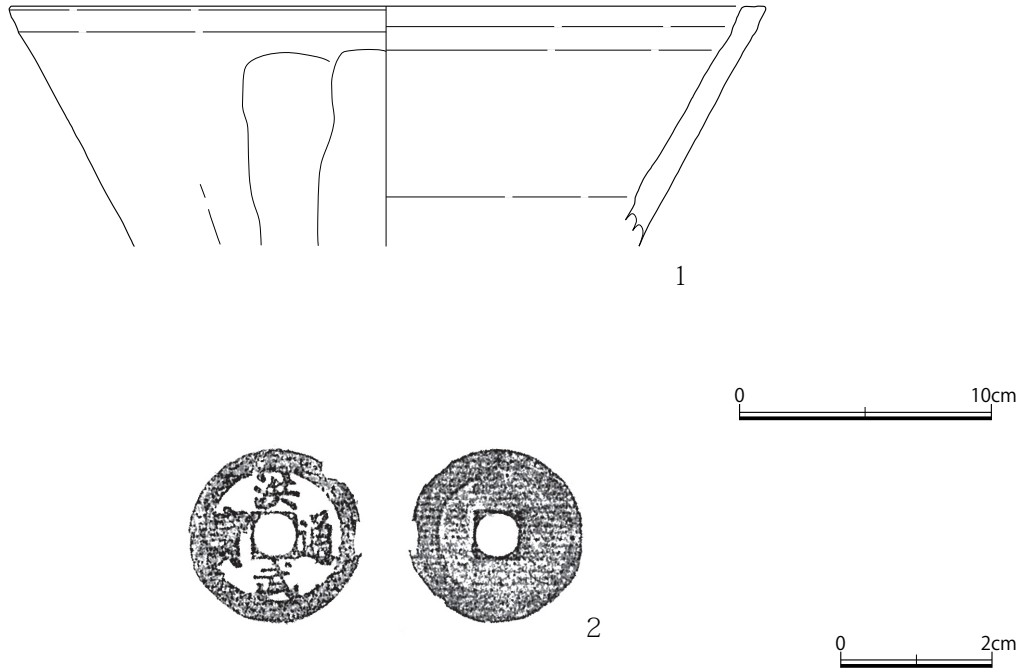


第37図 ピット分布図 (1 / 150)









第38図 遺構外出土遺物 (1 / 3 ・ 1 / 1)

( )内は現存値・推定値

挿図番号	種別	器種	法量			胎土		製作の特徴	釉薬	生産地・系譜	出土位置	時期
			器高	口径	底径							
第38図1	陶器	捏鉢か	(9.5)	(30.0)	—	黄褐色	やや粗 / 砂粒	外面ナデ / 内面ナデ	—	常滑	56M	14C後半～15C前半

(単位：cm)

第23表 遺構外出土遺物一覧

挿図番号	銭貨名	外径	方孔一辺	重量	初鑄年	欠損	出土位置	時期
第38図2	洪武通宝	23.0	5.5	2.9	1368年		表土	

(単位：mm, g)

第24表 遺構外出土銭貨一覧

遺構名	出土遺物 (点数)																遺構年代	備考
	中世						近世						中・近世					
	磁器	陶器	炆器	土器	銭貨	板碑	磁器	陶器	炆器	土器	鉄製品	銅製品	瓦	炆器	土器	石製品		
遺構外	1	5			1		2	4		3	1						1	

第25表 遺構外出土遺物種別点数一覧

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 埋没谷埋積層の層序対比

パリノ・サーヴェイ株式会社 矢作健二・石岡智武

#### はじめに

志木市城山遺跡第72地点は、武蔵野台地北部を北東方向に流下する柳瀬川下流域の右岸側に広がる武蔵野面相当の段丘上に位置する。この段丘は、貝塚ほか編(2000)による地形区分では、約8万年前に形成されたM2面に対比されている。調査区周辺の地形を国土地理院発行の2万5千分の1土地条件図でみると、柏町三丁目と柏町一丁目との間には北北西方向に下る小支谷があり、その谷の谷頭より奥には凹地または浅い谷と区分された地形が記載されている。城山遺跡第72地点は、その凹地または浅い谷の中に位置している。

発掘調査では、調査区内に作成された土層断面により、凹地または浅い谷の原形をなす谷の谷底と、それを埋積するローム層および黒ボク土層が確認された。ローム層については、発掘調査所見により、立川ローム層相当と考えられたことから、その層序を台地上の立川ローム層と対比することで、谷の埋積開始時期の推定が可能になることが期待された。

これまでに、当社では、武蔵野台地の多数の地点において立川ローム層の重鉱物組成と火山ガラスの産状を層位的に分析し、武蔵野台地上であれば、どの地点でもほぼ同様の層位において同様の組成変化を示すという結果を得ている。このことから、重鉱物組成および火山ガラスの量比の層位的な変化は、武蔵野台地程度の規模の台地に共通した土壤生成環境変化を反映している可能性が高いと考え、層序対比の指標としても有効であると考えている。本報告では、城山遺跡第72地点の埋没谷の埋積層で認められたローム層の重鉱物・火山ガラス比分析を行うことにより、武蔵野台地の立川ローム層の標準層位との対比を行う。なお、火山ガラス比では、UGとATの2枚のテフラ(後述)の降灰層準の検出をねらいとしており、本報告では、そのうちATの正確な同定も目的として、その火山ガラスの屈折率測定も行う。

#### 1. 試料

試料は、調査区南端部に設定された3号試掘坑の断面より採取された。この断面では、現地表から深度約3mまでの土層の状況が明らかにされ、発掘調査所見により、現地表から下位に向かって1層から15層までの分層がなされている。これらのうち、1層から7層までは黒ボク土層であり、8層から14層まではローム層に相当する。15層は褐色を呈する土壌化した細礫を微量含むシルト質砂層であり、その層相から埋没谷基底直上の堆積層に相当すると考えられる。

8層から14層までのローム層相当層については、発掘調査所見により、武蔵野台地の立川ローム層における標準層位との対比がなされ、ローム層最上部の8層はいわゆるソフトローム層のⅢ層、その下位の9層はいわゆるハードローム層のⅣ層、10層は第一暗色帯(BBI)に相当するV層、11層は暗色帯の間層のⅥ層、12層は第二暗色帯(BBII)上部のⅦ層、13層および14層はBBII下部のⅨa層

とⅩb層にそれぞれ対比されている。

試料は、黒ボク土層の3層、4層、6層の各層からそれぞれ試料A、試料B、試料Cが採取され、8層上面から断面最下部の15層までは、厚さ10cmで連続に、上位より試料番号1～16までの計16点が採取された。各試料の採取層位は、分析結果を呈示した第39図に併記の柱状図に示す。なお、採取された各試料の観察からは、Ⅲ層相当とされた試料は確かに孔隙が多く脆い状態であり、Ⅳ層相当とされた層位以下の試料は硬質である。また、B B I相当の試料とその上位と下位の層位の試料とは、いずれも褐色を呈し、その色調にほとんど差が認められない。一方、B B II相当とされた試料については、それより上位の層位の試料に比べて、やや灰色味を帯びた色調が識別された。

分析には、目的と層位から以下の試料選択を行った。火山ガラス比分析には、UGの検出を目的として試料C、試料番号1、2、4の4点とATの検出を目的として試料番号7、8、9、10の4点を選択し、重鉍物分析には、UGの検出が予想されるⅢ層相当層の8層とATの検出が予想されるⅥ層相当層の11層を除いたローム層各層と15層より1点ずつ、試料番号4、7、10、13、16の5点を選択した。したがって、火山ガラス比分析のみの試料は5点、重鉍物分析のみの試料は2点、重鉍物分析と火山ガラス比分析の両方を行った試料は3点になる。

屈折率測定の対象とする試料については、火山ガラス比分析により、最も割合の高い試料1点を選択する。

## 2. 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタンクスチン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉍物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉍物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述したテフラの検出同定と同様である。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉍物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

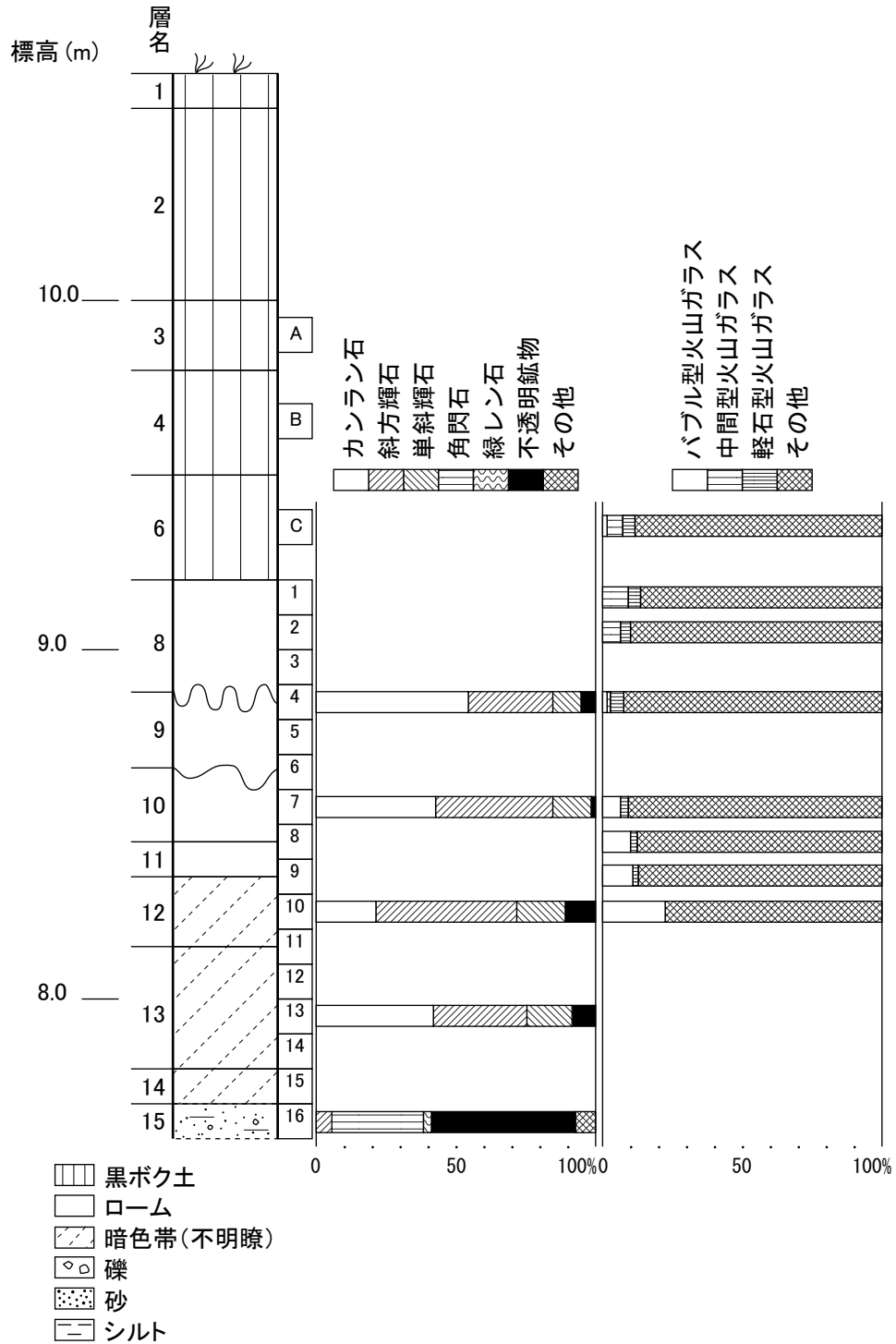
火山ガラスの屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

## 3. 結果

結果を第26表、第39図に示す。重鉍物組成は、9層試料番号4と13層試料番号13ではカンラン石が最も多く、次いで斜方輝石、単斜輝石、不透明鉍物の順に多いという組成である。10層試料番号7ではカンラン石と斜方輝石が同量程度に多く、少量の単斜輝石と微量の不透明鉍物を含む組成であり、12層試料番号10では斜方輝石が最も多く、カンラン石と単斜輝石は同量程度で少量であり、さらに少量の不透明鉍物を含む組成となっている。15層の重鉍物組成は、上位のローム層各層の組成とは全く異なる。すなわち不透明鉍物が最も多く、次いで角閃石の多い組成であり、斜方輝石が少量含まれ、微量の緑簾石と極めて微量のカンラン石や単斜輝石が含まれている。

火山ガラス比では、6層の試料Cから8層の試料番号2までは、少量ながらも中間型火山ガラスの含

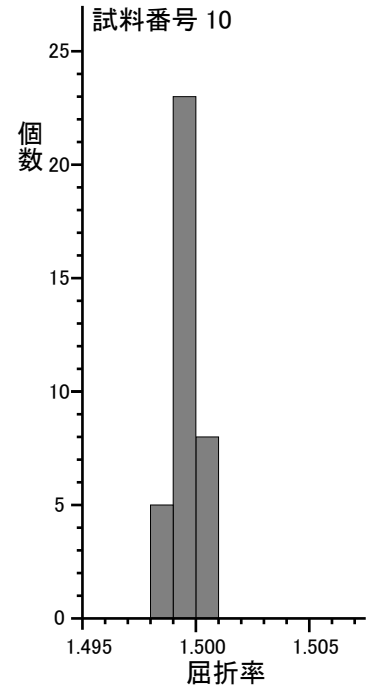




第39図 3号試掘坑の重鉱物組成および火山ガラス比

層名	試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
6	C	59	117	17	2	0	54	1	250	4	14	11	221	250
Ⅲ 8	1	72	81	14	0	0	80	3	250	1	23	11	215	250
Ⅳ 9	2	150	65	14	0	0	14	7	250	2	16	9	223	250
	4	135	75	25	0	0	13	2	250	4	3	12	231	250
V 10	7	106	104	34	0	0	4	2	250	16	0	7	227	250
Ⅵ 11	8	11	122	55	3	0	56	3	250	25	0	6	219	250
Ⅶ 12	9	22	142	51	0	0	35	0	250	27	0	5	218	250
Ⅸ a 13	10	53	125	43	2	0	27	0	250	56	0	2	192	250
	13	104	83	40	0	0	21	2	250	28	0	1	221	250
15	16	2	14	2	82	7	129	14	250	0	0	0	250	250

第26表 重鉱物・火山ガラス比分析結果



第40図 火山ガラスの屈折率

有が特徴である。この層位では、微量の軽石型火山ガラスも伴われるが、さらに下位の9層試料番号4まで同量程度に含まれる。10層試料番号7から12層試料番号10までは、少量のバブル型火山ガラスの含有が特徴であり、下位ほど多く含まれる傾向が示されている。なお、重鉱物分析を行った13層試料番号13についても火山ガラスの産状を確認したところ、バブル型火山ガラスが、試料番号10よりは少ないが、試料番号9程度には含まれていることがわかった。

屈折率の測定は、最も火山ガラスの含有量の高かった12層試料番号10のバブル型火山ガラスを対象とした。結果を第40図に示す。n1.498-1.500の比較的狭いレンジを示し、その中でもn1.499-1.500に集中する。

#### 4. 考察

火山ガラス比分析では、黒ボク土層最下部の6層からローム層最上部のソフトローム層相当のⅢ層とされる8層にかけての層位に、中間型火山ガラスが多く含まれる傾向が得られた。この中間型火山ガラスは、その形態と産出層位および武蔵野台地のローム層におけるこれまでの分析例から、立川ローム層上部ガラス質火山灰 (UG: 山崎, 1978) に由来すると考えられる。同一のテフラに由来する火山ガラスが層位幅40cm以上にわたって拡散する産状は、UG降灰後に攪乱と再堆積を繰り返したことを示唆している。このように土壤中に特定テフラが混交して産出する場合は、テフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致すると言われている (早津, 1988)。試料番号4では中間型火山ガラスが極めて微量となることから、最濃集部の下限は試料番号2または3になると考えられる。したがって、本地点におけるUGの降灰層準は、8層中部付近に推定される。UGの噴出年代については、町田・新井 (1992) などでは1.2万年前とされてきたが、町田・新井 (2003) では、その噴出年代は明記されていない。ただし、UGの由来と考えられている浅間火山の軽石流期のテフラ (浅間板鼻黄色テフラ (As-YP) など) の年

代が、放射性炭素年代では 1.3 ～ 1.4 万年前 (町田・新井,1992)、層位学的な年代も加味した暦年では 1.5 ～ 1.6 万年前とされているから、これらを U G の年代と考えて良い。

10 層から 12 層さらには概査により、13 層までの層位に含まれているバブル型火山ガラスは、U G の下位であるという産出層位と形態の特徴および屈折率から、始良 T n 火山灰 ( A T : 町田・新井 1976) に由来する。本地点における A T の火山ガラスも、上述した U G の火山ガラスと同様に広い層位幅にわたって含まれており、その最濃集部の下限も今回の分析では不明瞭である。重鉍物分析を行った試料番号 16 に火山ガラスは全く含まれていないことから、最濃集部下限はおそらく試料番号 13 から試料番号 15 までの間にあることが推定される。すなわち、本地点における A T の降灰層準は、13 層下部付近の可能性があると考えられる。A T の噴出年代は、80 年代後半から 90 年代にかけて行われた放射性炭素年代測定 (例えば松本ほか (1987)、村山ほか (1993)、池田ほか (1995) など) や 2000 年代に行われた放射性炭素年代測定 (宮入ほか (2001)、Miyairi et al(2004) など) から、放射性炭素年代ではおよそ 2.5 万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおける A T の発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ 2 と 3 との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は 2.5 ～ 3.2 万年前におよぶとされている (町田・新井,2003)。町田・新井 (2003) は、A T の放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく 2.6 ～ 2.9 万年前頃になるであろうとしている。

当社による武蔵野台地の立川ローム層の分析例では、U G の降灰層準は標準層位のⅢ層上部に推定され、A T の降灰層準は標準層位のⅥ層とⅦ層の層界付近に推定されることが多い。これに従えば、本地点の 8 層は標準層位のⅢ層にほぼ対比され、本地点の 13 層は、標準層位のⅥ層に対比されることが考えられる。発掘調査所見による標準層位との対比では、8 層はⅢ層に対比されており、今回の分析結果もこれを支持する結果となったが、13 層はⅨ a 層に対比されており、今回の分析結果による標準層位とは食い違うこととなる。ここで、さらに重鉍物組成による対比を検討してみたい。

これまでの分析例から得られている重鉍物組成による立川ローム層の対比指標は、Ⅲ層中部～Ⅲ層下部のカンラン石の極大層準、Ⅴ層直上および直下の輝石の極大層準、Ⅶ層下部のカンラン石の極大層準、Ⅸ層上部～中部のカンラン石の極小層準、Ⅹ層における斜方輝石と単斜輝石の量比の近似およびⅩ層上部～中部のカンラン石の極大層準があげられる。これらのうち、Ⅴ層上限の輝石の極大層準は、小林ほか (1971) における羽鳥の分析例以来多くの分析例で指摘されている。本地点では、まず 12 層の試料番号 10 の重鉍物組成が注目される。この重鉍物組成は、標準層位のⅤ層直上および直下の輝石の極大層準が、12 層付近にあることを示していると考えられるのである。12 層の色調が 10 層や 11 層に比べてやや暗いことも考慮すれば、12 層は標準層位のⅤ層に対比される可能性が高いと考えられる。したがって、その下位の 13 層は、やはり標準層位のⅥ層に対比される可能性が高く、その場合 14 層は、標準層位のⅥ層下部あるいはⅦ層上部に対比される。15 層については、重鉍物組成が上位のローム層とは全く異なることから、谷内の流水による堆積物であると考えられる。一方、12 層より上位の 11 層、10 層、9 層までのローム層については、標準層位のⅣ層にほぼ対比されることになる。9 層上部の試料番号 4 におけるカンラン石の多い重鉍物組成は、9 層上部付近に、標準層位のⅢ層中部～Ⅲ層下部のカンラン石の極大層準のあることを示唆する。

以上述べた対比結果から、埋没谷とされた谷内で安定してロームが形成され始め、谷内の埋積が始まった時期は、台地上で立川ローム層の標準層位のⅦ層上部からⅥ層下部が形成され始めた頃、すなわち A

Tの降灰直前の頃であったと考えられる。

[引用文献]

- 山崎晴雄 1978「立川断層とその第四紀後期の運動」『第四紀研究』Vol.16 日本第四紀学会
- 古澤 明 1995「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』Vol.101 日本地質学会
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 1987「始良T n火山灰の14C年代」『第四紀研究』Vol.26 日本第四紀学会
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 1993「四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討ーターゲットロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代ー」『地質学雑誌』Vol.99 日本地質学会
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 1995「南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代」『第四紀研究』Vol.34 日本第四紀学会
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編 2000『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎 2001「始良T n火山灰のC-14年代のクロスチェック(演旨)」『地球惑星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM)2001』Qm-010 日本地球惑星科学連合
- Miyairi,Y.・Yoshida,K.・Miyazaki, Y .・Matsuzaki,H.・Kaneoka,I. 2004「Improved 14C dating of a tephra layer(AT tephra,Japan) using AMS on selected organic fractions」『Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B』

## 第5章 調査のまとめ

城山遺跡第72地点の調査では、旧石器時代から中世以降までの遺構・遺物が検出された。そこで旧石器時代、縄文時代、古墳時代後期から平安時代、中世以降について、まとめを行うことにする。

---

### 第1節 旧石器時代について

---

試掘坑を3ヶ所設定したところ、2号試掘坑から計11点の自然礫が出土した。垂直分布ではV層下部からVII層上部、平面分布では1.6m×1.0mの範囲に散在する。暗赤褐色の礫が確認されたことで、被熱した礫を含む旧石器時代の礫群と推測し、詳細に観察したところ、色素沈着の成因は酸化鉄によるものと判断した。調査地点は谷の斜面地にあたり、含浸した水分中の鉄分が礫に付着したと考えられる。また、その他にも礫が検出されたが、集中した礫群ではないので、自然に流れ込んだものと推察できる。この散在する自然礫を旧石器時代の生活の痕跡とするのは難しい。ただ、近接する第63地点で黒曜石の剥片が集中して確認され、第42地点では旧石器時代の遺構も検出されている。

---

### 第2節 縄文時代の遺構・遺物について

---

#### (1) 土坑について

833号土坑(833D)の1基が検出された。坑底に杭痕と考えられる2本の小ピットがあることから陥穴と考えられる。出土遺物はないが、覆土及び遺構形態から縄文時代と判断した。

#### (2) 埋没谷について

本調査区の南東部に、縄文時代の包含層である黒褐色土が堆積した谷が確認された。谷の主軸はN-17°-Eを指す。傾斜角度は14°で、谷の標高は上端が約10.0m、下端が約8.0mで約2.0mの比高差がある。なお、検出された谷幅は約8.5mであるため、少なくとも全幅18m以上あることが想定される。黒褐色土を主体とする覆土は9層に分層できる。2層から6層で縄文土器の小破片と台石の欠損品が流れ込んだ様相で出土した。2層からは縄文後期の堀之内式・加曾利B式・安行式が、3～5層からは縄文中期の五領ヶ台式・勝坂式・阿玉台式・加曾利E式、6～9層から縄文前期の黒浜式・諸磯式・興津式土器が出土しており、埋没谷の形成時期を窺わせる。

縄文土器の垂直分布位置、及びローム層の重鉱物・火山ガラス比による分析結果から、当時の地形的環境を復元すると、台地上で立川ローム層の標準層位のVII層上部からVI層下部が形成され始めた頃、すなわちAT噴出年代の2.6～2.9万年前の直前頃に谷の堆積が始まり、UG噴出年代にあたる1.5～1.6万年前頃には、本調査地点で確認された埋没谷の姿まで堆積したと考えられる(矢作・石岡 第4章より)。縄文前期の遺物が埋没谷下層より出土していることから、その頃も台地周縁部の開析谷として存

在し、縄文中期頃からⅡ層黒ボク層が堆積し始め、縄文後期でほぼ検出面まで堆積したものと考えられる。古墳時代には集落形成に支障ない地形となり、集落の周縁部になっていたと推測される。この地形を利用して、中世には城山遺跡内に所在する「柏の城」の堀に一部活用されたと考えられる。

---

## 第3節 古墳時代後期から平安時代の遺構・遺物について

---

### (1) 住居跡について

古墳時代後期の住居跡が4軒検出された。いずれの住居跡も上部が後世に削平され、しかも大半が調査区外に延びるため遺存状態が悪く、詳細な時期や機能を把握することはできなかった。

調査区北側に位置する277・278・279 Hは重複関係にあり、そのうち最も古い279 Hは遺存状態が比較的良好で、北壁にカマド、北東コーナーに貯蔵穴が構築されていた。カマドは821 Dに一部切られるが、奥壁への掘り込みは検出された面においては認められない。時期を比定する資料は貯蔵穴から出土した土師器の坏2個体である。2(第19図)の特徴として、推定口径12.0cmで、口縁部は短くツンと外反し、内面と外面の口縁部に赤彩を施す。外面はヘラケズリの後、丁寧なヘラナデを施した6世紀初頭に比定される、いわゆる「比企型坏」である(尾形 1999)。1(第19図)は体部に稜線を有し、口縁部は外上方にやや開き、内面と外面口縁部に赤彩をし、2の「比企型坏」と共伴する、いわゆる「赤色有段坏」である(尾形 1999・2000)。

277 Hは大半が調査区の外側にあり、詳細は不明な点が多い。出土遺物には土師器の壺・甕・高坏・鉢、鉄鎌の破片があるものの、いずれも細片資料であり、時期比定することは困難である。

278 Hは277 Hに切られ、279 Hを切る。上部が後世に削平され、北側半分は調査区外に延びる。付帯施設は確認できなかった。

280 Hは上部が近世以降に削平され、西側半分が調査区外にあるため遺存状態が悪い。平面形は6.3m×6.0m前後の方形もしくは長方形と推測され、中央に地床炉が構築されており、南東コーナーに貯蔵穴があるが、明確な支柱穴は確認できなかった。本住居跡の時期を比定した資料は、貯蔵穴から出土した土師器の坏(第22図)である。その特徴として、内外面に赤彩が施され、外面はヘラケズリ調整、内面はヘラケズリの後粗いヘラミガキ調整を施す。推定口径は12.2cmで、器高は5.8cmと比較的高い形態から、5世紀中葉に比定される「坏形土器」である(尾形 2000)。

本調査地点の周辺における住居跡の検出状況を見てみると、城山遺跡第25地点、中野遺跡第50地点で5世紀中葉から後葉の住居跡が検出されている。また、柳瀬川に北面する台地上の新邸遺跡や中道遺跡でも同時期の住居跡が確認されていることから、集落が広範囲に分布していたことが推察できる。6世紀代の集落が爆発的な広がりを見せる時期については、北西約200mに位置する城山遺跡の集落中心部の規模や数は及ばないものの、南東縁辺部の緩斜面に位置する本調査地点でも、少なからず集落が展開していたものと考えられる。

---

## 第4節 中世以降の遺構・遺物について

---

### (1) 土坑について

中世以降と判断した土坑は14基である。第42地点の土坑分類に当てはめると、B群2類が8基、C群が5基、D群が1基である。

平面形が幅狭の長方形であるB群2類は、近世から昭和の農業に伴う種イモ貯蔵用「たねびつ」と推測されている(尾形・深井・青木 2005)。本調査地点の8基も同様の形態・規模から「たねびつ」であると考えられる。また、821・823・827・831 Dは東西方向に主軸を同じくし、時期的な関連性が窺われる。

平面形が円・楕円形であるC群では、822 Dから15世紀末葉から16世紀初頭に比定される瀬戸美濃窯産の大窯第1段階の陶器の皿(第28図)が出土し、「柏の城」関連の土坑である可能性もある(愛知県史編纂委員会 2007)。

平面形が不整形のD群は828 Dの1基であるが、調査区の南西壁際に一部が検出されたに過ぎないので、性格は不明である。

### (2) 井戸跡について

井戸跡は1基で、出土遺物がなく廃絶時期は不明であるが、55 Mと重複することから、水利用で井戸と溝が同時に併用されていた可能性がある。

### (3) 溝跡について

4条の溝跡が検出され、そのうち56 Mと57 Mの2条から硬化面が確認された。

54 Mと55 Mは埋没谷の傾斜に直交しており、斜面に対して何らかの関連性があると考えられるが、出土遺物がなく、溝の性格を決定づける要素は乏しい。ただ、井戸と近接した位置で検出されていることから、周辺地区の水利と関連する可能性がある。

56 Mは東側で1面、西側で2面の硬化面が検出された。第61・63地点でも硬化面を有する溝跡が確認され、遺構の性格は道路と考えられている。本調査地点の56 Mとは同一遺構ではないが、同様の形態を有することから、56 Mも道路として使用された可能性が高い。また、南東側の埋没谷の傾斜面においては、溝底の硬化面に一定間隔の凹凸が見られ、本遺構との関連性が窺われる。推測されることとして、斜面地における道路登坂の踏み跡の可能性もある。使用された時期については、覆土中から中・近世の土器、本遺構に切られるP 87から龍泉窯の青磁皿が確認されたことから、構築時期の上限は14世紀中葉で、廃絶時期は18世紀代と推察できる。

57 Mは硬化面が僅かに検出され、道路状遺構と考えられるが、出土遺物がなく不明な点が多い。

### (4) 中世以降の遺物について

磁器、陶器、土器、銭貨、金属製品、板碑が出土したが、いずれも小破片であり、出土量も僅かである。

中世の遺物は、表土から銭貨「洪武通宝」(第38図)、P 87から龍泉窯の青磁折縁皿(第36図)、

820 Dからは板碑（第26図）が出土した。これら遺物の年代観（亀井 1981、磯野・伊藤 2007）は「柏の城」の築城時期に相当するので関連性がある資料と言える。

近世の遺物は破片を含めても10点に過ぎない。この僅かな資料から近世を考察することは困難であるが、推察できることは、農業関連の性格を有する土坑が検出されていることから、畑地として土地利用されていた可能性があげられる。

#### [引用・参考文献]

- 尾形則敏 1996『志木市遺跡群VII』志木市の文化財第23集 埼玉県志木市教育委員会
- 1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点—小地域を対象とした編年の確立に向けて—」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
- 2000「志木市における古墳時代の土師器の編年（1）—5世紀から7世紀の坏形土器の変遷—」『あらかわ』第3号 あらかわ考古談話会
- 2007「埼玉県川越市における古墳時代中・後期の様相—集落跡出土の5世紀から7世紀の土師器を中心として—」『あらかわ』第10号 あらかわ考古談話会
- 2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識—（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例として—」『埼玉考古』第43号 埼玉考古学会
- 亀井明德 1981「14・15世紀の貿易陶磁—とくに日本出土の中国陶磁—」『貿易陶磁研究』No.1 貿易陶磁研究会
- 中村倉司 1995「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 田中広明 1999「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向—群馬・埼玉県を中心として—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 磯野治司・伊藤宏之 2007「小川町割谷採集の板碑未完成品」『埼玉考古』第42号 埼玉考古学会
- 愛知県史編纂委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
- 尾形則敏・佐々木保俊 2001『志木市遺跡群11』志木市の文化財第30集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・徳留彰紀 2011『城山遺跡第63地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第46集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2005『城山遺跡第42地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2008『城山遺跡第61地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第16集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2009『埋蔵文化財調査報告書4』志木市の文化財第40集 埼玉県志木市教育委員会





版 圖





1. 調査区近景（北から）



2. 1号試掘坑南壁断面（北から）



3. 2号試掘坑礫出土状態（北から）



4. 2号試掘坑南壁断面（北から）



5. 3号試掘坑コラムサンプル採取地点（北から）



6. 833号土坑（東から）



7. 277号住居跡（北東から）



1. 277号住居跡遺物出土状態（北から）



2. 278号住居跡（西から）



3. 279号住居跡（南西から）



4. 279号住居跡カマド（南西から）



5. 279号住居跡貯蔵穴遺物出土状態（南から）



6. 280号住居跡（東から）



7. 280号住居跡炉跡（東から）



8. 280号住居跡貯蔵穴遺物出土状態（南から）



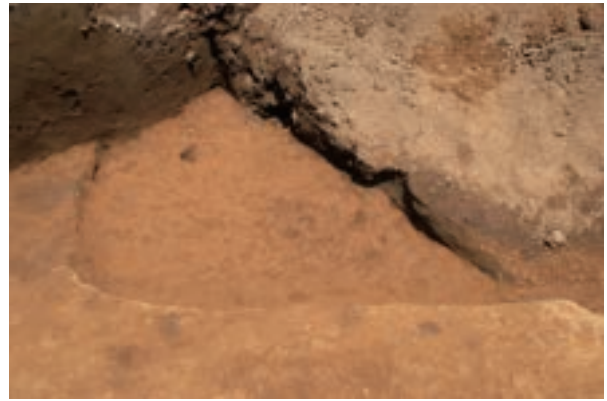
1. 819号土坑（西から）



2. 820号土坑（東から）



3. 821号土坑（西から）



4. 822号土坑（南から）



5. 823号土坑（西から）



6. 824号土坑（西から）



7. 825号土坑（西から）



8. 827号土坑（南から）



1. 828号土坑（東から）



2. 829号土坑（西から）



3. 831号土坑（東から）



4. 40号井戸跡（南から）



5. 54・55号溝跡（西から）



6. 56号溝跡硬化面1検出状態（南東から）



7. 56号溝跡硬化面2検出状態（南東から）



8. 56号溝跡硬化面2検出状態（北西から）



1. 埋没谷（北から）



2. 埋没谷南壁断面（北から）

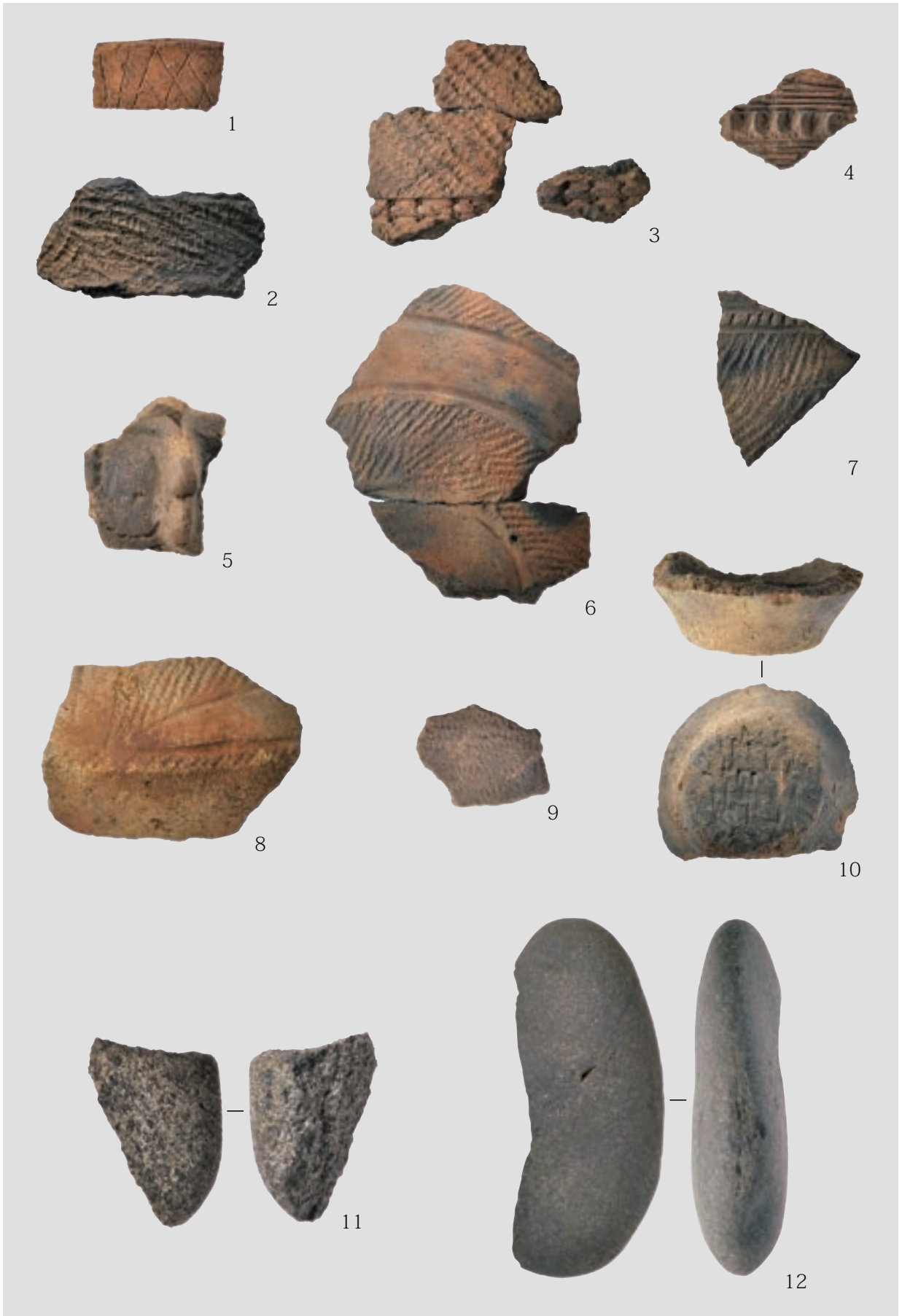




1. 調査区東側全景（南西から）



2. 調査区西側全景（北から）



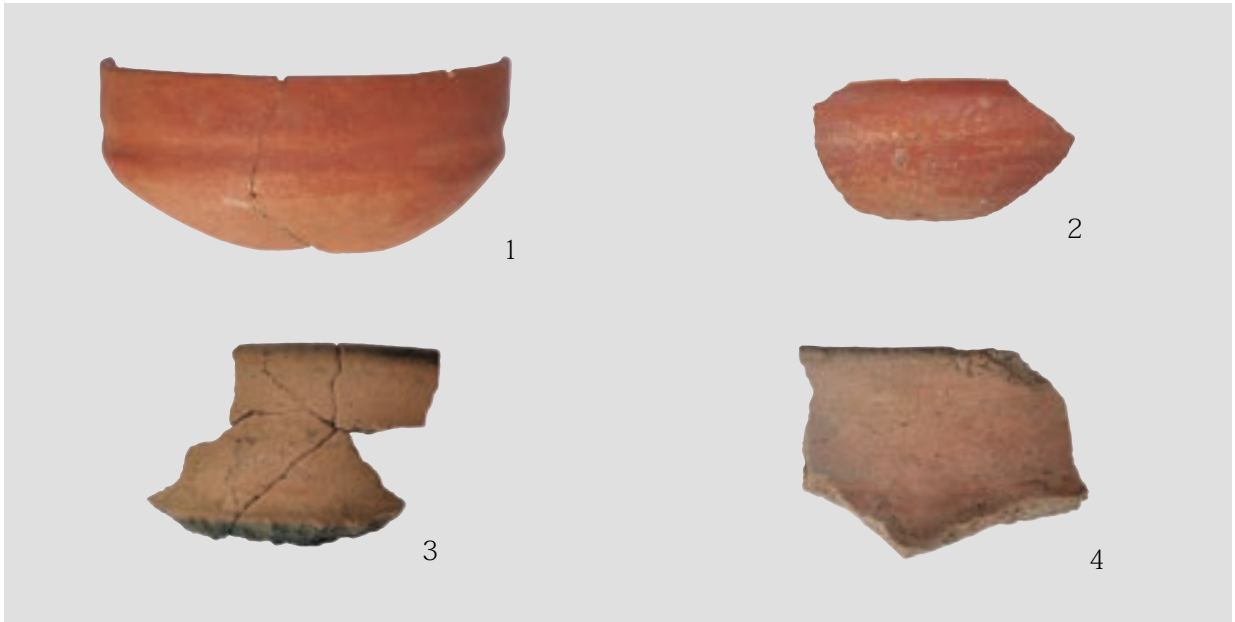
1. 埋没谷出土遺物



1. 遺構外出土遺物



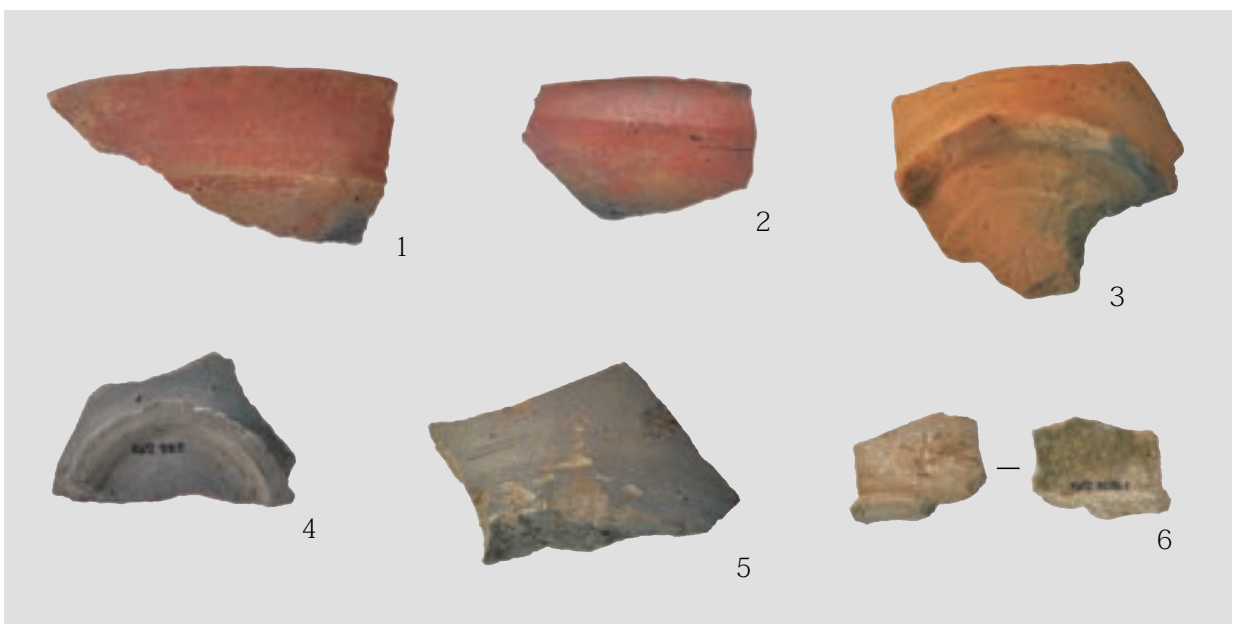
2. 277号住居跡出土遺物



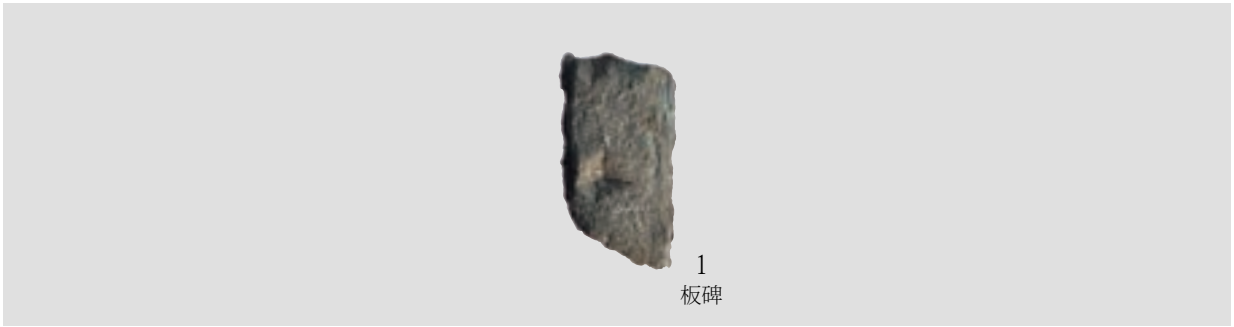
1. 279 号住居跡出土遺物



2. 280 号住居跡出土遺物



3. 遺構外出土遺物



1. 820号土坑出土遺物



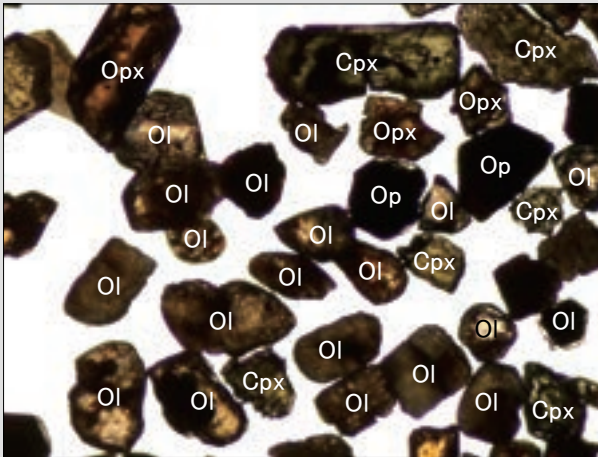
2. 822号土坑出土遺物



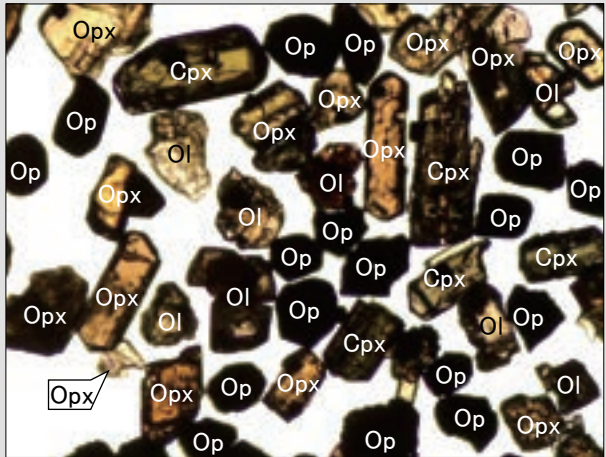
3. 87号ピット出土遺物



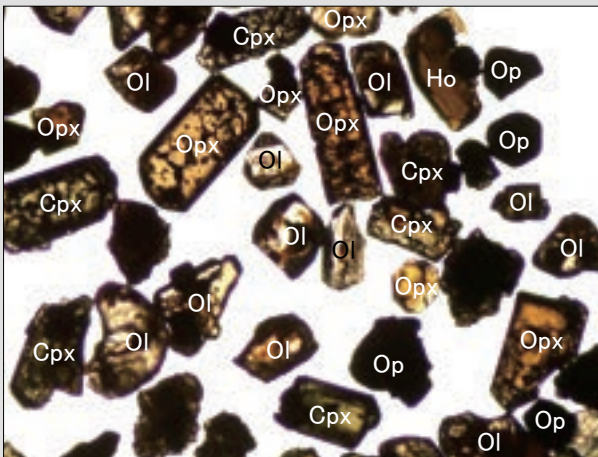
4. 遺構外出土遺物



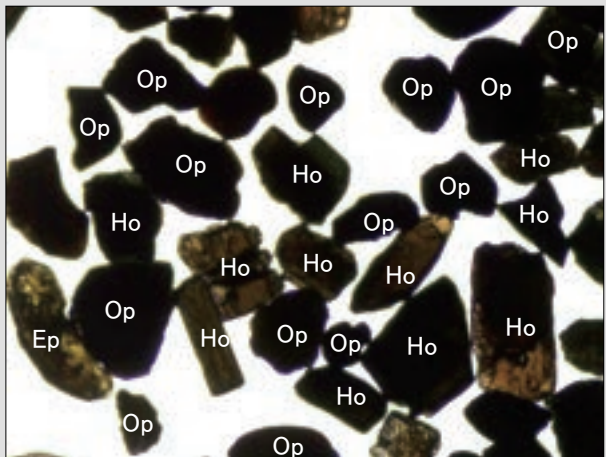
1.重鉱物(3号試掘坑Ⅲ層;2)



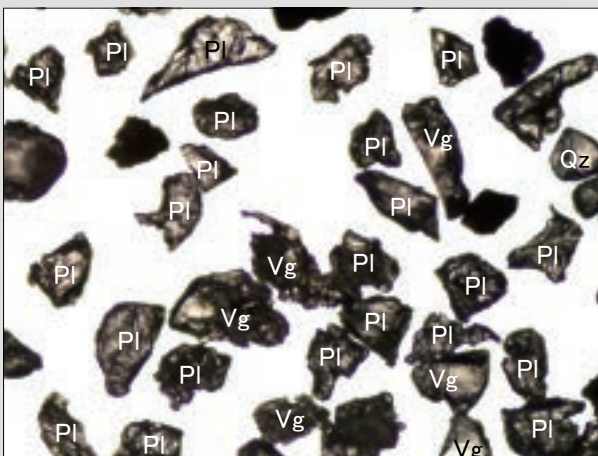
2.重鉱物(3号試掘坑Ⅵ層;8)



3.重鉱物(3号試掘坑Ⅸa層;13)



4.重鉱物(3号試掘坑Ⅸb層下位;16)



5.UGの火山ガラス(3号試掘坑Ⅲ層;1)



6.ATの火山ガラス(3号試掘坑Ⅶ層;10)

Ol:カンラン石. Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Ho:角閃石. Ep:緑レン石. Op:不透明鉱物.  
Vg:火山ガラス. Qz:石英. Pl:斜長石.

0.5mm

1. 重鉱物・火山ガラス



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しろやまいせきだいななじゅうにちてん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	城山遺跡第72地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財				巻次		第49集	
編著者名	尾形則敏 徳留彰紀 村上孝司 青池紀子 矢作健二 石岡智武							
編集機関	志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1-1-1 TEL048(473)1111							
発行年月日	平成24(2012)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃〃	〃〃			
しろやまいせき 城山遺跡 (第72地点)	しきしかしわちよう 志木市柏町 3丁目2655 -1	11228	09-003	35° 49' 53"	139° 34' 17"	20110606 ~ 20110715	354㎡	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しろやまいせき 城山遺跡 (第72地点)	集落	縄文時代 古墳時代後期 ~ 平安時代 中世以降	土坑 1基 住居跡 4軒 ピット 12本 土坑 14基 井戸跡 1基 溝跡 4条 ピット 226本	土器・石器 須恵器・土師器・灰釉陶器・ 金属製品 陶器・炆器・磁器・土器・石 製品・金属製品・板碑		埋没谷を検出 住居跡は古墳時代 後期が4軒 溝跡2条が道路状 遺構		
要約	<p>本調査地点は周知の遺跡である城山遺跡の範囲に属し、埼玉県志木市柏町3丁目に位置する。</p> <p>本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北端の野火止台に立地しており、本調査は共同住宅建設に伴う事前調査である。</p> <p>調査の結果、遺構は縄文時代の土坑、古墳時代後期から平安時代の住居跡・ピット、中世以降の土坑・井戸跡・溝跡・ピットが検出された。遺物は旧石器時代の礫、縄文時代の土器・石器、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、古墳時代後期から平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器・金属製品、中世以降の陶器・炆器・磁器・土器・石製品・金属製品・板碑などが出土した。</p> <p>今回の調査成果は、各時代の遺構・遺物とも、そのほとんどがこれまで城山遺跡の調査成果を追認できる資料である。また、縄文時代に開析していた谷の一部が検出され、埋没していく時期的な経過も、縄文土器の出土傾向により概ね明らかになった。</p>							



志木市の文化財 第49集

## 城山遺跡第72地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会  
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号  
発行日 平成24(2012)年3月31日  
印刷 能登印刷株式会社